No. 159

2025.4

目　次

〈表　紙〉悠久の大地に佇む国際中高の学び舎
鎌田伸一
（同志社中学校・高等学校事務長）
辻　英俊
（株式会社上原フォートスタジオ）

〈表紙裏〉
新島　襄の言葉
三宅　威仁
（大学神学部教授）

〈口　絵〉
■法人
同志社墓地への山道整備が 2025 年 1 月に完成／新島旧邸における八重茶会
■大学
スポーツフェスティバル 2024 を開催
■女子大学
アニバーサリー・ホームカミングデー 2024
■中学校・高等学校
「ウェズリーカレッジ交換留学プログラム」
■香里中学校・高等学校
文化祭
■女子中学校・高等学校
「2024 学園祭」
■国際中学校・高等学校
WWL(World Wide Learning) の流れをうけた授業
■国際学院
初等部：『6 年生修学旅行』
国際部：『DISK School Trip』
■小学校
「避難訓練」
■幼稚園
遠足（府立植物園）／収穫感謝祭

「私の志」インタビューの 2 人

私の志
日本の宇宙ビジネスをリード
未知のビジネスの宝庫である宇宙に挑み続ける同志社人……世古　龍郎さん　4
いつかは報道番組のキャスターに
武器にも凶器にもなる「言葉」と真摯に向き合う放送人……小西　鼓子さん　8

特集
特集座談会
同志社の環境教育を考える……赤尾聡史／田邉利幸／髙木毬子／古本　大　12

私の研究・私の授業

「絵に描いた餅」では終わらせない……大学法学部教授　梶山　玉香　22
「わかっちゃいるけどできない」を支援する……大学心理学部准教授　大屋　藍子　25
描かれた古典文学の世界……女子大学表象文化学部准教授　宮腰　直人　28
リコーダー～その歴史と音楽授業における取り組み～……香里中学校・高等学校教諭　水上　陽一　31
女子校におけるダンスの授業の意義……女子中学校・高等学校保健体育科　那須　文惠　34
「社会にひらく」社会科授業をともにつくる……小学校教諭　東宇　孝浩　37

レクチャー

同志社香里中学校・高等学校の開校への歴史背景……同志社社史資料センター　40

建物案内

体育棟・部室棟（同志社国際中学校・高等学校）……49
静和館（同志社女子中学校・高等学校）……50

同志社の逸品

George Cruikshank Collection について……女子大学学術情報部ライブラリーサービス課　51

コラム・エッセイ

「103万円の壁」の引上げ……大学法学部法律学科教授　倉見　智亮　53
「手の保養」を考える……女子大学現代社会学部現代こども学科教授　竹井　史　54
国語表現法　広告講座……中学校・高等学校国語科教諭　鴻池　雅子　55

新刊紹介

ルビコン川を渡る　新島襄を語る・別巻（七）／本井康博著
中国共産党の神経系／周　俊著
茶道の文化経済学／太田直希著
イギリス湖水地方　ピーターラビットのガーデンフラワー日記／臼井雅美著
感情のアーカイヴ／菅野優香著
忘れられたアダム・スミス／山森亮著
大統領たちの五〇年史／村田晃嗣著
日本の製紙業における合併効果―生産性と効率性の計量分析／上田雅弘著
データとケースでわかるヨーロッパ企業／和田美憲著
リサーチ・クエスチョンとは何か？／佐藤郁哉著
谷崎源氏の基礎的研究／大津直子著
『困難を抱える子どものための伝わるアセスメントシートの書き方：専門家・コーディネーターと効果的に連携する！』／勝浦眞仁著
56

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念　全同志社合唱祭開催―「合唱の同志社」、ここに集う。…法人事務部　創立150周年記念事業事務室　62
同志社大学政策学部創立20周年事業について……大学政策学部長　足立　光生　65
アリス・J・スタークウェザー氏のご子孫のランダル・ファウラー氏がご来校…女子大学広報課・史料センター　67
生徒がありのままの表現を追求する鑑賞と表現の試み―合同会社 amiami との企業コラボ授業―……中学校・高等学校美術科教諭　橋本　侑佳　70
生島吉造・稲子・吉秋記念　同志社香里電子図書館の開設を記念して…香里中学校・高等学校司書教諭　柳井　孝太　73
ワンダーフォーゲルクラブとともに歩む……女子中学校・高等学校元社会科教諭・クラブ顧問　藤田　一登　76
個性を伸ばし興味を追求できる一貫教育　～きらり輝く生徒へのインタビュー～…国際中学校・高等学校教頭　二股　一郎　79
An Unlikely Friendship Doshisha International Academy Elementary School, Director of Academic Affairs…国際学院学務幹事　Scott Hemphill　83
収穫感謝を通じて―同志社小学校の取り組み―……小学校教頭　田中　雅裕　84
クリスマス礼拝・祝会……元幼稚園教諭　竹中　琴恵　86

特別寄稿

同志社創立150周年記念事業　新島襄のラットランド・アピール150周年記念ツアー……大学キリスト教文化センター准教授　森田　喜基　88

同志社の一貫教育　hitohito-Li

……同志社一貫教育探求センター所長　大久保雅史　93

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学＝同志社大学、女子大学＝同志社女子大学、中学校・高等学校＝同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校＝同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校＝同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校＝同志社国際中学校・高等学校、小学校＝同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部＝同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園＝同志社幼稚園

●執筆者等の役職・職位は 2025 年 4 月 1 日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。

新島　襄の言葉

「耶蘇世ニ降リ自由顕［ル］、耶蘇教ナキ国ハ自由ナシ」

（1880 年 10 月 21 日に今治教会で行った演説「霊ノ学問ナカルベカラス」の一節。元々は新島がアーモスト大学において恩師 J･H･シーリーから学んだ言葉。『新島襄全集』第２巻、385 ページ）

同志社大学神学部 教授
三宅（みやけ） 威仁（たけひと）

「自由」という言葉を、余りにも多くの現代人が「他者から妨害されることなく自分の欲望を満たし得る状態」と理解している。しかし、キリスト教の文脈においては、それは「欲望の奴隷になっている状態」にしか過ぎない。「真正の自由」（新島の遺言にある言葉）とは、「道徳的な決断において、自らの意志で、自己本位的な欲望を断ち切って善を選び取ること」を意味する。即ち、「真正の自由」とは「自己中心性からの自由」であり、「神と隣人に仕えるための自由」である。しかし、人間は弱い存在で、自力で利己的な欲望を断ち切ることができない。その弱さは従来「罪」と呼ばれてきた。人間はいかにして罪から解放され得るのか。

聖書には「真理はあなたたちを自由にする」と書かれている（ヨハネ伝８：32）。「真理」とは、イエス・キリストにおいて現された神の愛に他ならない。新島が「聖書の中の太陽」と呼んだ「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という聖句（ヨハネ伝３：16）は、キリスト教の核心を言い表わしている。イエスがこの世に現れ、人々を教え諭し、私たちの罪を贖うために十字架を担われたこと、そして、そのイエスの生涯と死と復活に全人類の救済を願う神の愛が現れていること――この「真理」を知れば、「罪人」でありながら赦された喜び・感謝が私たちの心中に湧き上がり、善（＝神と隣人への奉仕）への原動力となる。正にイエスがこの世に来りて真正の自由が可能になったのである。

学校法人 同志社
The Doshisha

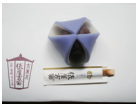
同志社墓地への山道整備が2025年1月に完成

若王子神社から同志社墓地へと続く山道の多くは未整備の状態でした。歩行者が安全に、かつ歩きやすいように、同志社創立150周年記念事業の一環で山道の整備工事を行い、2025年1月に完成しました。

新島旧邸における八重茶会

2024年10月19日(土)、同志社創立150周年記念事業として「新島旧邸における八重茶会」が学校法人同志社と同志社大学茶道部の共催、同志社社史資料センターの協力により開催されました。

同志社の創立者、新島襄の妻・八重は、襄の死後、裏千家十三代円能斎宗匠の直門として、茶名「宗竹」を授かりました。八重は自宅「新島旧邸」を改造し、茶室「寂中庵」を設け、たびたび茶会を催しました。同志社大学茶道部には八重ゆかりの茶器が伝来しています。



この茶会には、八田英二総長・理事長、小原克博大学長をはじめ、同志社内各学校の学生、生徒、児童、卒業生、教職員を対象に募集をし、合わせて約40名の同志社人が参加しました。掛軸には「紫気満」が掛けられました。「紫気」は吉兆の前触れを意味し、来年の同志社創立150周年の前触れを連想させます。菓子は創業1755年「京菓子司 俵屋吉富」にこの日のために用意していただいた同志社の徽章をイメージした「三友の集い」が用いられ、「学生・卒業生・教職員の三者の同志社人が絆を育む」という思いが込められています。

茶会後には、同志社社史資料センター調査員による新島旧邸見学が行われました。

詳細は右記「創立150周年記念ホームページ」をご参照ください。

150th

https://150th.doshisha.ed.jp

同志社大学
Doshisha University

スポーツフェスティバル2024を開催

2024年11月3日(日)、京田辺キャンパスにおいて、スポーツフェスティバルを開催しました。2022年度からスポーツを通じた地域連携イベントとして体験教室を実施しています。今年度は地域の方々に体育会クラブの練習見学や体験をしていただき、集めたスタンプの数で景品を贈呈する体育会スタンプラリーを実施しました。当日は12クラブが練習を公開し、6クラブが体験教室を行いました。デイヴィス記念館で行われたバスケットボール教室では37名の子供たちが参加し、大学生との練習の後、最後に大学生と試合を行いました。その他の体験教室にも合計99名の参加があり、子供たちは大学生の指導を受けながら笑顔でスポーツを楽しみました。子供たちへの指導を通じて、体育会の学生たちも新たな気づきを得られたことと思います。次年度もスポーツを「する人」、「観る人」、「支える人」のつながりを生み出すイベントを目指します。

同志社女子大学
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Founded in 1876

アニバーサリー・ホームカミングデー2024

10月27日(日)、今出川キャンパスで「アニバーサリー・ホームカミングデー2024」を開催しました。
2026年に迎える創立150周年に向けた記念イベントを「アニバーサリー」として、卒業生を母校にお迎えする「ホームカミングデー」と同日開催し、創立記念礼拝や創立150周年記念事業を紹介いたしました。栄光館ファウラーチャペルで行われた創立記念礼拝では、「新たな息吹に誘われ～E.L.ヒバード初代学長の夢に連なり～」と題して小﨑眞学長が奨励を行いました。また、本学のあゆみを知るパネル展示や記念写真撮影スポット、在学中の思い出を共有するメッセージボードの設置など、本学の歴史を卒業生の皆さまと振り返る機会になりました。
その他のイベントとして、在学生・卒業生によるステージパフォーマンスや、学科の学びを紹介するワークショップ、パイプオルガン見学会、同志社女子大学女性アクティベーション講座や同志社女子大学キャリアサロンなどの講演会も行いました。
イベント運営には、各学科の教員や在学生が携わり、当日は澄み渡る秋空のもと約550名の卒業生およびご家族、ご友人、在学生や在学生ご父母等の皆さまにご来場いただきました。

「ウェズリーカレッジ交換留学プログラム」

1992年に始まったオーストラリアにあるウェズリーカレッジとの交換留学は、4年間オンラインでの交流にとどまっていましたが、今年度ようやく対面での交流が可能となりました。7月末、13名の同志社高校生が渡豪し、ウェズリーカレッジで学びました。「経済学」や「歴史学」といった社会科の科目だけでなく、「数学」や「化学」といった幅広い分野の授業を学び、最初は慣れない英語に苦戦しながらも、バディと絆を育みながら知識を蓄えました。また、「演劇」や「写真現像」の授業にも参加させていただき、自己を表現する力の重要性や自分自身の世界の見え方を現像や視角の工夫を通して、他者に伝えていく方法を学ぶことができました。

学校外においてもバディと共にメルボルンシティを探索したり、観光名所を訪れたりしたことで、現地の景色や文化を吸収することができ、異文化交流の楽しさを改めて認識することができた留学となりました。

9月末、ウェズリーカレッジからの留学生を受け入れました。同志社高校生はバディと共に授業を受け、休日にはオーストラリアに留学したメンバーが嵐山の散策にも同行し、仲を深めました。また、留学生の方々には特別授業である「生け花」や「日本舞踊」、「書道」を通して、日本の文化を学んでいただきました。最終日には、同志社高校生がお別れ会を企画し、日本の伝統的な遊びや日本に関するクイズを通して、思い出を作りました。

対面で、現地で、実際に交流できたからこそ、言葉だけでは表せない相手の表情やボディランゲージから、気遣いや温かさを感じ取ることができ、慣れないながらも積極的に英語で会話しようとする生徒の様子を見ることができました。自分たちの殻を破り、人としても一回り大きく成長することができた貴重な留学プログラムとなりました。

文化祭

2024年度文化祭が11月1日(金)・２日(土)・５日(火)の三日間にわたって開催されました。

今年度のテーマ「Co.Rebron(コー・リボーン)」には、「Co：ともに」と「Reborn：生まれ変わる」という意味があり、開催期間の半日延長や模擬店の一部復活など、コロナ禍後に新しく生まれ変わった同志社香里の文化祭であるというメッセージが込められていると同時に、「コーリ」の音を掛け合わせたものとなっています。二日目の11月2日(土)は気象警報発令により残念ながら途中で中止となり、一部のプログラムが5日(火)に延期して実施されましたが、模擬店や展示、演劇や有志団体によるステージなど、バラエティに富んだクオリティの高い内容で大いに盛り上がりました。

当日までには、中学生徒会・高校生徒自治会の役員が中心となり多くの試行錯誤を経ながら準備に取り組みました。参加生徒や教職員、PTA役員の方々の協力などもあり、盛況のうちに終えることができました。

「2024学園祭」

10月2日から5日まで学園祭が行われました。合唱コンクール、中2・中3展示コンクール、授業・クラブの展示、栄光館・静和館ホール・アトリウムでの催し物など、生徒の様々な活動の発表の場となりました。また、5日（土）には父母の会のバザーも開催され、生徒の家族や受験希望の小学生親子で賑わいました。体育祭が雨の影響で8日に延期されましたが、無事にすべてのプログラムを終えることができました。

選択書道の授業作品展示

合唱コンクール

体育祭

体操クラブの演技発表

管弦楽クラブの発表

同志社国際中学校・高等学校
DOSHISHA INTERNATIONAL JUNIOR / SENIOR HIGH SCHOOL

WWL(World Wide Learning)の流れをうけた授業

2020年度に文部科学省の採択を受けたWWL(World Wide Learning)事業は、高一では探求学習として、高二・高三では選択科目として発展しています。

本校コミュニケーションセンターでの授業風景

大学田辺キャンパスを借りての京田辺市長の講演を聞く高校一年生

フィールドワーク
環境先進国のデンマークへ出向き、現地の高校生と交流をする生徒たち

同志社国際学院
Doshisha International Academy

初等部:『6年生修学旅行』

初等部6年生は、9月24日から27日の3泊4日の日程で、鹿児島・熊本方面に修学旅行に出かけました。「知覧特攻平和会館」(鹿児島)や「山の中の海軍の町にしき　ひみつ基地ミュージアム」(熊本)等で平和について学び、慈恵病院では命の大切さについて学びました。天候にも恵まれ、なし・ブドウ狩り、シークルーズ、阿蘇登山、熊本城と、楽しく充実した活動盛りだくさんの修学旅行でした。

国際部:『DISK School Trip』

DISK students started off the new school year with an enriching experience at Doshisha Biwako Retreat Center. The main focus was on promoting teamwork and social skills. The other key objectives were fostering independence, encouraging physical activity, and building community and memories. we all had a fantastic time!

「避難訓練」

11月19日（火）２校時開始後に家庭科室から火事が発生し、燃え広がったとの想定で避難訓練を実施しました。児童は先生の指示に従って速やかにグランドに避難することができました。当日は左京消防署の皆様に講評をいただくとともに、消火器の使用訓練も実施しました。

遠足（府立植物園）

10月24日（木）、地下鉄に乗って全学年で京都府立植物園に遠足に行きました。1学期とは違い今回は公共交通機関を使いましたが、他のお客さんの存在や公共の場での振る舞いを意識しながらの移動でした。年長児は年少児と手をつなぎ、電車の揺れや階段の上り下りの際には励ましたり手伝ったりする姿が見られ頼もしく感じました。植物園では学年ごとに散策に出かけ、色とりどりのバラを見たり、木々がうっそうとした狭い道を通って冒険気分を味わったり、時間を忘れて色々な場所を楽しく散策しました。園外で子ども同士で声を掛け合ったり助け合ったりしながら、より一層関わりを深める機会となりました。

収穫感謝祭

11月5日（火）に、園内のリチャーズホールにて収穫感謝祭を行ないました。各家庭から野菜や果物を持ち寄りホールに捧げてから、園児全員で合同礼拝の時間をもちました。聖話を聞きながら、日頃当たり前にいただいている食べ物を大切に育ててくださった方々がいることに気付き、農作物を作っている人々や今年も豊かな恵みをくださった神様、いつも豊かに食べ物を食べられることへの感謝の気持ちをもつことができました。

インタビューの２人

私の志

日本マイクロソフト株式会社勤務

世古（せこ） 龍郎（たつろう）さん

クラウドや AI の技術で宇宙ビジネスを推進。ロケットを打ち上げたり宇宙飛行士が活躍したりするだけでなく、宇宙ビジネスにはとても広がりがあります。GPS や天気予報から、スマート農業、防衛事業まで。「今はない」分野を切り拓くべく、挑戦を続けています。

1989 年、大阪府生まれ。2007 年に同志社大学工学部インテリジェント情報工学科に入学し、３年次に The University of Montana へ１年間留学。2012 年に卒業後、日本マイクロソフト株式会社に入社。技術部門で６年半エンジニアおよびテクニカルリードとして活躍。その後、官公庁部門に異動し、防衛・宇宙領域の技術戦略を３年半担当。マイクロソフト本社の宇宙領域開発部門に異動し、プログラムマネージャーおよび日本の宇宙領域リードとして宇宙事業を推進。2023 年に退職し、他社でアジアの宇宙企業の大規模案件を推進。2024 年にマイクロソフトに復職し、ビジネス開発マネージャーとして宇宙を含む防衛インダストリーを担当。

Interview

インタビューの２人

私の志

チューリップテレビ　アナウンサー

小西（こにし） 鼓子（ここ）さん

「鼓子（ここ）」という名は祖父がつけてくれました。鼓のように打てば響くような人に、そして人を鼓舞するような人にと。大変な仕事だなと思うこともありますが、視聴者の皆様からいただく応援メッセージの一つひとつに、私の方が鼓舞されています。

1997年4月27日生まれ。京都市出身、富山市在住。同志社女子中学校・高等学校卒業後、同志社大学商学部に入学。2020年3月に卒業後、チューリップテレビ報道制作局所属のアナウンサーに。この春で6年目を迎える。担当番組は「THE TIME,」（午前5時20分～）中継リポーター、「ミタイノコレクション」（土曜午後4時30分～）MC、「柴田理恵認定！ゆるゆる富山遺産」MC、「N6」中継リポーター・定時ニュース。

Interview

私の志

日本の宇宙ビジネスをリード

未知のビジネスの宝庫である宇宙に挑み続ける同志社人

世古（せこ）龍郎（たつろう）さん（ビジネス開発マネージャー）

IT業界のトップを走る企業に入り、「防衛・宇宙×IT」で新ビジネスを開発し続ける卒業生がいます。現代の宇宙ビジネスと今後の可能性、そしてご自身のグローバルな行動力を育てた背景を伺いました。

学生時代から目指したグローバルキャリア 会社でも自ら宇宙関連ポジションを開拓

――大学ではどんな分野に興味を持って学ばれましたか。

世古　私は同志社香里中・高校を経て大学の工学部インテリジェント情報工学科に進学しました。主にIT分野、特にプログラミングやシステム設計を中心に学びを深めました。もう一つ力を入れたのは海外経験です。長期休暇を利用して短期留学を重ね、さらに1年間休学してアメリカのモンタナ大学に学部留学もしました。目的は国際力を高めることでした。学生時代からグローバルな行動力、技術力、

リーダーシップの3つを重視し、インターンも日系企業のニューヨークオフィスなど4社で経験させていただきました。将来的には海外で働きたい、海外と関わる仕事がしたいという希望を持っていました。世界各地40か国以上を旅行してできた友だちの存在も財産です。

――宇宙へのご関心はいつからおありだったのですか。

世古　おそらく小学生の頃からです。本や映画を観てロケットに興味を持ったり、アトムではありませんが、自分自身がロケットのような存在になって宇宙へ行く時代が来るだろうと未来を想像したり。当時は天文系やロケット工学的な分野に興味がありました。高校以降はサッカーの部活やITなどに興味が向いていましたが、日本マイクロソフトに入社後、2018年に防衛・宇宙領域の技術戦略を担当できる官公庁部門へ、自分で手を挙げて異動しました。そこから改めて宇宙の実態や広がりを知り、どう活用できるのか、どのようにITと絡めていけるのかを考え出したあたりから、真剣に宇宙の勉強を始めました。マイクロソフトが宇宙事業への参入をアナウンスしたのは2021年。当時はまだアメリカの本社組織でしか動きがなかったので、自分から積極的に動き、本社に対して日本における宇宙ビジネスのプランを示して新しいポジションを作ってもらいました。

――素晴らしい行動力ですね。宇宙ビジネスについて、分かりやすく教えてください。

世古　とても広範囲に及びます。身近なところでは人工衛星との通信を利用するGPSもそうですし、天気予報も衛星から撮った地球の画像を利用していますよね。その衛星画像を分析して、例えば農作物の育ち具合を調べるなど、農業のモニタリングも行われています。センサーを使えば土壌成分の分析もできるし、農薬の散布場所や量も導き出せる。他にも例えば、もうすぐキャベツがたくさん収穫できるから、広告会社はそろそろ回鍋肉（ホイコーロー）の広告を打つといった先回りができますね。最近では漏水検知も衛星データで可能になりました。衛星レーダーの反射特性を解析し水道水と非水道水を見分ける事で、漏水箇所が分かるようになり、衛星データによる業務の効率化が進んでいます。このように本当に範囲が広いので、私自身は特定の分野の専門家になるのではなく、宇宙ビジネスを全般的に理解することを目指し、各分野のスペシャリストと協働してビジネスを進めていくやり方に注力しました。

宇宙ビジネスで日本の世界進出を支えたい

――現在取り組んでおられるお仕事を、可能な範囲で教えてください。

世古　防衛・宇宙領域のお客様を対象としたビジネス開発を担当しています。具体的なお話はなかなか難しいのですが、例えば日本企業に海外の最先端ソリューションを紹介したり、海外のお客様と連携してビジネス拡大の支援をさせていただいたりしています。もう少し具体的に言えば、複数の国が重要な場面で協業する際は、共同インフラやセキュリティーシステムに用いるＩＴ技術を支援するなどしています。防衛領域は国防として非常に重要ですし、宇宙領域はファイナル・フロンティアといわれるように、今後の拡大が非常に期待されています。政府も宇宙戦略基金をスタートさせて宇宙ビジネスの強化に乗り出しました。今や宇宙に関する技術は国際競争力に直結していますから。

――まさに最先端を行くお仕事ですね。今のやりがい、夢は何ですか。

世古　防衛分野、宇宙分野ともに、日本のビジネスの発展に貢献しているという点でやりがいを感じます。特に宇宙分野は、挑戦し続けられるという環境がすごく面白いですね。宇宙事業のトップを走るのは、やはり経済力のあるアメリカや中国ですが、全然進んでいない国も多い。その中で日本には古くからロケットビジネスをはじめとして多様な宇宙ビジネスが既にあるので、多くのチャンスがあると思います。世界をリードするような大企業やスタートアップ企業も多い。そのような環境で宇宙とＩＴを掛け合わせ、まだ世界で実現していない新しい宇宙事業を進めていきたいと考えています。ただ、何もないところにビジネスを創出していくにはもっと実行力が必要だと考え、今年から海外のＭＢＡプログラムに入学して勉強中です。

――原動力は何ですか。

世古　学生時代からグローバルな生き方に関心がありましたが、変わらないのは日本への思いです。今の私という人間を形成してくれたのは、この日本。その大好きな日本に貢献し、この国をもっと良くしたいという思いです。同志社人としても、多くの卒業生の皆さんのように活躍できればと願っています。

――同志社人の活躍といえば２０２４年１月、生命医科学部の渡辺公貴教授らが開発した世界最小の月面探査ロボット「ＳＯＲＡ-Ｑ（ソラキュー）」が、月面着陸と月面撮影に日本製として初めて成功しました。あのニュースを、どうご覧になりましたか。

世古　すごく嬉しかったですね。月のビジネスやその先に

あるものを考えると、とても心が躍ります。月面探査を行う企業は、その先に宇宙空間で産業革命を起こしていこうというビジョンを持っているんですね。地球上でできなくても宇宙では可能な事があるし、地球にはない鉱物が宇宙にある可能性もある。もしかすると、石油の代わりになるものがあるかもしれない。日本でも月面探査のワーキンググループには、多くの企業が参画しています。自動車メーカーが月を走る車を開発していたり、ゼネコンが月に建物を造る準備をしていたり。だから今回のSORA-Qの成功は、月面活動の最初の手がかりになったという意味ですごいです。今後を期待しています。

――志をお聞かせください。

世古　日本の宇宙ビジネスを発展させるために、挑戦と成長を続けることです。

――同志社で過ごされた日々も、そこへ関係していますか。

世古　自由主義の中でいろんな事にチャレンジさせてもらいました。自由・自治・自立の精神を同志社で育てていただいたことは、私のコアな部分に大きく関わっています。自由とは制限のないことではなく、良心に基づいたもの。それが自分を律する力になり、挑戦の原動力になり、社会に出たとき人からも信用していただけるのだと思います。

大学で知り合った友人たちの活躍をおりに触れて知ることも、支えや励みになっています。

――読者へメッセージをお願いします。

世古　社会で得た多くの経験を通じて、今の自分があります。変わった部分もありますが、コアな部分、つまり志は変わっていないことを改めて感じました。志があるからこそ行動指針があり、困難に直面しても自分を支える力になる。強い意志と情熱を注ぎ続けながら、一貫して進めるのだと思います。

――いつか宇宙に行ってみたいですか。

世古　行ってみたいではなく、行くだろうと思っています。既に日本の旅行会社も宇宙旅行の事業化を進めています。今の技術が問題なく発展すれば、宇宙旅行は特に難しいものではなくなると思いますよ。

――本日はありがとうございました。

（2025年1月10日、東京にて）

私の志

武器にも凶器にもなる「言葉」と真摯に向き合う放送人

いつかは報道番組のキャスターに

小西 鼓子（ここにし ここ）さん（アナウンサー）

社会問題に関心を抱いたことを契機にアナウンサーを志し、夢を叶えた卒業生を紹介します。京都に生まれ、富山という新たな土地で受け入れられるために努力を重ね、今では多くの視聴者から応援されるようになりました。次の大きな夢を目指して精進する日々を伺いました。

ハンセン病問題の学びを契機にアナウンサーへの道を志す

――同志社女子中・高校のご出身です。商学部という選択も含めて志望動機を教えてください。

小西　自宅がとても近かったのも大きな理由ですが、小学生のときオープンキャンパスや文化祭に行き、栄光館の品格や、先輩たちがキラキラ輝いている姿に感銘を受けました。商学部を選んだのは、同じく本学商学部の卒業生だった祖父の影響が大きかったかもしれません。学部の歴史が100年以上あって横のつながりが強いし、いろんなジャ

ンルに挑戦できて視野が広がるからと勧められました。

――大学ではどんなテーマに興味を持って学ばれましたか。

小西　金融です。実家の近くにいわゆるシャッター通りがあり、どうすればまた活気ある商店街に戻せるかという課題に興味を持ちました。五百旗頭真吾教授の金融ゼミに所属し、グループディスカッションや他大学を交えてのディベート大会などで大いに勉強させていただきました。同志社では中学から大学までを通じて、自由な校風の中で自分の「好き」を伸ばせたと思います。今も中高の事務室や大学の研究室を訪ねると先生が温かく迎えてくださり、自分の居場所の一つのように感じます。

――アナウンサーを目指された経緯をお聞かせください。

小西　小学生のとき皆の前で話す機会があり、保護者の方々からほめていただきました。そのとき、人前で話すのが好きかもしれないと思ったのが最初です。ニュースを読むアナウンサーの姿もかっこいいと思っていました。そして高校2年のとき、キリスト教の授業でハンセン病について学ぶ機会がありました。大正時代に同志社女学校を卒業された井深八重さんが、いったんハンセン病と誤診され、のちにハンセン病患者の救済に生涯を捧げたという話です。その後、有志で東京の多磨全生園（たまぜんしょうえん）という国立療養所に行き、ハンセン病を経験された方たちにお話を伺うなどして学ばせていただきました。そのとき印象に残ったのが、自分たちが苦しんだ事実をメディアはちゃんと伝えてくれていない、あるいはオブラートに包んできちんと伝えきれていないという、当事者の方々の声でした。そこで、テレビというのは隠している部分があるのだなと疑問を持ったんですね。自分がそれを掘り起こし、自分の言葉で伝えたいと思うようになりました。そこから本格的にアナウンサーを目指すようになり、大学1年の冬からアナウンサー養成学校に通いました。他にも京都府茶協同組合の宇治茶レディというPR活動を通じて、いろいろな方と話すことに慣れる機会を作っていきました。

――先ほど収録を見学させていただきました。原稿をほぼ見ることなく、自在に時間調整をしながら見事なMCをされました。もともと度胸がおありなのでしょうか。

小西　どうでしょう（笑）。中学時代、生徒会長をしたことがあります。選挙では全校生徒の前で演説をしたので、あれで度胸がついたのかもしれません。立候補したのは、仲の良かった先輩が生徒会長をされていて、文化祭や体育祭などでリーダーシップを発揮する姿がかっこいいなと思っていたからです。同志社女子中・高では、学校行事は生徒が主体となって運営します。皆がすべての役割を分担するので、社会で今も多く見られる、性別による無意識の思い込みも関係ありません。もし共学に行っていたら、私の性格も少し違っていたかもしれませんね。女子校を選んで、私は良かったと思っています。

自分だからこそ伝えられる情報・ニュースを選び抜いた言葉で届けたい

――現在担当されている番組を教えてください。

小西　情報番組「ミタイノコレクション」のMC、朝の情報番組「THE TIME,」の中継リポーター、お盆とお正月に放映する「柴田理恵認定！ゆるゆる富山遺産」のナビゲーターもやっています。あとは夕方の「ニュース6」での中継やナレーションも担当しています。中継では、自分でどんな内容にするかネタを考えて、アポを取り、中継原稿やテロップを作成。ディレクターも兼任しています。

――地域の文化や人間関係と密接に関係する「言葉」を扱うお仕事です。課題などはありますか。

小西　これは入社して3年目が過ぎたあたりに言われたのですが、アナウンサーになりたくて来たのだから1年くらいいたらすぐ辞めるだろうと思っていた。弱音を吐かず頑張っていて意外と根性あるんだね、と（笑）普段厳しいカメラマンがぼそっとおっしゃって、どこかやっと認めてもらえたような気がしました。地元の方からもここちゃん～！いつもテレビ見て応援してるよ～と、街やお店などで声をかけてもらうことがとても増えて、5年前は知り合いが一人もいなかったこの土地でこんなに多くの人に応援してもらえているということが嬉しいなと。私もその声に応えられるよう、自分で車を運転して富山県内を隅々まで訪れ、勉強しました。今では京都より詳しくなったぐらいです。

――一日のスケジュールを教えてください。

小西　例えば今日は8時半に出社して、9時から「ミタイノコレクション」の冠コーナー「ココの太鼓判」のロケに行き、会社に戻ったのが12時半です。そこから軽くご飯を食べ、13時からは「ミタイノコレクション」の台本を自分で考え、VTRを観て感想をまとめながら時間内に収める作業と練習をして、15時から収録。16時からは各番組のナレーションを収録し、19時半に退社予定です。「THE TIME,」の中継が7時45分からあるときは、深夜2時に会社に集合後、現場へ行ってリハーサルを重ね、TBSからの修正要請に、それこそ本番1分前まで対応します。

――現在のやりがいをお聞かせください。

小西　自分で取材に行って原稿を書き、テロップを発注して映像編集なども行います。大変ですが、それだけに「小西さんに取材してもらえて良かった」と言っていただける

ことがあると、自分の思いが伝わる感じがして、続けていて良かったと思います。

――今後の目標はありますか。

小西　先ほどお話ししたハンセン病を取り巻く問題について、改めて取材したいと思い続けています。患者さんの人権が無視され、どれだけ悲惨だったかということにちゃんと光を当てて報道したい。もともと社会問題にしっかり取り組みたいという希望を持ってテレビ局に入りましたが、マスメディアの世界で、女性はどちらかというとやわらかい素材を担当することが多いですよね。そのような枠を乗り越えて、いつかは帯でニュースキャスターができればと思っています。あとは、この人に中継をさせれば間違いないと思ってもらえるような存在になりたいです。

――志をお聞かせください。

小西　自分だからこそ伝えられる事を大切にしたいです。そういう私を見ていただき、こんな人になりたいと思っていただけるようなアナウンサーになりたい。そしてアナウンサーとは番組制作の、いわば最後の関門です。記者、カメラマン、さまざまなスタッフの仕事の最後に、非常に大切な部分を担わせてもらっているので、全員の思いを背負って私が代弁するという意識を毎日欠かさず持ち、カメラの前に立つようにしています。そのためにも、一つひとつの言葉のチョイスに真摯でありたいです。これを話して傷つく人がいないかも含め、絶対に一度は考えてから言葉を発したい。例えば1年目のとき、富山の魅力の一つであるのどかさを伝える言葉を私が発した際、周囲の空気がピリついたことがありました。私は失礼にはならないと思って発した言葉でも、聞く人によってそうは受け取らない場合があります。言葉は良い意味での武器にもなれば、凶器にもなり得ます。慎重に使わなければと、肝に銘じました。

――読者へメッセージをお願いします。

小西　この春でアナウンサー歴6年目に入ります。原動力は常に視聴者の方々からの反応です。修正すべき点も良かった点も気づかせていただきながら、志はいつも高く持ち、高みを目指して挑戦と進化を続けたいと思います。

（2025年1月14日、富山市にて）

同志社の環境教育を考える

同志社大学では、同志社大学環境宣言を定め、教育・研究・社会貢献にかかわる全ての活動の環境影響を改善するために、環境マネジメント活動を推進して地球環境との調和を目指している。また、その上位の目標として、地球全体の国際的な目標であるＳＤＧｓがある。ここでは、地球温暖化や生物多様性の保全といった環境課題のほか、多様な社会的課題が環境の課題として提示されている。

本座談会では、広く環境への教育活動や取り組み、考えについて意見を交換することで、読者に「環境」を身近に感じてもらい、今一度自分事として「環境」を認識してもらうきっかけとなることを目指した。併せて、異なる教育課程の教員が互いの取り組みを学ぶことで、今後の教育、研究の発展について展望を語り合った。

同志社香里中学校・高等学校 理科教諭
古本 大

同志社女子大学 学芸学部 教授
髙木 毬子

元同志社中学校・高等学校 理科教諭
田邉 利幸

同志社大学 理工学部 教授
赤尾 聡史

グラフィックデザインで環境問題を分かりやすく伝える

赤尾●本学では同志社大学環境宣言を定め、教育・研究・社会貢献に関わるすべての活動の環境影響を改善するために、環境マネジメント活動を推進し、地球環境との調和を目指しています。環境宣言を定める動機となるのが、もう一つ上の目標であるＳＤＧｓです。ここでは地球温暖化や生物多様性の保全といった環境問題以外にも、ジェンダーフリーなど多様な社会的課題が盛り込まれています。それらを踏まえ、今回の座談会では広く環境への教育活動や考えについて意見を交換し、将来的には読者の皆様に環境を身近に感じていただく、あるいは自分事として考えていただけるような記事になればと考えています。併せて、異なる教育課程の教員が互いの取り組みを学ぶことで、今後の教育、研究の発展に繋げたいと思います。まず自己紹介の後、現在の環境に関する取り組みをご紹介いただきましょう。私は理工学部の環境システム学科に所属しています。地球環境から生態系、社会システムから環境技術まで、地球と人間に関わるあらゆる環境システムを探る学科です。カリキュラムは地球科学、高校で言うと地学をベースとしています。広く地球上の環境の成り立ちを学んだ上でフィールドワークを多く行い、現在地球上で成り立っている生態系、あるいは我々の生活環境など社会システムを学び、さらに省資源、創資源などの科学技術を学びます。私個人は環境衛生工学を専門とし、廃棄物処理、サニテーションなどの衛生工学を扱っています。最近は農産業地域で発生する廃棄物、あるいは未利用バイオマス資源の活用に関する研究を行っています。

赤尾 聡史

同志社大学 理工学部 教授

高木●私は同志社女子大学学芸学部メディア創造学科で教えています。文字を使った表現に始まり、タイポグラフィや本の装丁を専門としています。約20年前からグラフィックデザインをツールとして、地球温暖化やジェンダー格差など多様な

問題を分かりやすく表現する内容を授業で取り上げています。専門性が高い内容ほど専門外の人には分かりにくくなるものですが、グラフィックデザインは専門性の高い内容をできるだけ分かりやすく表現し、形に翻訳することができます。今回の座談会に招いていただいたきっかけは、学芸学部のジョイントプログラムでした。これは本学部の3つの学科を横断して、毎年度異なるテーマで課題に取り組む科目です。私が2022年にこの科目を受け継いだとき、3年間続けて担当するように言われました。そのため意義のあるテーマを3年間扱い、次の先生にさらに内容を発展させていただけたらと、デザインではなく「環境」を軸に置きました。1年目は「環境×食」、2年目は「環境×ジェンダー」、3年目は「環境×コミュニケーション」と、少しずつテーマを移行して企画を続けました。これまでグラフィックデザインは、いわゆる消費活動を促すような媒体でした。今後は地球上に私たちが住み続けられるために、もう少し地球とバランスの取れた付き合い方を考え、それを発信するためのツールにもなればと思っています。学生に教えるだけでなく、現在はアメリカのアンティオーク大学でEnvironmental Ethicsを学んでもいます。

赤尾●環境倫理ですね。

髙木●そうです。これが非常に楽しく、学生に伝え続ける力になったり、自分の研究に役立ったりしています。今週はオーストラリアやニュージーランドの先住民たちが今どのように環境危機と向き合っているか、現在私たちが普通と思っている事がどれだけ異常なのかなどをディスカッションで取り上げています。そこで気になったのが、私たちは今、知識も学問も消費物の一つとして扱っているという発言でした。まさにそう思います。良いとされる大学を卒業しさえすれば、良い職業を見つけられる世の中になってしまい、学問そのものを大事にしていない。ですから環境倫理の問題だけでなく、私たちの今の暮らしを改めて問い返すという、非常に重要な事も学ばせてもらっているところです。

学内の自然ツアーや学内探訪ブログで生徒の視野を広げる

赤尾●先住民の暮らしを知り、視点を変えるということですね。田邉先生はいかがでしょうか。

田邉 利幸

元同志社中学校・高等学校 理科教諭

田邉●私の学生時代は、京都の宇治田原から福井県名田庄村にかけて分布する丹波帯という地層で、放散虫という小さな化石をもとに地質調査をしていました。その後は同志社中学校で41年間、理科を教えてきました。現在、「なべやんの『学内探訪』」を本校のホームページ上で連載しています。学内の花や樹木のそばを子どもたちが素通りするのを見て、子どもたちにより幅広い見方をしてもらえればと、学内の自然環境を伝え始めたものです。内容は動植物のほか、建築にも触れています。新しいテーマを探して学内をフィールドワークしますが、このフィールドワークこそ、子どもたちが環境問題を学ぶときの中心にならなければと考えています。また学校とは関係ありませんが、深泥池水生生物研究会に所属して、氷河期時代からの動植物保護のため、特にブラックバスやブルーギルなどの外来動植物を駆除する活動を2年ほどしています。

古本●私が同志社香里中学校に着任したとき、校内に大木がたくさんあって感嘆しました。子どもの頃から自然保護に関心があり、大学でも生態学を学んでいましたので、この学校の自然環境を利用した教育に希望を持ちました。最初は校内に生えている植物を採集し、スケッチしたものを持って図書館へ行き、図鑑を開いて調べさせ、植物の分類や生態を学ばせていました。高校でも教えることになった際、教科書を読んでいると「群系」という言葉が目に留まりました。平均気温や降水量などが似通った自然環境下でどんな植物が育つのかという、分類単位のことです。それを理解させるため生徒と共に学校の樹木などを観察しながら、例えばオリーブやゲッケイジュを見て、大阪と気温や降水量が似ている地中海性気候を考える、あるいは亜熱帯にも育つ植物を見て亜熱帯気候を感じようという話をします。夏休みは磯採集に行かせ、岩場の生き物を観察させます。同時に漂着物を見て、環境破壊やプラスチックの問題を身近に捉えてもらう。このように多様なものを見せ、感じさせて、授業をつくっています。

田邉●私も校内で岩石ウォークラリーを実施しています。

学内にある多様な岩石を教材として取り上げ、より身近なものとして岩石を考える活動です。子どもたちは自然の中でみずみずしい感性を発揮し、こちらの想定以上の発見をしています。

現実の危機的状況だけでなく希望を感じさせ自ら考えられるような仕掛けをつくる

赤尾●私も「学内探訪」の記事を何本か読ませていただきました。それぞれのテーマは小さな事でも、記事になりホームページに載ることによって、急に大きな存在になって人の気持ちをつかんでいきますね。伝えるプロセスは非常に大事だと思います。その点で、髙木先生も環境問題を伝える際、重視している事があればお聞かせください。

髙木●伝え方というのは本当に難しいです。特に温暖化現象や絶滅危惧種に関する問題などは伝えにくいです。地球の生態系が今後どう変わっていくのか、より崩れた場合はどうなっていくのか。いろんな心配もある中で、無視してはいけない危機であることを忠告するとともに、できるだけ希望も忘れてはいけない。そのバランス性が非常に難しいです。これまでのような楽観視はもはやできず、一人ひとりができることからしていかなければいけない時期に私たちは来ています。伝え方はさまざまです。例えばテレビのドキュメンタリーのように、現状をそのまま見せてディストピア的に相手に伝えてしまうと、自分には何もできないじゃないかと思わせてしまう。ですから私はゼミで学生と話す際は、できるだけユーモアを入れたり、デザイン性の高いものを見せたりします。残酷で気持ち悪い表現をすると、やはり人は怖くなって目をそらしてしまうからです。

赤尾●先生のご専門である本の装丁も、まさにそうですね。

髙木●ページをめくっていく作業は一人ひとりが自分で行います。スピードもそれぞれ異なるし、前のページに戻ったり先へ飛ばしたりもできる。そういう可能性も含めてストーリー性を持たせ、重要な事をデザインで伝えるようにしてい

髙木 毬子
同志社女子大学 学芸学部 教授

ます。

赤尾●私は水の問題を扱う学会に所属していますが、危険性を煽ってばかりで良いのだろうかと疑問に感じることがあります。確かに今のままでは環境に危険が及ぶ可能性はあるのだけれども、そればかりではなにか狼少年的になりはしないかと。大事なことは「不安を煽る」ことではなく、「正しく伝える」ことであり、ユーモアを交えながらでも相手に理解してもらい、受け手のペースで理解を進めてもらうというお話は非常に納得できました。私が社会に出た頃、ダイオキシンに代表される環境ホルモンの問題が真っ盛りでした。しかし今、ダイオキシンは焼却炉から出たものが中心なのではなく、農薬から出たものが環境中に広まったのだという説が出てきています。環境問題はまだ分からない部分もあるのです。トランプ氏がアメリカ大統領に就任し、今後は温暖化懐疑論が高まるかもしれない。そのような中で環境問題をどう伝えていくかは難しい課題ですね。

髙木●例えばプラスチックは、使い捨てるために発明されたのではなく、長持ちする素材として迎え入れられました。それが今では使い捨て商品に多く使われ、マイクロプラスチックが体内に入り、いろいろな影響を与えていることが国際的な研究で明らかになっています。そのようなネガティブな変化を、いかに上手に拾い上げることができるのか。結局、私たちの身の回りにある問題は繋がっており、連携しているのです。ジョイントプログラムで「環境×ジェンダー」を取り上げたときも、一見別々の課題に思えます。ただし、両者は大いに繋がっています。人類の半数に対等な知識を与えないことは、人類の半分からアイデアが得られないことになり、政治にも関わってもらえないことになる。だから性差別はかなり怖いことなのです。環境に与える影響を知らず、毎日プラスチックを燃料代わりに燃やしているインドネシアの女性たちもいます。そこから有害物質も発生します。ゼミで取り上げたテーマを一つ紹介させてください。１００円ショップでは何でも安く買えますが、その１００円は実際の値段なのでしょうか。資源を持ち出すところから商品の製作、運送、ブランディング、広告など店舗に並ぶまでを学生に調べさせます。そこから学生は多くの気づきをもたらせ、自分に繋げていけます。そういう視点を学生に教えています。

田邉●学生にグラフィックデザインを創作してもらう際、

実際の動植物などを観察してデザインに生かすという作業をするのですか。

髙木●それもあります。デザインに用いる色を、ナスの皮やヘタを用いたり石を削ったりして、自分で染色や、インクをつくる実験をしている学生もいます。

田邉●大切な事ですね。中学生にニワトリの絵を描きなさいという問題を出したところ、4本足のニワトリを描く子がいました。自然環境への理解を深めたり本質をつかんだりしようと思うのであれば、実際の自然物をどれだけしっかり観察するかが勝負だと私は思います。本校では50年以上前から、点描による精密スケッチをさせています。昆虫や植物の葉っぱなどをすべて点で描かせるのです。小豆、大豆、落花生の栽培、ウシガエルの解剖、岩石標本の制作など、あらゆる授業で本物の自然に触れざるを得ないような課題を提供しています。実物主義教育です。

自分で気づきを得るよう促すのが環境教育

赤尾●皆さんのお話を伺って、私の中で繋がった気がしました。中学や高校で行っておられる自然観察では、自然を感覚的に認識し理解する。髙木先生のお話では、環境問題はさまざまに繋がっており、その中で一つを題材に取り上げ、そこで起こっている事を認識し、アーティストの感性で消化し表現することで自分のものにしていく。我々にはない観点ですが、認識していく過程という意味では、両者には共通項があると思います。そういう目を養うのが環境教育なのかもしれませんね。自然への気づきにせよ、我々の社会のちょっとした歪みの気づきにせよ、気づくことが非常に重要なのかなと、自分なりに納得しました。

古本●学校の畑で、生物部と一緒にカボチャを育てています。夏の猛暑日に観にいくと葉が萎れている。夕方涼しくなってから水やりをしようと指導したところ、誰もまだ水やりをしていないのに、夕方になるとシャキッと元に戻っている。翌日も同じでした。なぜだろうと、生物部で研究することになりました。普段見過ごしてしまうような事でもそれを不思議に思うことが、いろんな事に気づいていく上で大切なのではと感じます。

赤尾●そういう気づきが、将来的には問題解決のきっかけになるかもしれませんね。気づくことは勉強においても社会に出た後も、ずっと大切なポイントです。

田邉●解剖学者の養老孟司さんが興味深い話をされています。ある大学の講義で、水の入ったコップにインクを落とした。しばらく経つと色が消えた。どういう原理なのかと学生に聞くと、分子運動を考えるのではなく「そういうものだと思っていました」と答えたそうです。100円ショップの商品のルートをたどる授業も、気づきのための教育ですよね。「そういうものだ」という思考停止ではなく、ルートをたどる学習は、小学校から大学まであらゆる段階で有効です。これからますます情報があふれかえる時代に、一つの現象について多面的に見るという作業は重要だと思います。

創造性・共感性・良心を育む

高木●それは創造性の話でもあるのではないでしょうか。自分の頭で考え、創造する力です。例えばSNSで知った情報を「ニュース」だと信じる若い人たちは多い。宣伝とニュースの違いが分からなくなるのです。必要なのはクリティカル・シンキングです。既にある解答の通りに答えるのはAIがしてくれるので、人間としては違うものを学んでいかなければいけない。そこで一番重要なのが創造性や共感、良心であると、今日のお話を聞いて思いました。そのために自然観察も大切ですが、そもそも「環境」と「自然」というふうに言葉では分けられていますが、人間も自然の一部であり、その自然がなければ人間も生存できないという理解が必要だと思うのです。土は汚い、虫は気持ち悪いと思っている若い人や子どもが多く、自分が食べる物はどこからきているのかに興味を持つ子どもは少ない。それを教育機関が教え続けていかなければ。共感や良心を育てるにはどうすればいいと、先生方はお考えですか。

田邉●例えば幼稚園の子どもなどは園庭に転がっている石に興味を示し、ポケットに入れて持ち帰ることがありますよね。そのぐらいの子どもたちは、自分も自然の一部であるという感覚を持ち、全身で自然の中に入っていきます。そのと

古本 大
同志社香里中学校・高等学校 理科教諭

き一緒に「きれいな石だね」「面白い形だね」などと言って子どもの心を育てるのが共感性です。それがあれば、子どもたちの鋭敏な感覚はもっと育っていくのでは。大人が子どもに共感する余裕を持てる世の中を作っていかなければと感じます。

古本●中学1年でツルグレン装置という仕組みを作って、ふるいの中の土壌動物を観察させたとき、「むちゃかっこいい虫がいる！」と喜ぶ生徒がいました。それはゴキブリの幼虫だよと教えると、途端に悲鳴を上げた。ゴキブリという生き物に対してはこう反応しないといけないと、テレビや宣伝で思い込まされているわけです。取捨選択をする前に染められてしまっている部分がある。その中でやはり、本物の凄さを自分が見つけられるかどうかが大事であり、そのためにいろんなものを見せて感じさせるのが重要ではと思います。

社会的共通資本の考え方を「ネクスト『深山大沢』プロジェクト」に取り入れ同志社ならではの視点でSDGsを推進したい

赤尾●今は便利な世の中です。100円ショップが当たり前の世代がどんどん増えてくると、我々は気づきの機会を失ってきているのかなと思います。そんな世の中だからこそ、子どもたちにはもっと気づかせ、工夫をさせ、立ち止まって考えさせる。自分で価値観を作っていく時間が必要ですね。そのような気づきを育んでいくため、同志社全体として取り組むべき事や期待があればお願いします。

田邉●資本主義の中でSDGsを推進するとき、企業が儲かるためのコマーシャリズムになっているように感じることがあります。2030年までに達成すべき目標を達成して安心してしまったら、環境問題はそれでいいのかという疑問がある。哲学者の斎藤幸平氏は「SDGsは大衆のアヘンである」と言っています。目標を達成しようというところに安住してしまっていると。経済学の宇澤弘文先生がセンター長を務められた同志社大学社会的共通資本研究セ

ンターでは、社会的共通資本とは「人間的に魅力のある社会を安定して維持することを可能にする社会的装置のこと」としていました。具体的には、教育をはじめとする社会制度や、自然環境、道路などの社会基盤がそうです。今SDGsに向けて同志社大学全体では、未来のあり方を展望する「ネクスト『深山大沢』プロジェクト」が動いています。私は宇澤先生の社会的共通資本の発想を深山大沢プロジェクトに組み込んでいただけたら、何かが変わってくるのではという気がしています。

髙木●田邉先生のおっしゃる通りだと思います。SDGsが企業やグローバル社会のイメージづくりになっているケースは多いです。17の到達目標の一つずつは非常に重要ですが、そもそも2030年までに達成できませんよね。最近Human Supremacyという言葉をよく聞きます。人間が主権を持っているという精神のことです。人間が生態系の一部であるというところからどんどん遠ざかり、人間がすべての上に立つというポジションをとってしまっている。それは哲学者の斎藤幸平氏もおっしゃっていて、とても危ないことだと思います。だから自然に触れ、私たちはその一部であると理解していく教育がとても重要なのです。女子大学ではあまり環境活動はしていないと思います、今後大学としてこの課題とどう向き合っていくかも肝心です。意識のある高校生は、そういう面も考えて大学を選んでいます。今後、優秀な学生を大学に呼び寄せるためにも、同志社が考えるべきテーマでしょう。法人諸校との連携でいろいろ企画ができれば良いですね。

古本●我々は自然から恵みをいただいているのだという気持ちを持ち続けることは大事ですね。だからその恵みを根こそぎ収奪するのではなく、使い続けられるよう環境を大切にしていくことに繋がっていく。生徒にもそんな事を感じ取ってもらえたらと思います。

赤尾●環境教育には、やはり「気づき」が大事なのかなと思いました。そのために徹底的に自然を観察する、あるいは視点を変えるところから次の価値観が生まれ、創造性も発揮されてくるのかなと思った次第です。同志社としても法人内での連携を強めていきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

（2025年1月22日、今出川校地にて）

大学

「絵に描いた餅」では終わらせない

法学部教授
梶山（かじやま） 玉香（たまか）

権利の実現まで見届けたい

私の研究については、『同志社時報』一〇七号（一九九九年三月）に一度、書いたことがあります。内容は、強制執行を裏付ける権利がないにもかかわらず、差押え・競売が行われた場合の後始末の話でした。

私の専門である民法は、契約や不法行為、婚姻、相続等、日常生活の様々な場面において誰にどのような権利があるかを定める法律です。たとえば、お金を貸した人には借りた人に対し貸金の返還を求める権利（債権）があります。

ただ、権利があればそれで解決する…とは限りません。

私が研究を始めてまもなく、日本では、バブル経済が崩壊しました。執行妨害が横行し、債権者が強制執行や抵当権実行を申し立てても、適正価格で競売ができない状態が生じていました。もちろん、妨害行為は違法なものです。しかし、その排除に多大な時間や労力がかかるとなると、事実上、権利行使を断念する人が多いでしょう。

権利の実現が手続によって阻まれることもあります。裁判等の手続は、本来、権利を実現するためのものです。しかし、手続の迅速・安定性のため、適時に主張を行わなかった者の権利が「なかったもの」とされることがあります。政策的考慮からの制限もあります。たとえば、法は差押禁止財産を定めています。債務者の生活を守るための施策ですが、債権者は、差押禁止財産から債権回収をすることができませんから、これも権利行使の制限といえるでしょう。

権利があっても実現できないのでは、権利がないのと同じです。そこで、私は、おのずと、民法上の権利の「その先」、わかりやすくいうと、「貸したお金がきちんと戻って

くる」ための手続に関心を持つようになりました。

「誰ひとり取り残さない」アクセシビリティ保障へ

最近、「誰アク」PJいろいろ（「誰ひとり取り残さない」アクセシビリティをいろいろ考えるプロジェクト。https://dareaku.jimdosite.com/）にも関わっています。「借金の取立て」の研究者がなぜ?と思われるでしょう。

きっかけは、二〇一六年、障害者差別解消法施行の年に障がい学生支援室（現在のスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室）の室長に就任したことです。

同志社大学は、他大学に先駆け、障がいのある学生に対する支援を行ってきましたから、障害者差別解消法が施行されたからといって、あわてて制度を作る必要はありませんでした。ただ、当時、「制度」とはいうものの、実際は、学生からの「お願い」に応じる教員の「熱意」「好意」によって支えられていました。教員が「嫌だ」と拒否すれば、それ以上は何も言えない…そうした例は、決して多くはありませんが、存在しました。また、どのような支援を行うかは教員任せであり、学生から支援内容の見直しを要求する機会は、制度上保障されていませんでした。

二年かけて、同志社大学の障がい学生支援制度を、法の趣旨に合うよう見直しました。具体的には、合理的配慮の内容を学生と学部との合意によって決定するための手続、合意できなかった場合に第三者が入って合意形成を目指す「調停」のような手続を設けました。

見直しに取り組むなかで、次第に、これでは不十分だと感じるようになりました。たしかに、合理的配慮の提供は法律で義務づけられている、でも、現場の教員が配慮提供に戸惑い、負担を感じるなら、結局、「絵に描いた餅」で終わってしまうんじゃないか、と思ったのです。

そう、ここでも、権利の「その先」が気になりました。しかし、室長でやれることには、限界があります。

室長職を辞し、支援室と連携しつつ、支援室の外から制度の実効性を確保しようと、同志社バリアフリープロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトでは、「授業における合理的配慮」の内容について、一歩踏み込んだマニュアルを作ることを目指しました。たとえば、一般に、「視覚障がいのある学生が受講している場合、図表の内容を口頭で説明してください」といわれます。しかし、実際に授業で用いられる図表の内容や役割は様々ですから、これだけでは、自分の授業で使っている「この図」をどう説明すれば伝わるかが分かりません。当事者の意見を聞きながら、その部分を具体化しようと考えたのです。

しかし、プロジェクトの二年目に新型コロナウイルス感

染症の感染が拡大し、大学の授業のあり方が一変しました。授業のオンライン化で、障がいのある学生への支援が一部不要になる一方、通信環境が整備されていない学生等が支援対象となりました。対面授業が再開すると、基礎疾患等により来校できない学生等の受講保障が求められました。

こうした経験から、同志社バリアフリープロジェクトの発展形として生まれたのが、「誰アク」PJいろいろです。「誰アク」では、障がいのある学生を含む、すべての人へのアクセシビリティ保障を目指しています。第一弾では、バーチャル教室や分身ロボット等を利用した授業参加を試みました。今は、授業内容の文字化に取り組んでいます。字幕は、障がいのある学生だけでなく、留学生や初学者が授業内容を理解するうえでも有効だからです。

法律学へのアクセシビリティ保障

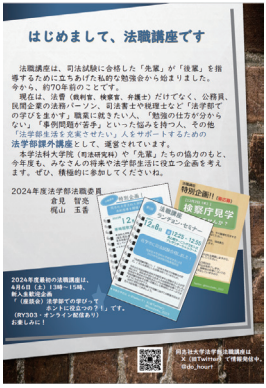
アクセシビリティの問題に関わるようになって、私の授業にも少しばかり変化が生じています。

ここ数年、私は、教室での授業をリアルタイムで配信しています。昨年度までは受講者が受講方法を選択していました。今年度からは届出制にしましたが、感染症による出校停止の学生、交通機関の遅延や就職活動で来校できない学生が利用しています。授業資料も、昔は文字ばかりでしたが、初学者向けの授業では、図やイラストを多用することで、法律学の入り口での「つまづき」を軽減しています。

法職講座にも、一言触れておきたいと思います。法学部には、法職講座という課外講座が設けられています。七〇年以上の歴史のある講座です。かつては司法試験受験生のための講座でしたが、二〇一三年、すべての法学部生の学びをサポートするための講座にリニューアルしました。

リニューアルに取り組んだ関係で、私は、これまで通算六年間、運営を担当しています。法職講座の内容は、進路選択のための情報提供（法曹、公務員等）、学習サポート（期末試験対策）、施設見学（家庭裁判所、検察庁）等、盛りだくさんです。学生に関心をもってもらえるよう、チラシのデザインを工夫し、SNSも活用しています（X：@do_hourt）。これも、「アクセシビリティ保障」といえるかもしれません。

権利、制度、カリキュラム、いずれも「絵に描いた餅」では終わらせない…その想いが、私の研究・教育の原動力になっています。



私の研究・私の授業

大学

「わかっちゃいるけどできない」を支援する

心理学部准教授　大屋（おおや）　藍子（あいこ）

ダイエットの研究？

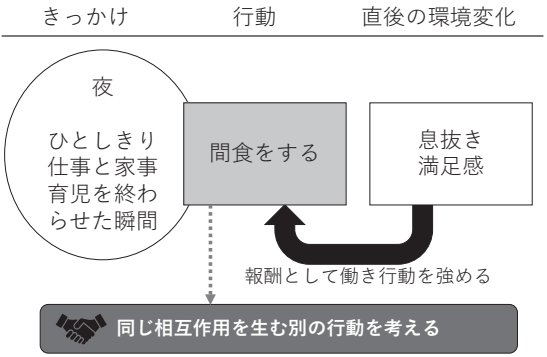
私の研究は、ダイエットや生活習慣の改善を支援する効果的な心理学的方略を検討することです。特に2型糖尿病患者さんや高度肥満症の患者さんを対象に治療の「やる気」「動機」に関わる部分をどうやったらサポートできるのか、アンケート調査や実験による分析と、支援プログラムの効果検証を行っています。

私の専門は心理学の中でも行動分析学と呼ばれるものです。この学問の特徴は人がある行動をとる原因をその人の性格や素質に求めるのではなく、行動と相互作用する「環境」だと捉えることです。例えば、分かっているもののなかなか変えることができない生活習慣を思い浮かべてみてください。私の場合は夜間の間食をやめられないことです。夜遅い食事は血糖コントロールの乱れや体重増加に繋がりやすいため控えることが望ましいと分かっています。そのことを頭では理解しているものの、ひとしきりその日の仕事と家事育児を終わらせた後の息抜きから抜け出せないでいるのです。原因は何でしょうか。やめられない意志の弱さ?もともと易きに流れる性格なのかもしれません。それに対してどのような改善方法があるでしょうか。正しい生活習慣を送っている人のＳＮＳを見て性格を変えるべきでしょうか。家族に見張ってもらう必要があるでしょうか。私にとってはいずれも苦行のようで進んでやりたい方法ではありません。さらに、行動を変えられない人に対して「意志が弱い」「易きに流れる性格」といったその人の素質だと捉えてしまう「個人攻撃の罠」は、課題解決を遠ざけてしまい危険です。皆さんも、うまくいかないときに周囲から性格の問題を指摘され嫌な思いをしたことはないでしょうか。

行動と環境の関係を紐解く

行動分析学では行動に影響を与えていそうな環境を直接検討し行動変容に繋がる方略を見つけていきます。例えば夜間の間食行動は、ひとしきり仕事と家事育児を終わらせたタイミングで生じ、それによって息抜きが成立することで維持されていることが分かります。その場合、息抜きできる別の方法を、しかもひとしきり仕事と家事育児が終わったタイミングに特化した方法を用意することが効果的と考えることができます。顔面の保湿パックや目や肩・腰を温めるカイロを使う時間に変えるのも良いでしょう。食べることが譲れない場合は、ホットミルクやスープのように、満足感の得られやすい低カロリーの飲料にできるかもしれません。このとき「意志が弱い」ことや「易きに流れる性格」がどう変容したかは分かりません。そうした素質が原因だったかもしれませんしそうでなかったかもしれません。そうした内的構成概念については問わず、行動を環境との相互作用として捉え、直前のきっかけや直後の報酬を踏まえて行動の変容を直接促すのが行動分析学の醍醐味なのです。

Figure
例における行動分析学に基づいた間食行動の改善



2型糖尿病や高度肥満症における問題は、生活習慣が不適応的な形で固定化してしまっていることと捉えることができます。固定化してしまった生活習慣、つまり行動のパターンを変容させるためには、新しい行動パターンの構築と固定化した古い行動パターンの減弱の両方が必要です。このとき、通常の医療とは異なり、医療者の助言や教育以上に治療の鍵を握るのは、当事者自身が行動修正を行い維持することです。しかし、2型糖尿病や高度肥満症はその瞬間の行動一つで即座に結果が出るような疾患ではありません。筋トレをある日30回やったとしても、その日体重計に乗って体重が1キロ減っているわけではありません。状態にもよりますが、逆にある日少し食べ過ぎたとしても血糖値や体重に強い影響は出にくいです。行動した結果を即座には感じにくい疾患だと言えます。一方美味しいものを

好きなときに好きなように食べた満足感は即時で報酬価値の高いものでしょう。固定化する不適応的な行動パターンは固定化するだけの理由があるのです。それを、新しい行動パターンを構築することで塗り替えようとするわけですので、患者さん一人で取り組むのはなかなかに大変です。心理学的知見に基づいた環境設定で支援したい、というのが私の研究の中核です。

創造性は支援できる

新しい行動パターンを構築するための研究を一つ紹介します。新しい行動パターンを構築するためには、新しい行動を考え出したり、新しい行動を実際にとったり、試行錯誤したりすることが大切です。こうした「創造性」は個人の素質だと思われがちですが、実は周りが支援することが可能です。大屋と武藤（2016）は、大学生を対象に自分が普段食べない野菜を摂取する行動を増やすことができるか検討しました。毎日食べた野菜についてアンケート調査とフィードバックを行うのですが、途中から、新しい種類の野菜を食べたという報告があった際に「○○を食べたんですね！いいですね。」「○○は季節ものですね、素敵ですね。」など新しい野菜を食べたことに関心を示すフィードバックを行いました。こうしたフィードバックを続けると、7名中4名の参加者の方は積極的に新しい種類の野菜を食べる傾向が見られました。決して十分な人数ではないものの、これまでにない新しい行動をとること自体を、周囲の態度や言葉かけ一つで支援できる可能性が示されたと考えています。「○○をやりなさい！健康に良いのだから！」と伝えるよりも楽しい行動変容支援だと思いませんか。

さらに、行動分析学を応用した心理療法としてアクセプタンス＆コミットメント・セラピー（Acceptance & Commitment Therapy: ACT）があります。実際、糖尿病の方の生活習慣改善に対して効果的であることが報告されていることから（例えばGregg et al., 2007）、現在日本でもACTの2型糖尿病の患者さんへの効果が見られるか、国立循環器病研究センターと共同で研究しているところです。

「わかっちゃいるけどできない」行動を、自分が大切にしてきた楽しさを損なわず「意志が弱い」ままでも変容していく方法、そんなものを探して引き続き研究を進めていきたいと考えています。

女子大学

描かれた古典文学の世界

表象文化学部准教授
宮腰（みやこし） 直人（なおと）

奈良絵本研究の魅力

私の専門分野は、日本古典文学です。一般的に文学研究というと文字で書かれた物語や和歌が連想されますが、私の場合、17世紀から18世紀につくられた絵巻や絵本を研究対象にしています。江戸時代に筆工と町絵師の手仕事で彩色ゆたかにつくられた絵巻や絵本は、土佐派や狩野派等、専門的な絵師の画業とは区別されて、奈良絵本と呼ばれています。

言葉と挿絵で織りなされる奈良絵本の物語世界に学生時代から魅了され、もう30年程になります。江戸時代の作家が生み出す不思議で多様な物語はむろん、詞書の筆致の美しさや挿絵の味わいを知れば知るほど、こんなにも素晴らしい書物が長きに渡りつくり続けられたことに驚かされます。古典文学ですが、同時に美術工芸的な側面をもつのが奈良絵本・絵巻の面白さです。

もう一つの文学史を求めて

私が京都にきて、もう六年になります。この間、遅々たる歩みながら進めてきたのが奈良絵本の制作に携わった居初つなという女性作家の研究です。奈良絵本・絵巻の多くには、署名がなく、誰が制作に関与したのかという情報は、ほとんどありません。

そのなかにあって、つなは、女性向けの教科書・指南書である往来物を手がけ、その一方で『伊勢物語』や『百人一首』かるた等もつくっていました。つなの作品には、署名がなされ、はっきりと確証を得ることができるのです。その署名には「書画」とあることが多く、つなが詞書本文と挿絵、双方に筆を執っていたことがわかります。従来から奈良絵本の制作においては詞書と挿絵とは、それぞれ別

の人物が担当し、分業されていたと考えられてきました。つなの「書画」はこれを一部覆し、より具体的に奈良絵本制作の現場におけるひとりの女性の関与を示す事例となりました。二〇二三年には八幡市・松花堂庭園美術館で、つなの名前を掲げた初の展覧会も開催され、注目を集めました。

私は最近、居初つなが書写した『平家物語』を見つけ、その概要を報告しました（拙稿「居初つなと軍記物語―新出『平家物語』写本・往来物・物語草子」（『立教大学日本文学』一三二号、二〇二四年）。これは、7年ほど前、偶然私が目にした書物です。はじめは、その書物の奥書に記された署名をみて、「どこかでみたことあるな」と思ったのですが、しばらくして、「ああ、あの居初つなだ！」と思いあたりました。この『平家物語』奥書には、延宝8年（1680）に、つなが大津の地でこの本を書写したことが記されていました。それまでは貞享2年（1685）の奥書をもつ仏教説話集『沙石集』の例が知られていましたが、五年遡る例が出現したことになります。ささやかな発見ですが、確実に奈良絵本に携わった人びとの事績自体が判明することは珍しく、私にはとって印象深い、うれしい発見となりました。この発見からは、奈良絵本の筆者が求められて写本の制作に携わっていたことがわかります。

居初つなの作品を見渡すと、『伊勢物語』や『源氏物語』、『徒然草』や『鉢かづき』と、じつに様々な書物を手がけていることがわかります。平安文学も中世文学も同じ筆者によって書写され、愛らしい挿絵を添えて読者に提供されていたという江戸時代の読書環境の一端が確認できます。旧来の時代別・ジャンル別の文学史とは異なる〈もうひとつの文学史〉が十七世紀から十八世紀にかけて京都で活躍したひとりの女性の歴史を通して立ち現れてきます。

展覧会の見学を通じて

着任以来、二年次生を対象とする日本文化基礎演習Aでは、絵巻等の書物の見方や扱い方、くずし字（変体仮名）の読解のための導入をおこない、あわせて大学そばの相国寺承天閣美術館に行き、展覧会見学を実施しています。

ご存知の通り、相国寺承天閣美術館には常設されている伊藤若冲の襖絵、葡萄小禽図（鹿苑寺大書院障壁画の一部）や円山応挙の作品をはじめ、多くの美術が収蔵されています。禅宗の寺院らしく、明代の仏教絵画や頂相の優品が所蔵されています。室内には茶室も設けられ、相国寺ゆかりの茶道具も豊富に展示され、飽くことがありません。

近隣にありながら相国寺の境内に足を踏み入れたことがないという学生もいて、はじめは恐る恐る寺内に入った学

生も緑豊かで開放感ある空間を新鮮に感じるようです。

見学は、展覧会のポイントを事前に私が講義し、そのうえで美術館に足を運ぶ形式です。受講生は見学後の所感を授業支援システムに提出し、私が個々にフィードバックします。必ずしも美術史の知識は伴わなくても、直感的に絵画表現や茶道具の味わいを感じ取る学生は少なくありません。展覧会での一期一会の機会を活かし、各自がそれぞれのペースで絵と向き合っています。そうした学生の所感から授業でともに学ぶ際のヒントを得ることも多々あります。

研究と教育の往還を目指して

展覧会見学は、事前の準備に手間がかかる面はありますが、私自身の勉強になることも多く、研究と教育とを連携する要のひとつになっています。こうした私の取り組みには恩師の一人、大西廣先生（日本美術史）の影響があります。大西先生は、美術史家・ゴンブリッチの『美術の物語』の自在な語り口さながらに、古今東西のイメージや表象を比較し、分析する楽しさと面白さを教えてくださいました。先生は授業や展覧会で学生と心を通わせながら、議論を深めていく名人でした。学問に対する拓かれた姿勢と、温かな学生への慈愛が先生の根幹にあったのだと思います。

私には、いまだその力量はありませんが、授業や展覧会の場で生まれる発言や対話がもつ可能性については、先生とご一緒した時間から、わずかながら体得できたように思います。かつて先生から頂いた有形無形の贈り物を、次代を担う学生達に、できれば自らの研究の成果とともに新たなかたちで手渡したい。そんなことを試行錯誤の日々のなかで考えています。

居初つな書画『女実語教』部分
（国会図書館デジタルライブラリーから引用）

私の研究・私の授業

香里中高

リコーダー
～その歴史と音楽授業における取り組み～

教諭 水上（みずかみ） 陽一（よういち）

リコーダーという楽器

リコーダーは非常に歴史の長い楽器であることをご存じでしょうか。私の専門楽器はこのリコーダーです。音楽大学ではこの楽器を専攻し、在学中よりチェンバロやヴィオラ・ダ・ガンバ等を伴って、リコーダーが活躍をしたバロック時代の音楽を中心に演奏してきました。当時の演奏解釈に基づき、独奏やアンサンブルによって作曲家が意図した演奏の再現、即ち一般的に言われる「古楽演奏」を現在も行っております。

以前はリコーダーを演奏していると言えば必ず「小中学校で使う『たてぶえ』？」と返ってきました。子供たちの吹いている印象が以前は大きかったようです。しかし最近では歴史ある古楽器の一つという位置付けも世間に広まり、ヴァイオリンやフルートと並ぶ西洋の伝統楽器としても認識されてきているのではないかと思われます。

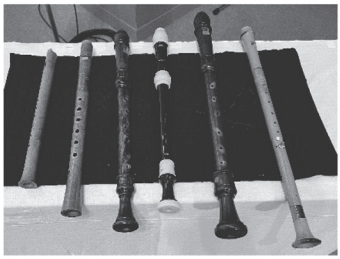
リコーダーの歴史

リコーダーの起源は十三世紀とも十四世紀とも言われています。イタリア語ではFlauto dolce（甘い音色の笛）、ドイツ語ではBlockflöte（吹口にブロックの入った笛）、英語ではRecorder（鳥の鳴き声を記録する笛）と呼ばれます。古い時代の楽器は一本の木をくり抜いて作られていました。ルネサンス時代には同種の楽器によるコンソート（ソプラノ・アルト・テナー・バスによる四重奏）が盛んに行われました。その後、バロック時代には楽器が三分割

出来るように改良され、ピッチの調節も可能になりました。バッハ、ヴィヴァルディやヘンデルによってこの楽器の独奏曲や協奏曲が数多く作られ、この時代はリコーダーの全盛期とも言われています。

楽器というものは時代の流れに従い、演奏し易いように、また大きな音が出るようにと改良がされます。しかしこのリコーダーはどのように改良を試みても音量などがこれ以上のものにはならず、一般的にはバロック時代が終わると共に、横吹きのフルートなどに取って代わられていったと言われています。この頃を境に一旦世の中から姿を消した楽器と言われています。

ところがその後、南ドイツやオーストリアのウィーンにおいて、チャカン(Csakan)やフラジオレット(Flagiolett)という名で古典派以降も愛好家によって演奏され続けていたことが分かりました。ディアベリやクレーマー等の作曲家がこの楽器のために曲を残しています。近



著者所蔵リコーダー（左より）
ルネッサンスC管A=415Hz／ルネッサンスＧ管Ａ＝４６６Ｈｚ／バロックＦ管A=415Hz／モダンF管A=440Hz／バロックD管A=415Hz／チャカンAs管A=430Hz／

現代においても北欧のニールセンやドイツのヒンデミットがリコーダー曲を作曲しています。現在では多くの現代作曲家によって曲が作られています。

一旦姿を消した後、戦後ドイツで再発見されたと言われるリコーダー、指を押さえ息を吹けば音が出ることから、簡易楽器として認識され、学校教育で使用されるようになりました。材質もプラスチック製にして、指使いも易しく改良された、安価で手に入れやすいジャーマン式リコーダーが誕生しました。日本でもこれを小中学校で使用するようになりました。これによりリコーダーの教育楽器としての存在意識が広まったとも言えます。同時に戦後のバロックブームにより、作曲された当時の楽器またはそのコピー楽器を使用して作曲家の意図した演奏再現、即ち古楽演奏の中でのリコーダー演奏という位置付けも少しずつ人々の間に広まっていきました。現在では教育楽器であると共に、古楽器でもあるという二つの意味を持つ楽器として各地で演奏され、学校現場で使用されていると言えます。

本校でのリコーダーの取り組み

小学校ではソプラノリコーダー、中学校高校ではアルトリコーダーが全国的、一般的に使用されています。しかし本校では一九九六年頃まで中高共にソプラノリコーダーを

授業で使用していました。当時は生徒たちに「良い音楽を聴かせ、良い楽器を持たせる」という教科方針があり、ドイツのモーレンハウエル社の木製リコーダーを購入させていました。アルトリコーダーは高価なためソプラノリコーダーという理由でした。しかし、当時の生徒たちの取り扱いの乱雑さ、また教科書にはアルトリコーダーの楽曲しか載せられておらず、内容にそぐわないということもあり、他の学校と同様のプラスチック製アルトリコーダーに変更して今日に至っています。

二〇〇〇年頃より高校音楽ではソプラノ、アルト、テナー、バスを用いてのリコーダー四重奏の取り組みを始めました。もちろんテナーとバスは高価なものなので、学校で最低必要数を購入して共用ということで続けてきました。

取り組み方としては四人組を組ませて担当楽器を決めます。そしてまず教師側で用意した易しい四重奏曲を、運指や吹き方等を指導しながら仕上げさせます。その後各グループで自由に選んだ曲に取り組みます。

楽器というものは人と合わせると面白味が得られるものです。またリコーダー四重奏の音色はしっかりと合えばオルガンの響きになります。このようなこともあり、生徒たちはこの楽器に興味を示し、生き生きと取り組むようになりました。

リコーダー、今後の取り組みへ

二〇二〇年、世の中はコロナ禍と一転しました。この数年間は音楽授業では歌うことは勿論、管楽器であるリコーダーも授業では使用出来なくなりました。ようやく二〇二三年にコロナが五類に移行されると、音楽授業も以前の取り組みの再開が少しずつ可能となりました。ところが、以前になかった問題が生じました。以前はテナーとバスは使用後に洗浄、消毒等での共用をしていたのですが、生徒たちもコロナ禍を境目にこれを避けたがるようになりました。今後この取り組みを続ける上で、学校所有楽器の数を増やすのか、個人で所有させるのか、どのようにして継続させるのか、四重奏の取り組みには大きな課題が出ているのが現状となりました。

西洋の歴史的にも伝統のある楽器であるリコーダー、学校音楽においても豊かな響きを作り出せるリコーダー、この楽器の持つ良さを今後もどのような形であれ伝え続けていくことが、長年この楽器に取り組んできた者として大きな役割であると思っております。

女子中学校・高等学校

女子校におけるダンスの授業の意義

保健体育科　那須（なす）　文恵（ふみえ）

なぜ、ダンスの授業に力を入れるのか

本校は「女子校」ということで、体育の授業内容の「ダンス」にも力を入れてきました。現代的な「リズム系ダンス」だけでなく、フープやボールを使ってリズミカルに踊るダンスなど独自に創作したグループ作品を中学生の課題にすると「ダンスは恥ずかしい、苦手」と思う生徒でも、本当に楽しく頑張ってくれます。また、中2から高2まで系統立てて行う「創作ダンス」は、体育実技は不得手でも体を動かすことが好きな生徒、音楽をやっているから曲を分析して動きをうまくはめていく力のある生徒、ダンスは上手ではないがリーダーシップが取れてグループをまとめていく生徒、内気でそのどれもやりづらいと思っている生徒、様々な生徒が、一つの作品を作る中で大きく力を伸ばし、自分では知らなかった一面に気づき、大きな成長を遂げる授業課題として大事なものだと思っています。

中2では、リズムの良い曲の「歌詞」に沿って動きを覚えさせ、一部分だけグループで創作させる形。中3では教員側が決めたグループで、あらかじめ曲を用意し、また、ある程度の動きを提供したうえで2分20秒程度のダンスを作る。高1では「即興」のダンスとして、一分程度の「曲」あるいは「音」に合わせて即興で作った動きを発表。2人以上のグループで、与えられたテーマ、例えば「通学」や「家事」などから連想して動きを作る。それを別のグループの作品と合体させて一つのダンス作品として構成していく。高2では集大成として、やりたい人と組み、曲・テーマも自分たちで決めて、全てを創作する。

普段あまり喋らないクラスメイトとの作りをする時の

新しい発見や、形ない状態から一つの作品を仕上げ、みんなに見てもらえるものができた時の達成感と満足感、グループで協力することや他人を尊重する気持ちなど、短い期間で多くの得るものがあると考えています。

中3創作ダンスの授業計画　初めての創作ダンス

今年度の中学3年生の授業を紹介します。

【1・2時間目】たくさんの動き（表現）を体験する

波・風・炎・ボールつき・ゾンビ・ダンスとして走る（風のごとく・忍者のように・隊形を交差しながらなど）・ジャンプ・ターン・転がる動作　など。

【3時間目】①必須の動き3種類を覚える

8カウント×2の長さの一連の動きを3種類作って、必須の動きとして作品に必ず入れることにする。最後のポーズのアレンジやカノン（タイミングをずらして動く方法）・左右対称にアレンジなど、少し手を加えてもよい。

②班決め（教員側が機械的に決める）・役職決め・音楽を与える（14曲、違う曲をUSBで用意してあり、曲を聞かせないでくじ引きのように班長がUSBをとる形で音楽が決まる）

③無言で曲を聴いて、一人ひとりイメージを書き留める。「怖い雰囲気」「ピクニックみたい」「戦いもの」「壮大」など感じたまま書く。その後、一人一つずつ発表し、それらをすり合わせて班で作品の方向性を決めていく。その時、同じようなイメージが多いと方向性が見出しやすいが、時には意外なイメージの提案があり、自分にない発想をみんなで広げていくことも面白い。

【4・5・6・7時間目】動きを創作していく

ストーリーは「起→転→結」程度にし、役割も細かくしすぎると劇のようになってしまうので、まずは曲を流しっぱなしにし、雰囲気に合わせて自由に体を動かす。最初からきちんと振付をしようとすると詰まってしまうので、曲全体の中で「このゆっくりのところを○○の表現にしよう」とか「この『ジャーン』でびっくりする振りとして大の字ジャンプを入れよう」など、大雑把に組んでいくと全体像が先に仕上がる。「朝のラッシュアワー」の表現で慌てて走っている様子を、皆がちぐはぐに前に行ったり後ろに下がったりすることで追い抜かされる様子が表現できるし、最後に目の前で電車の扉が閉まるシーンでは敢えてスローモーションの動きを使う、など、生徒自身が考えることを重視するが、どうにも困っている場合には教員が少し手出しをして導くこともある。

【8時間目】学年発表会のための選考会として披露

クラス内5班から2作品（6クラスあるので12作品）を選び、ＬＨＲの時間に学年発表会を行っているので、その作品を選ぶために発表。生徒も一度発表することによって手直しの必要なところ、こちら側も必須の動きを間違って動いているところなどを指摘し、修正し、練習しなおしすることができる。

【9時間目】テストとして発表

グループ点としては全体の出来栄え、構成、テーマをうまく表現できているか、個人点としては与えられた動きを正しく動けているか、人を見ながらではなく自分自身で曲に入り込んで動けているか、など、様々な視点から評価するための発表。

【学年発表会】体育館で学年２４０名の前で発表会を行う。自分のクラスにはなかった曲での発表、自分と同じ曲でも違った題材で構成された作品、必須の動きの使い方への感心、など、勉強になったという部分が多い。

生徒の感想を見ると、「クラスメイトであっても今まであまり話をしたことがなかった人と協力して頑張れた」「たくさん練習をしたから発表は緊張よりむしろ楽しかったし、見てほしいとさえ思えた」「達成感！」「学年発表会を見て心がふるえた」「創作ダンスをやって私の人生が変わった」といった、新しい自分を見つけた生徒が多く、我々も生徒がひと回り成長した様子がはっきりと見えます。１～３時間目はこちらが常に動き回って教えますし、創作させているときでも各班を回って様子を伺い、「必須の動きがわからない」と言えば動いて見せてプチレッスンをしたりして、生徒以上に教員側がテンションを上げて動かないとダンスの授業はできませんが、私たちの方も毎年その甲斐あって、生徒からたくさんの「喜び」と「幸せ」を貰えます。

これからも同女では「ダンス」の授業を大切に引き継いで貰いたいと願っています。

体育館での学年発表会

私の研究・私の授業

小学校

「社会にひらく」社会科授業をともにつくる

教諭 東宇（とうう） 孝浩（たかひろ）

子どもが「社会にひらく」社会科授業を
～「社会に生きる私たち」としての自分を見つめる～

私が社会科授業で大切にしていることは、子どもが「社会にひらく」授業を、子どもたちとともにつくることです。子どもが社会の事象に対して自ら問い、追究すること。またその中で「社会に生きる私たち」としての自分に気づくこと。そうした積み重ねが「社会にひらく」ことであり、自立した学習者としての姿と重なっていくのではないかと考えています。しかし、そうはいっても、日々悩みながらの実践で、課題も多くあります。ここでは、第五学年「これからの食料生産と私たち」の単元をもとに、子どもが「社会にひらく」ことについて考えたいと思います。

心動かされるヒト・モノ・コトとの出会いで「社会にひらく」

食料生産の単元について、教科書を見てみると、導入段階で「主な食料の自給率」や「外国と日本の食料自給率」のグラフ資料とともに、「日本の食料生産にはどのような課題があり、これからの食料生産をどのように進めたらよいでしょうか。」という学習問題が示されています。ここで考えなければならないのは、「食料自給率の低下」や「これからの食料生産のあり方」という大きなテーマに、子どもたちはどのように心を寄せ、追究していくのかという点です。「食料自給率が低い」ことを捉え、「食料生産をどうすればよいか」ということに関心を向ける子どももいるでしょう。しかし、それを本当に自分たちの問いとして心を寄せて追究し、食料生産の問題の解決に向けて行動するこ

とには難しさもあると感じます。大切なのは、食料生産の問題が消費者としての自分と無関係でないことを自覚すること、そうして問題の中に自分を位置づけて追究することではないでしょうか。そのためにはやはり、子どもたちが心動かされるヒト・モノ・コトとの出会いが必要だと考えています。

このような視点から、今回、日本の食料生産やそれにかかわる問題について考えるために取り上げたのは、二〇二四年五月頃、多くの飲料品会社が輸入オレンジ果汁によるジュースの販売停止や値上げを行った「オレンジショック」です。子どもたちには具体的なオレンジジュース飲料のリニューアルの例を写真資料として示しました。子どもたちは見覚えのあるジュースのパッケージデザインの細かな変化から、「輸入果汁よりも国産果汁の割合が高くなったこと」を捉え、「なぜリニューアルしたのか」「なぜこんなに販売価格が上がるのか」といった問いをもち、多くの食料を輸入品で賄う現状や、輸入品と国産品との価格差や消費行動と食料生産とのかかわりに学びを広げました。

さらに、ここで大切にしたのは、社会の中で奮闘する具体的な人の姿と出会うことです。「ジュースに国産みかんが使われ、農家の人は喜んでいると思う。」という子どもの思考に対し、本単元では「農家としては複雑な思いです。」という愛媛県のみかん農家の方の思いに触れました。そうすることで子どもたちは「自分のみかんが使われたらうれしいはずなのに、どうして複雑な思いなのだろう。」と、心を寄せて追究し、自分の消費行動と食料生産の問題にはつながりがあること、食料生産の問題は単純ではなく、すぐに答えが出るものではないことを捉えていきました。

また、社会の問題の中に自分を位置づけ、「社会とのつながりの中で生きる私たち」に改めて気づくことができるよう、バナナ生産の事例についても取り上げました。バナナは日本で最も多く消費されている果物ですが、日本に流通するバナナの99％は輸入品であり、そのうちの約80％はフィリピンのミンダナオ島産です。このミンダナオ島では、バナナ農園での厳しい労働条件や農薬散布による健康被害などの問題が叫ばれています。本単元では、その事実をミンダナオ島の農家の方のインタビュー動画として示しました。あたりまえのように口にしているバナナが、ミンダナオ島のこうした現状の上に成り立っている事実と出会うことは、輸入にかかわる安全・安心を保障するさまざまな取り組みが自分たちの食生活を支えているとともに、自分たちの豊かな食生活や消費行動がこれらの問題と無関係ではないこと、社会とのつながりの中で自分たちが生活していることに改めて気づくきっかけとなりました（ミンダナオ

島には、同志社大学出身で福音館書店の故松居直さんのご子息、松居友さんが代表をされている「ミンダナオ子ども図書館」があり、本校では、十年以上物資支援を続けています）。社会科授業の中で、こうした心動かされるヒト・モノ・コトとの出会いを通して、子どもたちが心を寄せ、自分の生活とのつながりの中で追究していくことを大切にしたいと考えています。

学習を通した変容を実感し、「学びにひらく」

このようなヒト・モノ・コトとの出会いを通して、その子が「社会にひらく」こととともに大切にしたいのは「学習を通した変容を、その子自身が実感できるようにすること」です。本単元では、単元の学習前と終わりに「食品を買うときに意識すること」のダイヤモンドランキングを作成しました。そして、学習を通してそのランキングはどのように変わったのか、どのようなヒト・モノ・コトとの出会いによって変わったのかをふり返る活動を取り入れました。このような活動を通して、学習の中での自分の変容を実感し、その子自身が学びの価値を見出していくことが、単元を越えて、また教科を越えて自立した学習者として問い続けていく子どもの姿（「学びにひらく姿」）につながっていくと考えています。

目の前の子どもの姿を大切にできる教師に

こうして自分の授業実践をふり返りながらも、「本当に目の前の子ども（その子）を大切にして授業づくりができているのか」「教師の思いだけで授業をつくっていないか」ということが、いつも自分自身の課題だと感じています。目の前の子どもたちとともに授業をつくることの楽しさを分かち合える教師でありたいと思っています。

図　本単元で使用したふり返りシート

参考資料

・石井正子（2020）「甘いバナナの苦い現実」コモンズ
・NHK松山放送局ホームページ「WEBニュース特集」https://www.nhk.or.jp/matsuyama/lreport/（最終閲覧日2024年10月10日）

同志社香里中学校・高等学校の開校への歴史背景

同志社社史資料センター

はじめに

二〇二五年に同志社一五〇周年を迎えるにあたり、二〇二三年と二〇二四年、同志社香里中学校・高等学校校長の瀧英次先生、図書館の河村麻紀先生、柳井孝太先生のご協力を得て、所蔵されている学校関係資料を閲覧調査することができました。そして、その成果から香里中学校・高等学校の歴史について今回同志社社史資料センターが文章を記載する件をご承諾くださったことに謝意を申し上げます。

同志社香里中学校・高等学校は一九五一年に開校しましたが、その時期に突如、設立されたわけではありません。そもそも京都でなく、なぜ大阪に開校されたのでしょう。そこに至るには大阪偕行社附属中学校、第二山水中学校、香里中学校・高等学校という三校の存在がありました。

香里中学校・高等学校に所蔵されていた資料についてはすでに勤務されていた喜多正明教諭により香里中学校・高等学校の歴史に関する著述の中で取り上げられています。今回は調査できた資料のうち、特に先の三校に関わる未刊行でトピックとなる資料を紹介することを主眼に置き、同志社香里中学校・高等学校の前史の時代背景をたどってみたいと思います。

大阪偕行社附属中学校から第二山水中学校へ

まず、大阪偕行社附属中学校は一九四〇年に財団法人大阪偕行社の支援を受け、設立されました。その『寄付行為』には次のように記されています。

第二章　目的及事業

第三条　本法人ハ第四師団管内ニアル陸軍将校及高等文官ノ団結ヲ鞏固ニシ親睦ヲ醇シ軍人精神ヲ涵養シ学術ノ研鑽ヲ為スト共ニ其便益ヲ図リ且ツ其子弟ノ教育ヲ為

スヲ以テ目的トス

（『財団法人大阪偕行社寄付行為』：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

ここからうかがえるように大阪偕行社は当時、大阪に司令部のあった陸軍第四師団に関わる団体で、その師団の関係者の親睦を深め、その子弟に対する教育活動を目的としていました。その一環として中学校を開校することを企画し、設立認可願が作成されました。

大偕発甲第一四号
中学校設立認可願
昭和十五年一月廿六日　財団法人大阪偕行社長
園部和一郎　印

陸軍大臣 畑 俊六殿

別冊文部大臣宛願出ノ要領ニ依リ財団法人大阪偕行社附属中学校ヲ設立致度候条認可相成度此段奉願候也

（「中学校設立認可願」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

この文面からも明らかなように、まず文部大臣に、そして陸軍大臣宛てにも設立認可願が提出された経緯を見て取れます。陸軍大臣にも認可願を出したのは大阪偕行社が陸軍と深く関わっていたからです。

しかし、大阪偕行社附属中学校は一九四一年に早々と第二山水中学校と名称を変更することとなります。その頃、東京で山下汽船の山下亀三郎社長が陸海軍へ寄付を行ない、その資金で軍人子弟のために設立された財団法人山水育英会の傘下に大阪偕行社附属中学校が入ったからです。

当然ながら、戦時下の時勢にも同調し、軍国主義を支持する校風が変わることはありませんでした。それをうかがわせる資料として、当時、山水中学校報国団により刊行されていた学校誌『山水』があります。創刊号には橿原神宮への参詣の写真が掲載され、「燦たり皇軍」、「大東亜戦争と我等」、「戦時下中学生々活」といった戦時色の濃い文章が記載されており、そこからは陸軍に関わる学校らしい、第二山水中学校の校風が見て取れます。

第二山水中学校から香里学園へ

ところが一九四五年に敗戦を迎えると、情勢は大きく変

わります。八月二三日には次のような通達が届きます。

大阪府内政部長
公私立中等学校長殿
陸海軍諸学校生徒編入学ニ関スル件
今般本府中等学校ニ在学セシ者ニシテ現ニ陸海軍諸学校ニ在校中ノ者並本府中等学校在学中ニ入隊入営等ニ依リ現ニ軍籍ニアル者ニシテ復校希望ノ者ニ対シテハ左記ニ依リ御処理相成度右ハ緊急措置トシテ取扱ニ万遺憾ナキ様格段ノ御配意相煩度此段依命通牒ス（…後略…）
（「陸海軍諸学校生徒編入学ニ関スル件」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

この通達により軍籍にある者の復学について公私立の各中学校は配慮することが指示されました。ただこの段階では、戦争状態が終結したことは見て取れても、まだ戦後の新しい変化は感じ取られません。

その後、大阪府内政部からの通達を介して、文部省から私立学校にとって重要な指示が届きます。従来、一八九九年の文部省訓令第一二号で「法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」と示されていた方針が撤回されたのです。

文部省訓令第八号
私立学校ニ於テハ自今明治三十二年文部省訓令第十二号ニ拘ラズ法令ニ定メラレタル課程ノ外ニ於テ左記条項ニ依リ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ得

記

一、生徒ノ信教ノ自由ヲ妨害セザル方法ニ依ルベシ
二、特定ノ宗派教派等ノ教育ヲ施シ又ハ儀式ヲ行フ旨学則ニ明示スベシ
三、右実施ノ為生徒ノ心身ニ著シキ負担ヲ課セザル様留意スベシ
昭和二十年十月十五日　文部大臣　前田多門
（「学校ニ於ケル宗教教育ノ取扱方改正ニ関スル件」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

この訓令により、私立学校は宗教教育や宗教行事を望む

ように実施できるようになりました。この宗教教育の解放はのちに第二山水中学校の後続である香里学園のありかたに多大な影響を与える要因ともなります。

やがて、GHQによる指導が本格化すると、政府に対し、特に戦前の軍国主義、超国家主義的風潮には厳しく対処するように求めました。それは教育現場においても例外ではありませんでした。同年一〇月三〇日付の政府への覚書には次のように記されています。

教員及教育関係職員ノ調査 選択 認可ニ関スル件

嘗テ敗戦戦罪災害窮乏及ビ日本人ノ現在ノ如キ悲惨ナル状態ニ導キシ軍国主義、超国家主義的影響ヲ日本ノ教育組織ヨリ排除スル為又軍国主義的経験又ハ関係ヲ有スル教員並ニ教育関係職員ヲ防止スル為次ノ如ク指令ス

（イ）軍国主義、超国家主義又ハ進駐ノ目的又ハ政策ニ相反スルモノトシテ知ラルル現ニ日本教育組織ニ雇傭セラルル者ハ凡テ直チニ日本ノ教育組織ノ如何ナル地位カラモ解任シ又ハ除外スベキコト（…後略…）

（「大日本帝国政府ニ対スル覚書」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

この通達に見られるように、教育は次の世代への影響が大きいこともあり、軍国主義、超国家主義の関係者を教育現場から排除するように指示されたのでした。そこには民主化を強く推し進めるGHQの姿勢がうかがえます。

このように時代が明らかに大きく変わっていく中で、第二山水中学校自体、かつての軍と関わりを持っていた団体の庇護を受け続けるわけにはいかなくなりました。ついに一九四六年には九月五日付で「貴財団〔香里学園〕が本財団〔山水育英会〕より分離し全々〔ママ〕無関係になり度しとの申出に対し、本財団に於ては今後無条件で一切の関係を断つことを承認いたします」という結末を迎えました。こうして財団法人山水育英会から離れ、財団法人香里学園の香里中学校・高等学校として再出発することとなったのです。

しかし、香里学園は前身である大阪偕行社附属中学校や第二山水中学校と完全に断絶したわけではありませんでした。というのも一九四〇年の大阪偕行社附属中学校開校に基づいて、一九五〇年に一〇周年記念式を開催しているからです。このことからも香里学園は戦後の新たな教育施策に従いつつも、偕行社附属中学校からの流れを意識していたと考えられます。

同志社への合併交渉

ただし、香里学園は戦前と打って変わって、強力な支援団体の庇護を失い、生徒を確保して学校を存続させる術を求めていました。そうした中で、同志社の校友であった柴田勝正を介して、大学へ進学できる利点のある同志社との合併案が持ち上がり、一九五〇年秋から四回に及ぶ交渉委員会が設けられました。

けれども、戦前に陸軍と密接に関わっていた団体の校風とキリスト教精神に則った私立の校風とではあまりに相違しており、香里学園側には合併がうまく進むのか、危ぶむ声も聞かれました。そのためか、実際に交渉委員の内々の審議録の冒頭では次のように記されています。

確認事項（昭和廿六年一月廿一日）

同志社と香里学園との合併にあたり当校交渉委員会に於て左の諸件を確認す。

一、香里学園の教育目的校風を尊重しつゝ漸次同志社の教育目的校風と一致させてゆく。

二、学校経営の面に於ては均等の立場に立ち協力して運営する。

以上の目的を達成する為次の諸項を確認す。

A 生徒に関する事項

（…中略…）

（四）現在の生徒に対し宗教教育の強制はしない。

（…後略…）

（「確認事項」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

「香里学園の教育目的校風を尊重しつゝ漸次同志社の教育目的校風と一致させてゆく」、「現在の生徒に対し宗教教育の強制はしない」という文言があるように、合併してもなるだけ現状を維持し、急激な転換を望まない思惑がうかがえます。

一方、同志社側でも、田畑忍理事は、合併により却って同志社全体の経営を悪化しないか、懸念を示していました。大塚節治総長も後の回想によると当初はこの合併案に乗り気でありませんでした。法人評議員会でも合併案は否定的にとらえられました。そこで松好貞夫教授を長とした調査委員会による、合併に肯定的な報告を踏まえて、ようやく三月三〇日の理事会で合併案は認められました。その審議報告で合併の意義に関して次のように述べられています。

同志社は予てから大阪と因縁があり、新島先生が最初日本第二の大都会大阪に同志社を設立せんと計画せられ、或は同志社先輩諸氏が関係して泰西学館が開設せられた古い時代のことは措き、海老名総長時代［一九二〇‐一九二八］には向日町に、牧野総長時代［一九三八‐一九四七］には山崎に、湯浅前総長時代［一九四七‐一九五〇］には北河内郡津田町長尾に、夫々大阪の大人口を目的に南進が企図せられたが、地価その他の事情により実現に到らなかつた。近年、同志社大学の学部数並に専攻が増し、且つ学生増募以来、同志社中・高等学校出身大学生数は、全大学生数の一小部分に過ぎないことになつた。従つて、少年時代から同志社に於て基督教主義教育を受けた生徒が、多数大学に進学し、中学に始まる同志社教育が大学に至つて完成すると云う同志社学制の妙味を完全に効果あらしむるため、同志社第二、第二中学校、高等学校を増設す可しとの要望が次第に高まりつゝあつた際、上記香里学園が、将来の経営難を予想し、何れかの有名な大学と提携或は合併の希望を持つている旨を知つたので、同志社理事会では此の好機を捉え、海老名総長以来歴代総長の企図した予ての理想の一部実現を計画したものである。（…後略…）

（「香里学園の合併に関する審議報告」：同志社香里中学校・高等学校所蔵）

このように、香里学園が選ばれたのは、同志社にとって大阪に同志社の中学校、高等学校を設立することが念願であり、それが実現する貴重な機会であるからと理由づけられています。そして、同志社の目指す、少年期から始まる理想的なキリスト教教育を実現するためにも香里学園を傘下に収めることは重要な意義を持つと肯定的にとらえられています。

しかし、ここにはかつて香里学園が合併に際して望んでいた思惑との相違を見て取れます。同志社側は「基督教主義教育」を重視する姿勢を明確に示しているからです。一九五一年六月二一日に交わされた覚書には次のように書かれています。

覚書

学校法人同志社（以下甲と称す）と学校法人香里学園（以下乙と称す）とは両法人合併に関し次の事項を相互確認する。

一、学校法人に関する事項

（一）甲と乙とは合併し、乙は解散し、甲は存続する。
（二）現在乙の経営する学校名は夫々同志社香里高等学校同志社香里中学校と称する。
（…中略…）
三、生徒に関する事項
（…中略…）
（五）生徒の教育に就いては乙の学風を尊重しつゝ漸次甲の学風教育目的と一致させてゆく。（…後略…）
（「同志社と香里学園の合併に関する覚書」：同志社香里中学校・高等学校所蔵）

かつて、確認事項で冒頭に挙げられていた条件、「香里学園の教育目的校風を尊重しつゝ漸次同志社の教育目的校風と一致させてゆく」は語句を変更して「生徒に対する事項」の最後に置かれました。ここには香里学園への配慮がみられます。しかし、生徒に対する「宗教教育の強制はしない」の文言が無くなったことから、合併後の教育方針については同志社の意向が反映されたと見て取れます。

同志社香里中学校・高等学校の誕生

こうして、ようやく合意に至った一九五一年七月五日付の合併契約書において、同志社の意図に沿った教育方針が明記されます。

合併契約書

学校法人同志社（甲）と学校法人香里学園（乙）との間に夫々の理事会及評議員会の議決並に所轄庁の認可を経て左の条件を以て合併することを契約する。
一、乙は甲のキリスト教を徳育の基本とする立学の精神を順守すること。
二、私立学校法による合併により乙は解散し、存続する甲に吸収するものとす。
（…中略…）
五、甲は乙の設置する学校を左の通り改称する。

現称	改称
香里高等学校	同志社香里高等学校
香里中学校	同志社香里中学校

（…後略…）
（「合併契約書」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

このように「乙［香里学園］は甲［同志社］のキリスト教を徳育の基本とする立学の精神を順守すること」が冒頭に述べられ、これまでに触れられた「教育目的校風」や「学風教育目的」に関してははっきりと「キリスト教」が記されて、開校時より「立学の精神」とすることが認められました。結局のところ、同志社の主導により合併は進められたといえます。この校風の変遷はまさしく戦争を経て、私学教育の可能性が解放された時代の変化を物語っており、それにより同志社はキリスト教に基づく教育をより実践しうる状況に近づけたのでした。

その後、学校法人同志社は学校法人香里学園を合併したことについて、文部大臣宛てで次のように申請しました。

同香高第一二四号
昭和二十六年十二月五日
学校法人同志社理事長
大塚節治　印

文部大臣 天野禎祐殿
合併登記手続に関する件
大阪府寝屋川市大字三井三百二十八番地学校法人香里学園は学校法人同志社に合併せられましたので別紙謄本相添え此段御届けに及びます。

（「合併登記手続に関する件」：同志社香里中学校・高等学校所蔵資料）

おわりに

以上が同志社香里中学校・高等学校開校のあらましです。細かい考察には至りませんでしたが、開校への道のりには敗戦を境にした社会的大変動が如実に反映されています。元来、陸軍に関連した学校がキリスト教精神に則った私学、同志社香里中学校・高等学校として生まれ変われた経緯とは近代日本の教育のたどった変遷の縮図そのものであることを忘れてはならないでしょう。

本文中の［　］は同志社社史資料センターによる補注

参考文献

同志社香里中学校・高等学校［編］『二十年の歩み　昭和26年 - 昭和46年』
同志社香里30周年記念事業委員会編『三十年記念誌』１９８１
同志社香里中学校・高等学校『五十周年記念誌　語り継ぐ五十年の歩み』２００１
喜多正明「同志社と香里学園の合併問題―香里所有の資料を中心にみた―」『同志社談叢』第６号１９８５
喜多正明［編］『同志社香里中学高校の歴史 第一部』
大塚節治『回顧七十七年』１９７７　同朋舎

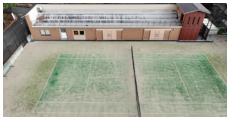
no.48

建物案内

体育棟・部室棟

（同志社国際中学校・高等学校）

【体育棟】



【部室棟】

２０１５年４月、国際学院初等部の卒業生を迎え入れるため、教育環境のさらなる充実を目指し、校舎の増築と体育施設の整備を進めました。その結果、新たに「体育棟」と「部室棟」という２つの重要な施設が２０１４年９月に完成し、生徒たちの学びと活動の場が大きく広がりました。

体育棟は、床面積１５０・９０㎡の鉄筋コンクリート一階建てで、快適で機能的なデザインが特徴です。施設内には、体育準備室、男女別更衣室、男女別テニス部室、体育倉庫を備えており、生徒たちが安心して利用できる環境を整えました。さらに、屋上には約１５０名が観覧できる席が設置されており、体育の授業だけでなく、テニスの試合観戦などにも活用されています。

部室棟は、床面積２５２・００㎡の鉄筋コンクリート２階建てで、本校が開校以来長年にわたり設置を望んでいた施設です。この建物は主にグラウンドを利用する部活動の部室として使用されており、特に野球部の硬式ボールが当たっても壊れないように設計された扉や構造が特徴です。

「体育棟」と「部室棟」の建物名称は、生徒が親しみやすく、用途が一目で分かるようにあえてシンプルな名前を採用しました。こうした工夫により、学びと活動の場としての利便性が高まっています。

建物案内

no.49

静和館 1993年6月竣工

（同志社女子中学校・高等学校）

向かって右が静和館、左が栄光館です。

現在の静和館は旧静和館の建て替えで2代目として館名を引継ぎ1993年7月14日に献堂式、9月1日から運用された建物です。館名は大正元年8月に竣工した旧静和館が米国太平洋婦人伝道会からの寄付によって建てられたので、太平洋（パシッフィク）の名に因み「静和」館と命名されました。鉄筋コンクリート造り、地上4階、地下1階、普通教室（HR教室）中心で延面積は4911.73㎡です。

赤煉瓦造りであった旧静和館をイメージして全面レンガ風タイル張り、廊下を広くとった1（ワン）フロアー1学年6クラスのHR教室設計で高等学校3学年が1階から3階に入っています。

4階には1学年が収容（収容定員280名）できるホールになっています。毎朝の学年礼拝に使用するほか研修や講演会、文化祭の音楽系クラブ・有志団体の発表の場にもなっています。南側の隣接のホールロビーからは京都御苑の木々が望めます。

地階には図書・情報センター（床面積約100㎡・蔵書数約9万冊）があり、「総合的な学習の時間」等の授業のほか、スタッフ・図書部員が工夫を凝らしたイベントを開催するなど、昼休みや放課後も学習や読書、活動の場として多くの生徒に利用されています。

2016年の3代目希望館新築の際、既存であった静和館・新生館（体育館）と3館を1・2階渡り廊下で繋ぎました。

建設から30年以上が経ち、外壁補修・エレベーター更新等を行いながら、ICT教育充実のため各教室にプロジェクター・無線LAN・有線配信設備等を整えてきました。よき伝統を継承しつつ、未来へ歩みゆく同志社少女を育むにふさわしい学舎であり続けるように、漸次新たにされています。

同志社の逸品

— collection 21 —

George Cruikshank Collectionについて

名ばかりのコレラ対策委員に対する諷刺

「中央保険委員会―コレラ対策会議―」
1831年にロンドンを襲ったコレラの対策委員会委員たちの無為無策、かつ乱脈な実態を諷刺したもの。

George ⅣとCaroline王妃に対する諷刺

「見たことがないぞ！ こんなぴったりの二人！！」
George ⅣとCaroline王妃の不仲を諷刺したもの。

本コレクションは、19世紀イギリスの挿絵画家・諷刺画家の第一人者として知られるGeorge Cruikshankの作品を中心とする総数８５０点あまりからなるコレクションである。

Cruikshankはその生涯において6，０００点とも8，０００点ともいわれる作品を残したが、本コレクションはその約一割近く（挿絵を一点づつ数えれば計3，０００点。したがって彼の作品の約半数）を収蔵している。

コレクションの内訳をやや詳しく述べると、Cruikshankの挿絵を含む小説、伝記、詩集、随筆などの書物が約６００冊を数え、これが本コレクションの主要部分をなしている。またその中にはCharles Dickensの*Oliver Twist*の初版本や、歴史小説家William Ainsworthの*Tower of London*など、多くの稀覯本が含まれる。

次にCruikshankの諷刺画、滑稽画などの版画が約１８０点ある。この中で特筆すべきは、“The Worship of Bacchus”と題する禁酒運動推進を目的とした大判の版画や、エッチング・プレート（諷刺画1点、挿絵2点）が含まれていることである。

第三に、友人 Blanchard Jerrold の *Life of George Cruikshank* など Cruikshank に関する研究書と伝記が40点含まれている。

第四に Cruikshank の自筆書簡、スケッチ、自身の写真、オークション・カタログなどが約120点含まれている。

第五に、Cruikshank の兄 Isaac Robert Cruikshank の挿絵のある書物が約80点入っている。

このように本コレクションは G. Cruikshank について研究する際の基礎資料を多数含むのみならず、同時代の文学研究や社会、風俗研究に欠かすことのできない資料を数多く含んでいるといえるだろう。そしてこれだけのまとまったコレクションは日本はもちろんのこと海外でもなかなか見出し難いものであり、その意味でも極めて重要な資料だと考えられるのである。

引用文献

同志社女子大学発行・編集「ジョージ・クルックシャンクカタログ」
（同志社女子大学学術情報部ライブラリーサービス課）

飲酒の悪習に対する諷刺

本作品は4部に分けて（1828,29,32年）出版され、各部に6点の挿絵が入れられている。*Phrenological Illustrations*（1826）や*Illustrations of Time*（1827）同様、挿絵は色刷りとモノクロとがある。
また本作品によってCruikshankの名声は高まり、このうち数点の挿絵は*Punch*誌の漫画モデルとしても使われた。

テムズ川汚染に対する諷刺

「国民の健康こそ至高の法なり」
1828年の調査委員会の報告に基づいたウォールブルックの下水道やその他の廃棄物によるテムズ河汚染に対する諷刺画。

大学

「103万円の壁」の引上げ

法学部法律学科教授　倉見（くらみ）　智亮（ともあき）

再び注目を集める「103万円の壁」は、「最低生活費保障（憲法25条）のための基礎控除48万円」と「給与所得控除の最低額55万円」の2つの控除により、103万円までは所得を得ても所得税が課されないライン（課税最低限）のことです。このうち基礎控除単体で178万に引き上げる国民民主党の提案が近時話題となっていました。

この政策趣旨は様々考えられますが、後述の通り「103万円の壁」がパートタイム労働者の就労調整の要因となっている、という従来から指摘されてきた問題を解消することを主目的とはしていないと考えられます。そもそも、社会保険における「106万円の壁」（撤廃が検討中）・「130万円の壁」が存在するため、178万円への引上げが就労調整の解消をもたらすかは疑わしいところです。

別の趣旨として考えられるのが、控除額の引上げによる家計の可処分所得の増加です。記憶に新しい定額減税が時限法による1年限りの「一時的減税」であったのに対して、今回の基礎控除等の引上げは、法令の有効期間がない所得税法本法の改正を通じた「恒久減税」です。この恒久減税によって、持続的な家計改善や消費喚起を目指すわけです。

以上に対して、本来的な趣旨とされているのが、インフレ調整です。物価が上がれば最低生活費が上昇し、賃金が上がればブラケット・クリープ（超過累進税率が要因となって賃金上昇率よりも高い比率で所得税額が増加すること）が生じるので、税制面でのインフレ調整が必要になります。最後に課税最低限が引き上げられた1995年以降における「最低賃金の上昇率」（＝73％）を勘案して「103万円」から「178万円」への引上げが提案されている点が、インフレ調整が本来的趣旨といわれる所以です。

もっとも、基礎控除が最低生活費保障の趣旨である点を重視すれば、「最低賃金の上昇率」よりも、「最低生計費の上昇率」や「消費者物価（あるいは生活必需品の物価）の上昇率」などに依拠する方が妥当であるという考えも成り立ちえます。この議論は、生活必需品の物価上昇率を考慮し、基礎控除と給与所得控除をそれぞれ10万円引き上げて「123万円の壁」とすることで最終的に決着しました。

【参考文献】星野卓也「基礎控除引き上げの論点整理」Economic Trends（2024年11月5日公表）

女子大学

「手の保養」を考える

現代社会学部現代こども学科教授　竹井（たけい）　史（ひとし）

「目の保養」という言葉があります。美しい景色や絵画を目にすると、心が洗われたり潤ったり、様々な感情が生まれます。現代では「手の保養」という観点を意識する必要があると考えています。私は、造形教育学を専門としており、造形活動を通じた人間形成や、幼児の造形、図工の教材開発に取り組んでいます。その領域の目的は何かと問われれば、子どもたちの「感性」を豊かにすることであると考えます。一般に感性とは「感じる力」と言われますが、身の回りの世界をすべて感じる力ではありません。自分にとって大切なものやかけがえのないものを選択する力だと位置付けられます。そして、感性を豊かにすることが、実は確かな知性を育むための重要な前提条件となります。子どもたちの外遊びを観察していますと、目で見て手で触れて確かめながら物事を理解しようとする姿が見られます。しかし、現状は、感性を支える五感の中で「触覚」に関わる教育が軽視されがちであり、危機感を抱いています。「触覚」が教育や研究の重要な対象となる機会は少ないと言えます。例えば、最近の小学校学習指導要領の改定では、図工で育てる資質・能力として「色や形」に焦点が当てられる一方、触覚に関する記述が相対的に目立たなくなりました。将来、子どもたちの人間形成に何らかの歪みが生じるのではないかと危惧しています。最先端の研究では、人間の触覚がナノレベルの凹凸を弁別できる能力を持つことが明らかにされています。最後に残されたのは触覚ビジネスとも言われる現代、「触覚」は、現代人の知性の構築や幸福の在り方に深く関わる重要な要素となるのではないでしょうか。では、手の保養としてどのような実践が考えられるでしょうか。例えば、陶芸や土に触れる手仕事は、手で直接素材に触れ、触覚を通じた楽しみを感じるとともに形を作り出す楽しさを味わうことができます。また、木や植物など自然素材に触れることで、触覚を刺激しながら心に潤いを与える効果も期待できます。学校教育においては、完成品を目指すのではなく、手を動かし、素材と対話するプロセスを大切にすることで、感性の育成が促進されます。私たちの日常生活の中で、手を使った経験や楽しみに意識を向けることは、感性を豊かにする第一歩です。「手の保養」を意識して、手で感じる喜びを取り戻してみませんか？

中学校・高等学校

国語表現法　広告講座

高等学校国語科教諭　鴻池（こうのいけ）　雅子（まさこ）

「宣伝会議賞」という広告コンテストがある。協賛企業から与えられた課題に応えてコピーを作るという、コピーライターの登竜門と言われている広告賞だ。昨年度グランプリを受賞したコピーは、「泣く子は育つ」の「は」を「と」に変えただけのコピーである。しかし、助詞を一つ変えただけで、子供と一緒に泣いたり笑ったりしながら成長していく親の姿が見えてくる。たった一文字の力を思い知らされる。このたった一文字に辿り着くまでに、作り手はどれほどの時間を費やしただろう。

二年生の選択科目「国語表現法」で広告を扱うようになってもう二十年以上経つ。受講生たちは広告の基本を学んだ後、最終課題として同志社高等学校のコピーを考え、デザインを施し、広告ポスターを作成する。初めは、どこかで聞いたことがあるような顔のないコピーが並ぶ。「可能性が伸びる学校」「自分で未来を作る学校」「ルールに縛られない学校」…耳馴染みがいいだけの言葉は、他人の心にひっかかることなく、するすると記憶から滑り落ちる。

ところが、相互評価を重ねるうちに、彼らは気づいていく。結局みんな同じことを言っているということに。「自由な学校」「個性を育む学校」を、それらしい言葉で言い換えているに過ぎないということに。「どう言うか」の前に「何を言うか」を考えることができていないのだ。ありふれたメッセージをいくらこねくり回しても、他人の心に届く言葉は生まれない。

同志社の自由とは何だろう？それは例えばどんな自由だろう？自由だからどうなれるのだろう？自分にしか語れない同志社の魅力とは何だろう？自分が本当に言いたいことは何なのだろう？井戸を掘るように自分に問い続けた先に、これだ！という言葉が待っている。

「自分の言いたいことは何かを探る時間は、出口のない深海にいるような気持ちで苦しいものでした。でも、自分の言いたいことを自分の外へ出す楽しさを知ることができたのは、何よりの財産です。」

「自分が伝えたいことが何なのかを考えるのは新鮮な体験だった。先生の、自分にしか書けないことを書きなさいという言葉を聞いて、学園祭で演奏したときの情景が思い浮かんだ。あの時の充足感を伝えたい、と思った。私は、自分だけの表現を生み出すことができた！」

（受講生の感想より）

「自分だけの表現」と出会えた瞬間の、高校生の顔が見たくて、この授業を続けている。結局、「自分」という人間が辿ったエピソードの中にしか答えはない。だからこそ、あなたは替えのきかない特別な存在なのだ、そう伝えたくて、私はこの授業を続けていく。

サンエムカラー
2,090円（税込）
刊行日 2024年9月28日

ルビコン川を渡る
新島襄を語る・別巻（七）

本井康博（元大学神学部教授）著

昨年は新島襄脱国百六十年、ならびに帰国後初の安中への帰省百五十年の年でした。本書はそれらを記念した講演等を収録した講演集で、「新島襄を語る」シリーズ（既刊は本巻十巻、別巻七巻）の一冊です。

新島は快風丸で函館に入港する直前、潮待ちのために下北半島突端の風間浦に寄港しました。同地には新島の寄港碑が立ち、函館の海外渡航碑同様に毎年、同志社との共催で碑前祭が行われます。

建碑三十年を迎えた三年前、風間浦・同志社交流三十周年記念の講演に招かれました。ここから対岸の函館を臨むと、新島の航海はルビコン川を渡るような危険な挑戦のように思わされました。津軽海峡は新島には越えてはならない最後の一線でした。

しかし、退路を絶つ覚悟で決行に至りました。

函館出奔後、十年を経て横浜に戻った新島はひとまず安中に帰省します。以後、現在に至るまで種々の交流が安中と同志社を繋いできました。その結果、二年前には両者間で包括連携協定が締結されました。

私は安中での記念講演で、同志社との絆を深めた同地の湯浅家、とりわけ湯浅治郎（同志社理事）、大工原銀太郎（同志社総長）、湯浅八郎（同志社総長）の事績を紹介しました。彼らには同志社はけっして桃源郷ではありませんでした。しかし上州人・新島の背中を追ってルビコン川を渡り、背水の陣を敷いてあえて同志社に飛び込みました。

人は皆、一度はルビコン川を前に決断を迫られることがあるのではないでしょうか。

著者より

名古屋大学出版会
6,930円（税込）
刊行日 2024年6月10日

中国共産党の神経系

周 俊（元大学院グローバル・スタディーズ研究科助教）著

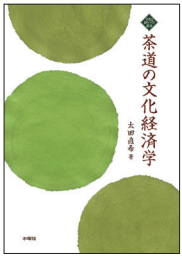
アンデルセン童話の『裸の王様』をご存知だろうか。周囲はみな恐れをなして都合の悪い真実を伝えず、独裁者はヨイショする声に踊らされて愚かな意思決定を行ってしまう、と。しかし、独裁体制への批判や改善への願いといった感情が先行するせいか、我々は往々にして王様の愚かさに視線を向ける一方、独裁体制の中でも「でも、王様、裸だよ」という声が上がっていることの重要性や意義をあまり深く考えない。

本書は中国共産党の情報システムを「神経系」と表現し、様々な公刊・未公刊の文書資料とGIS（地理情報システム）のような斬新な研究方法によりその全貌を歴史的に明らかにすることを試みた。圧政に対する恐怖を持ちながらも、正義感に満ちて進言する党官僚、万民塗炭の苦しみを救おうとする記者、時代の荒波に翻弄されながらも陳情し続けた民衆など、多様なアクターが党の指導部に真実を伝え続けた。しかし、固定観念やイデオロギーに囚われているため、毛沢東ら共産党の指導者の情報利用には、認知バイアスがかかっていた。その結果、正確な情報を手に入れながら、毛沢東らは依然として数千万の餓死者を生み出した大躍進（1950年代末）への道を選んでしまったのである。

情報をどう扱うのか。認知バイアスとどう付き合うのか。これはいつの世でも、どの国でも、そして誰もが考えなければならない課題である。本書が、独裁体制そして情報の問題を考え直すきっかけとして、少しでもお役に立つことができるなら、望外の喜びである。

著者より

※著者の所属・職名は執筆時のものです。



水曜社
2,970円（税込）
刊行日 2024年5月29日

茶道の文化経済学

太田直希（大学経済学部助教）著

2024年5月28日、利休月命日に誕生した記念すべき私の第一作です。

家元制度をもつわが国の伝統文化に対する研究は、文化経済学という分野においてもこれまでわずかな研究蓄積しかなく、この領域に踏み込む上では自ら新しい文化経済のモデルを描く必要がありました。

幸い私は研究の世界とお茶の世界の双方で師や友に恵まれ、洛中の大学キャンパスと茶道稽古場で学ぶ環境はまさに至上のものでした。そして流行り病の流行を機に愛知の祖父母実家に執筆の拠点を移し、酒とお茶の日々……時々執筆。互いに書いた文章を競い合うライバルでもあった祖父は、本書の刊行を見届け、座右の銘であるサミュエル・ウルマンの詩を体現する前向きな心のまま月へと旅立ちました。人類にとってはたったの一冊ですが、私にとっては生涯忘れることのない青春の一冊として、心を込めて皆様にお届けします。

家元茶道の文化体系や哲学・思想が自律的経済システムに反映されることを導くその筆致は、自分でいうのもなんですが好きなものを語る喜びが溢れていてとても良いです。またその前提となる「わび」の概念に関する議論もみどころです。「わび」という言葉については様々な解釈がありますが……さて、あなたの思う「わび」は私と同じでしょうか？現代の家元茶道について稽古場の経済・茶会の経済・道具の経済に要素分解しているため、茶道についてこれから知りたいという方にも参考になると思います。

売り切れ御免！重版は未定です！！まだ間に合います！！！今のうち！！！！

お一人様何冊でもお買い上げいただけます。

ちょっとナウな茶道観、文化経済学のフロンティアへ。さあ、お手をどうぞ！

著者より

春風社
2,420円（税込）
刊行日 2024年6月12日

イギリス湖水地方 ピーターラビットのガーデンフラワー日記

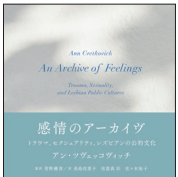
臼井雅美（大学文学部教授）著

『ピーターラビットのおはなし』シリーズの著者ビアトリクス・ポターは、湖水地方に自生したり庭園に植えられたりした草木をこよなく愛し、絵本の中に描いた。私自身が在外研究でランカスター大学に滞在していた一年間、週末になると湖水地方で渓谷をめぐるフェルウォーキングをしていた。その時に多くの花々と出逢ったことから二冊の本が生まれた。ポターの絵本の世界に描かれた野の花々に関しては、『イギリス湖水地方 ピーターラビットの野の花めぐり』として二〇二三年に上梓した。今回は、ピーターたちを脅かす人間がつくりあげたガーデンに植えられた植物に関してまとめてみた。

風光明媚な湖水地方には、中世から続く城や名家の屋敷が遺されてきた一方で、一九世紀に台頭してきた中流階級たちがマンチェスターやリヴァプールから都会の喧騒を逃れてやってきては屋敷を建てていった。彼らは、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けて、湖水地方の景観に合う庭園をつくっていった。その一方で、鉄道建設反対運動から自然保護の運動が興り、ナショナルトラストに守られる地域となったために、酪農家たちが住んだコテージも保護され、庭が大衆化する過程で小規模な庭が併設された。それらの庭には、大英帝国の繁栄と共にプラントハンターにより世界中から持ち込まれた草木が移植され、品種改良され、栽培されて、ガーデンフラワーとして植えられてきた。

本書は、「春の囁きに誘われて」、「初夏から夏へ、光との共演」、「秋のそよ風に揺れて」、「冬から春に向けて」と題した四章のもとに、四五種の花々を紹介している。科学的見地からではなく、植物の語源を含む歴史的背景や文化的意味を中心に、それぞれの植物を紹介する。

著者より



花伝社
4,400円（税込）
刊行日 2024年6月30日

感情のアーカイヴ

菅野優香（大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）著

今では日常的に使われるようになった「トラウマ」は、当初、肉体的な負傷を指す言葉でした。それが、精神的あるいは心理的な苦痛を指す用語になったのは19世紀のことです。第一次世界大戦、ホロコースト、ベトナム戦争といった歴史的出来事との関連で語られてきたこの言葉を、臨床的な視点から解き放ち、社会的、文化的な言説として捉え直そうとするのがこの本の大きな目的のひとつです。そのため、著者のアン・ツヴェッコヴィッチは「レズビアン・セクシュアリティ」、「移動とディアスポラ」、「エイズ・アクティヴィズム」という三つの領域を対象とし、それぞれの領域において、情動的な経験がいかにして新しい文化の土台となりうるのかを具体的に探っていきます。そして、日常のトラウマ、性的なトラウマに焦点を当てることによって、愛、怒り、恥、親密さなどさまざまな感情のアーカイヴへと読者を導いていくのです。ツヴェッコヴィッチは、トラウマのアーカイブを発見し、それを分析するだけでなく、この本自体がアーカイヴとなることを目指していると語っています。ブッチ／フェムや、エイズ・アクティヴィズムという本書が扱うトピックについての重要な証言者であったアンバー・ホリボーが二〇二三年に亡くなったことで、『感情のアーカイヴ』は文字通り、アーカイヴとなったといえるかもしれません。レズビアンの公的文化を育むだけでなく、クィアな対抗的公共圏を生み出す要因として「トラウマ」を再定義する本書は、公的なものと私的なもの、政治的トラウマと性的トラウマの区別を無効化しながら、トラウマの脱病理化に挑みます。そしてトラウマを受け入れ、ともに行きていく可能性を読者に強く語りかけるのです。

著者より

勁草書房
3,300円（税込）
刊行日 2024年7月25日

忘れられたアダム・スミス

山森亮（大学経済学部教授）著

D．W．ラーネッドを評するなかで住谷悦治は、「人はパンのみで生くるものではないが、同時にパンなくして生くるものではない」と書いています。この文の前半はラーネッドのキリスト教への献身を、後半は経済学の探究を表しているのでしょう。住谷にとって経済学は「パン＝物質的な必要」に関わるものでした。

本書は、この住谷の把握の重要性を今日に活かすべく、経済学に「必要」概念を取り戻そうとする試みです。第一に、現代経済学の起源として位置づけられることの多いアダム・スミスとカール・メンガーにとって、必要概念が枢要な位置を占めていたことを明らかにしました。第二に、スミスとメンガーは「パン＝物質的な必要」だけではなく、慣習によって必要となるものを認識していました。これを本書では「間主観的必要」として捉え直しています。第三に、こうして再発見されたスミスやメンガーの必要概念が、現在を生きる私たちにとって持つ意味について展開しました。具体的には、相対的貧困の理論化、気候危機下での持続可能な生活の可能性、ケア労働の可視化などへの寄与です。それらは同時に、もう一つのありうべき経済学への示唆ともなっています。

本書の着想は本学着任前だった20年近く前にケンブリッジにいた時に得ましたが、その後研究は停滞していました。10年ほど前に在外研究でケンブリッジに戻る機会を頂き、本書の元となった4つの英語論文を執筆することができました。貴重な機会を下さった経済学部はじめ同志社共同体の皆さんに感謝します。本書がラーネッド以来の同志社の伝統を受け継ぐものとなっているかの判断は、皆さんに委ねたいと思います。

著者より

新潮社
1,980円（税込）
刊行日 2024年9月25日

大統領たちの五〇年史

村田晃嗣（大学法学部教授）著

ようこそ「またトラ」の世界へ！

2024年11月の米大統領選挙で、ドナルド・トランプが返り咲きを決め、翌年1月に第47代大統領に就任した。アメリカを取り巻く内外情勢は激動し、混乱している。大統領職への信頼も揺らいでいる。今から半世紀前の1974年も、ベトナム戦争の敗北やウォーターゲート事件で、アメリカは似たような状況にあった。そこで、拙著では、半世紀の視野でアメリカの内政と外交を俯瞰してみた。とりわけ、ジェラルド・フォードからジョー・バイデンまでの9人の大統領の個性や政治手法に焦点を当ててみた。いわば、比較大統領外交史の試みである。

2024年12月には、ジミー・カーター元大統領が100歳で亡くなり、翌年1月の国葬ではフォード元大統領の弔辞が読まれた。二人は1976年の大統領選挙を戦った仲であり、フォードは2006年にすでに亡くなっている。しかし、二人は選挙ののちに親交を深め、どちらが先に死んでも相手に弔辞を残そうと約束していたのである。超党派精神はまだ生きていた。バイデンはカーターの国葬で「人格、人格、人格」と語り、トランプを睨みつけた。だが、人権を重視したカーターのアメリカも、トランプのそれも、ともに現実のアメリカなのである。

いずれにせよ、われわれはアメリカと付き合っていかなければならない。そのためには、短期的な評価を超えた長期的な視点が必要である。そうした自戒をも込めて、半世紀にわたる9人の大統領の物語を紡いでみた。

著者より

ミネルヴァ書房
4,400円（税込）
刊行日 2024年11月1日

日本の製紙業における合併効果
――生産性と効率性の計量分析

上田雅弘（大学商学部教授）著

本書では日本の製紙業界におけるダイナミックな構造変化に注目し、合併のインセンティブを寡占市場の理論モデルを用いて経済合理的に整理するとともに、収益性・生産性・効率性の側面から多角的な統計分析の手法を駆使して実証的に解明することを目的にしています。

製紙業界は1990年代に大規模な合併が繰り返され、市場が寡占化しました。この背景には、情報化社会の浸透によって紙の需要量が鈍化し、製紙企業が供給面の合理化を実行した事実があります。こうした需要状況の変化と供給力の強化が、製紙業の市場構造や成果にどのような影響を与えたのか、定式化した理論モデルによって導かれる合併効果を仮説として、本書では多角的な実証分析の手法を展開しています。

分析のキーワードは、大規模生産の効率性を表す「規模の経済性」と、複数財生産のメリットである「範囲の経済性」です。製紙業界で相次いだ合併の成否を判断する鍵は、規模と範囲の経済性を発揮し、生産性を向上させるとともに費用効率を改善することです。これらが実現できているかどうか、「全要素生産性（TFP）」、「確率的フロンティア分析（SFA）」、「包絡分析法（DEA）」などの手法を駆使して合併の成果を検討しています。

現在、製紙業界では従来の本業である紙の需要低迷が新市場開拓のインセンティブとなり、セルロースナノファイバー（CNF）などの新素材を開発するイノベーションを実現しています。こうした新市場の拡大が企業の生産性・効率性をいかに向上させるのか、シミュレーション・データによる実証分析も試みています。

著者より

中央経済社
2,970円(税込)
刊行日 2024年11月10日

データとケースでわかるヨーロッパ企業

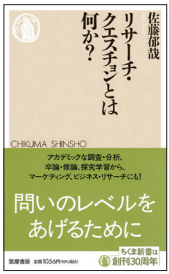
和田 美憲（大学経済学部准教授）著

皆さんにとってヨーロッパ企業はどんな存在でしょうか？憧れのブランドやスタイリッシュな製品を提供してくれる〝レジェンド〟ですか？それとも世界経済をけん引する〝リーダー〟でしょうか？あるいは日本企業と凌ぎを削る〝ライバル〟なのでしょうか。本書はヨーロッパ企業の姿を、さまざまなデータとケース（事例と判例）、そして経済・経営学の知識を使って浮彫にする1つの試みです。特にEUでの通貨統合が始まってから、現在までの変化に注目しています。本書には、著者がヨーロッパ諸国に滞在した中で、肌で感じたヨーロッパの経済や文化の特徴、人々の暮らしや価値観、そして日本との違いも綴っています。

企業論の観点からヨーロッパ経済全体の動きを理解するために、近年のヨーロッパ企業に関わる経済イベントを中心に、以下のようなテーマを扱っています。／単一市場は企業に何をもたらしたのか？／「自由な移動」は本当に望ましいのか？／企業の所有構造を調査しよう／M&Aは企業に何をもたらすのか？／イギリスはなぜEUを離脱したのか？／エネルギー産業―環境政策と経済発展を支える企業とは？／インフラ産業―民営と国営、どちらが望ましい？／自動車産業―憧れのヨーロッパ車は誰が製造している？／ラグジュアリー産業―最強のブランド力を作る法則とは？／生活関連産業―生活を彩る企業の秘密に迫る！／

本書を読み終えた時に、ヨーロッパ企業への理解が深まり、さらに興味を持ってもらえれば幸いです。

著者より



筑摩書房
1,056円(税込)
刊行日 2024年11月10日

リサーチ・クエスチョンとは何か？

佐藤 郁哉（大学商学部教授）著

「答えは無い。なぜならば問いが無いからだ」――フランス出身の美術家マルセル・デュシャンは、ある時、このように述べたとされています。しかし、学術論文などでは、研究上の問い＝リサーチ・クエスチョンが明確に示されていないはずなのに、突然答え（らしきもの）が登場してくることがあります。特に仮説検証法的な研究論文では、リサーチ・クエスチョンが明示されていないにもかかわらず「仮説命題」（＝仮の答え）が列挙されている例は珍しくありません。

この本を書くことになった理由の一つには、そのような奇妙な慣行に光をあてて見たかったということがあります。

本書の執筆を通して改めて確認できたのは次のような点です――「良い」リサーチ・クエスチョンの条件に関する解説は存在しているものの、肝心の「リサーチ・クエスチョンとは何か？」という問いそれ自体については明確な答えが提供されてきたとは言い難い。

そこでこの本では、リサーチ・クエスチョンを次のように定義してみました。

【リサーチ・クエスチョン】社会調査（社会科学系の実証研究）のさまざまな段階で設定される研究上の課題や問いを疑問文形式の簡潔な文章で表現したもの

学問分野の性格によっては、右とは異なる定義の仕方が可能でしょう。著者としては、本書が一つの「たたき台」となって、さまざまな分野でリサーチ・クエスチョンに関する議論が深まっていき、また、それがより挑発的で革新的な研究成果に結びついていくことを期待します。

著者より

武蔵野書院
14,850円（税込）
刊行日 2024年2月14日

谷崎源氏の基礎的研究

大津直子（女子大学表象文化学部准教授）著

谷崎潤一郎の遺した作品は、没後50年を経てなお世界中で愛読されている。しかしながら、後半生に谷崎が繰り返し取り組んだ源氏訳、所謂谷崎源氏を専門に論じた研究書は管見では存在しない。

谷崎源氏は3種存在し、現在それぞれ〈旧訳〉（昭和14年～昭和16年）、〈新訳〉（昭和26年～昭和29年）、〈新々訳〉（昭和39年～昭和40年）と呼ばれている。もっとも特徴的なのは、光源氏と藤壺の密通に代表される戦時下に不穏当な筋書きを削除した〈旧訳〉である。谷崎源氏は出版社にとって昭和前半期にまたがる一大プロジェクトであった。そのため、関係者の回顧録や手記がいくつも残されている。とりわけ〈旧訳〉は国粋主義による『源氏物語』迫害の象徴として物語られることも多い。豊富な証言それ自体は歓迎すべきことである。しかし、それのみに依拠していては長期に亘り複数回出版されたこの作品の実像を見誤ることにもなりかねない。

戦前、なぜ谷崎や出版元中央公論社はあらゆる煩雑さに耐えながら〈旧訳〉の刊行を完遂したのか。戦後、なぜ谷崎は〈旧訳〉を焼き直すという選択をせず、こだわりぬいた文体から装幀までを一新した〈新訳〉を作り上げたのか。谷崎源氏は戦後の『源氏物語』享受の在り方を決定づけた。本書は訳文が変遷する痕跡をほぼ完全に留めた〈新訳〉草稿の調査をふまえ、源氏訳という仕事が谷崎にとって、そして日本社会にとっていかなる意義を持ったかを問う。

著者より

明治図書出版
2,310円（税込）
刊行日 2024年4月

『困難を抱える子どものための伝わるアセスメントシートの書き方：専門家・コーディネーターと効果的に連携する！』

勝浦眞仁（女子大学現代社会学部准教授）著

本書は、専門家として各地域の学校を巡回し、特別な教育的支援を必要とする児童についての相談を行ってきた筆者の学校臨床をもとに執筆しました。対象児童に対する支援が充実して展開されていくためには、その基盤となるアセスメントシート（学習面や行動面における学校での児童の様子、家庭環境、学校の支援体制等の記録）がどのように書かれているかが問われると考えたことが執筆の契機となりました。

アセスメントシートを読み解いていくと、対象児童の問題とされる行動の裏側にある、自己肯定感／自己否定感の問題に目を向けざるをえませんでした。そして、自己否定感が強く出ている児童の立て直しを支えていくためには、①「深い児童理解に基づく支援」、②「担任だからこそできる多様な支援」、③「学校内外の環境を活かした支援」という3つの支援の観点に立ち、それらから生まれる6つのアプローチを継続していくことの重要性を明らかにしました。

実際にあったリアリティーのある相談事例を基にしましたので、特別支援教育に携わる先生方をはじめとして、学校現場で奮闘する教師のみなさんにとって、これからの支援のヒントになるものをたくさん見つけていただけるのではないかと期待しています。また、執筆を通して、学校現場と共に歩む専門家として、これからも精進していきたいという思いを筆者自身より強くしました。本書が専門家と相談するきっかけや、相談する内容の手がかりとなれば、大変うれしく存じます。

著者より

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念　全同志社合唱祭開催

―「合唱の同志社」、ここに集う。―

法人部

法人事務部　創立150周年記念事業事務室

11月9日（土）、京都コンサートホールにおいて、同志社創立150周年記念「全同志社合唱祭」が開催された。

同志社グリークラブや同志社学生混声合唱団C.C.D.など、同志社に連なる23の合唱団が集い、まさに「合唱の同志社」と呼ぶにふさわしいビッグイベントとなった。

KBS京都のアナウンサーで、同志社にゆかりの深い海平和氏の開会宣言のあと、八田英二同志社総長・理事長のあいさつで幕を開け、単独・合同併せて15ステージの合唱が繰り広げられた。中高生、大学生、PTA、OB・OGと幅広い年齢層が、女声、男声、混声、そしてゴスペルと、様々な演奏形態で観客を楽しませた。

圧巻は、827人の出演者全員による「全体合唱」。同志社オリジナル賛美歌「主の道を行こう」に続き、「ハレルヤコーラス」を、本山秀毅氏の指揮、大代恵氏のパイプオルガン伴奏により、観客も交えて高らかに歌い上げられた。まさに満堂に響き渡る歌声であった。

指揮の本山氏をして「メサイアが初演された時の2，000人の合唱に匹敵する歌声ではなかったろうか」と言わしめたほどの迫力であった。ステージ、ポディウム、バルコニー、そして桟敷席に、所狭しと並んだ合唱団に包まれ

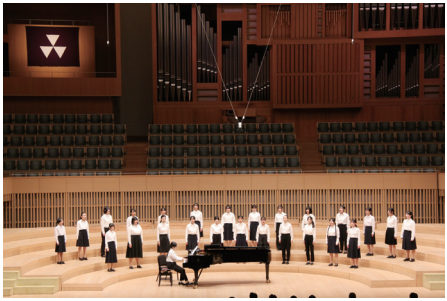
全体合唱

同志社グリークラブ＆
同志社グリークラブOB会（クローバークラブ）

オールCCD

た観客は、生の声の力強さ、合唱の醍醐味を感じられたことだろう。長く続いたコロナ禍で、合唱は「飛沫感染の温床」とされていた。大勢で歌うことが禁じられた日々から解放され、マスク無しで力いっぱい歌う喜びが、ここに集った全てのメンバーの顔に溢れていた。

今回の合唱祭に至るまでには、2年以上の歳月と、多くの人々の協力が必要であった。始まりは2022年3月。今回実行委員長を務めた遠山耕二氏（1973年大学文学部卒）は語る。「同志社学生混声合唱団の先輩である山崎達雄兄から呼び出され訪れたのは、『学校法人同志社創立150周年記念事業事務室』でした。そこで、創立150周年記念事業の担当者から『同志社創立125周年に開催した全同志社合唱祭が好評であったため、創立150周年に向けて再び行えないか』との相談がありました。こんな私に、母校からの相談があったということに大いに発奮しました。私は、125周年の合唱祭でステージマネージャーをしたということで、今回実行委員長を拝命することになりました。誠に光栄なことでした。実行副委員長には同志社グリークラブOB会理事長の森島敏夫氏に務めていただき、他の委員の皆さんとともに大いに助けていただきました。」



同志社女子中高聖歌隊

それからは、同志社関係の合唱団の洗い出し、趣意書の作成など準備作業が続いた。留意点は、合唱団の「漏れ」がないことと、コロナ禍で活動しているかどうかという点

であった。リストアップされた団体にアンケートを送り、活動状況と合唱祭への参加意思を聞いた。その結果、23団体から「参加希望」の回答が届いた。それを受け、２０２３年1月に第1回代表者会議を開き、実行に向けて本格的に動き出すことになった。

ただ、アンケートでは厳しい現実も知らされた。それは、合唱人口の大幅な減少である。少子化が進み、若者の趣味が多様化し、学生はアルバイトに時間を割かれ、クラブ活動をする人数自体が減ってきた。そこに、新型コロナという災厄が追い討ちをかけた。こんな状況下で、合唱祭を開いても果たして盛り上がるのかどうかが心配された。

だが、そのコロナが感染症5類に移行してからは、あっという間にあちこちで合唱活動は再開され、マスク無しのコンサートが増えてきた。毎回、代表者会議に集まった面々の熱量も高く、こんな状況だからこそ、コロナがあったからこそ、同志社の仲間が一堂に集い、「合唱の力」を示したいという意欲に満ちていた。その意欲と周到な準備が今回の合唱祭の大成功につながったといえるのではないだろうか。聴衆は合計で1，２８８名であった。

コンサート当日の様子は、同志社創立１５０周年記念ホームページでご覧いただけます。(https://150th.doshisha.ed.jp/)

また、同志社社史資料センターの協力により、ハリス理化学館同志社ギャラリー第32回企画展として、「合唱の同志社　―One Purpose DOSHISHA 合唱が紡ぐ１５０年　現在～過去～未来―」が２０２４年9月24日～11月17日まで同志社大学今出川キャンパスのハリス理化学館同志社ギャラリー2階企画展示室で開催され、6，１６１人の合唱ファンの方にお越しいただいた。この企画に参画した合唱団には、同志社の歴史と共に歩んできたコーラス・合唱に関する歴史を残したいという願い、そして、新型コロナウイルスによる未曽有の災害を経験してもなお、未来を向いて活動する自分たちの姿を示したいという想いがあった。展示には20団体の協力があり、あわせて２５０点余りの資料を展示した。１２０年の歴史を有する団体から、創立後数年という団体まで様々な歴史的背景を有する各団体が、自らの歩みを形で示すたいへん意義のある展示となった。

同志社クローズ・アップ

同志社大学政策学部創立20周年事業について

大学

政策学部長　足立（あだち）　光生（みつお）

2024年11月23日、同志社大学政策学部創立20周年を記念して、政策学部創立20周年記念シンポジウムならびに、政策学部20周年記念祝賀パーティが執り行われました。

最初に、13時より寒梅館ハーディホールにおいて、政策学部創立20周年記念シンポジウムが行われました。開会にあたり、足立光生・政策学部長より挨拶があり、政策学部が創立20周年を機に掲げた「学部をはみ出せ、その策で挑め」のスローガンについての紹介も行われました。次に、来賓祝辞として小原克博・同志社大学学長よりお話があり、同志社大学の中での政策学部の意義について再度考える重要な機会となりました。その後、真山達志・政策学部教授の基調講演が行われ、政策学部創立時の様々なエピソード

足立学部長

小原学長

真山教授

座談会

を紹介いただき、創立時の教員の志をあらためて確認する有意義な時間となりました。そして、シンポジウムの終盤には政策学部卒業生による座談会が開かれました。各界でご活躍されている卒業生によって、政策学部の学びがいかに今のキャリアにつながっているか、といったエピソードをご紹介していただくなかで、政策学部の意義について有益な意見が飛び交いました。このように政策学部創立20周年記念シンポジウムは盛況のうちに終幕しました。

次に、17時より京都ホテルオークラに会場を移し、政策学部20周年記念祝賀パーティが盛大に開催されました。最初に足立光生・政策学部長から開会の挨拶が行われた後、八田英二・同志社総長・理事長から祝辞の挨拶がありました。その後、山谷清志・政策学部教授から乾杯の発声があり、パーティの幕が開きました。ゼミ毎に撮影された懐かしい写真が次々にスクリーンに映し出されるなか、また、サプライズとして卒業生からのビデオメッセージが映し出される等の企画が進行し、在学生、卒業生、教職員が一同に歓談して、懐かしい思い出話に花が咲きました。パーティの終わりにはDoshisha College Songの斉唱とDoshisha Cheerによって会場が一体となるなか、パーティは盛会のうちに幕を閉じました。

同志社大学政策学部創立20周年事業は、これまでの政策学部の歩みを確認するとともに、今後の政策学部の発展に向けて在学生、卒業生、教職員が一丸となって新たな一歩を踏み出す大きな機会となりました。

八田総長・理事長

祝賀パーティ

Doshisha College Song斉唱

同志社クローズ・アップ

アリス・J・スタークウェザー氏のご子孫のランダル・ファウラー氏がご来校

女子大学

広報課・史料センター

アリス・J・スタークウェザー氏は、明治期の京都で初めてキリスト教主義女子教育の道を切りひらき、同志社女子大学の礎を築いた人物であり、今なおその功績は広く敬愛されています。

ジェームズ館前にて（左から坂本清音名誉教授、Fowler氏夫妻、今井由美子教授）

そのスタークウェザー氏の甥孫であるランダル・ファウラー氏が、妻のパメラ・セブリアン・ファウラー氏らとともに、10月25日に米国バージニア州から本学を訪問されました。

ランダル氏は、スタークウェザー氏のすぐ上の兄ジョージ・ブリッグス・スタークウェザーの子孫にあたります。ジョージはアルゼンチンで結婚後、アメリカに戻りますが、再婚したジョージの娘エスリンがランダル氏の祖母ということになります。ランダル氏自身は現在バージニア州ワシントンD・C近郊に在住で、家族の歴史に関心を持ち、調査を続けておられます。今回ランダル氏は、今から150年近く前に、当時は未知の国だった日本に宣教師

懇談の様子

として派遣され、同志社のキリスト教女子教育に献身されたスタークウェザー氏の足跡を辿るために来日されました。本学からは、スタークウェザー研究者である坂本清音名誉教授、表象文化学部 英語英文学科の今井由美子教授がお迎えし、和やかな面談のひとときを過ごされました。

面談の中で、坂本清音名誉教授からスタークウェザー氏がイリノイ州エルジンで催されたアメリカン・ボードの集会で神の召命を受け、ウーマンズ・ボードが支援する女性宣教師として来日されたこと、当初は新島八重から日本語の個人レッスンを受けられたことなどが紹介されました。

史料センター展示室をご見学

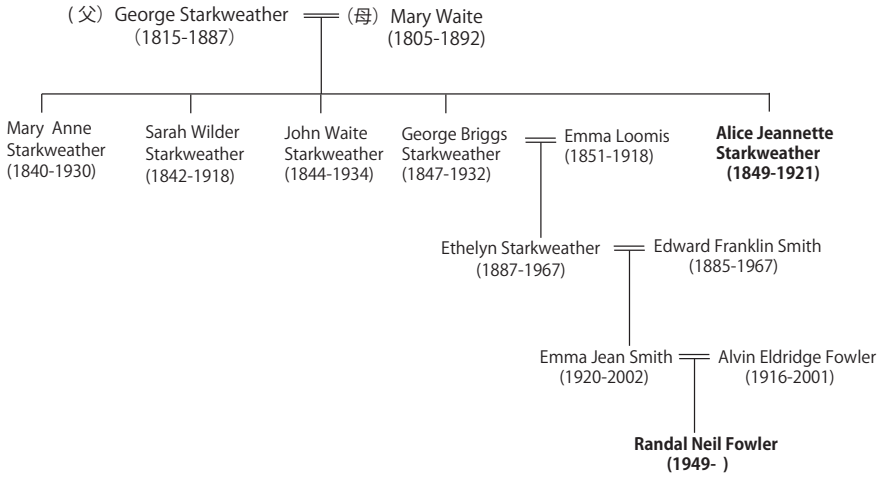
さらに、エルジン時代の宣教師申請書や入洛後の人力車に乗った写真などの貴重な資料が具体的に示されると、懇談は大いに盛り上がりました。本学が保管していた家系図は途中で途切れてしまっていましたが、ランダル氏によって加筆され詳細が明らかになりました。

長年、スタークウェザー氏の没年は明らかになっていませんでしたが、2020年に没年が1921年と判明しました。2021年には、スタークウェザー没後100年を記念し、学校法人同志社・同志社女子大学・同志社女子中学・高等学校・同志社同窓会によって、サンディエゴの市営墓地 Mount Hope Cemetery に墓碑を建立しました。墓碑建立の経緯を初めて知られたランダル氏はたいへん感動され、ぜひとも現地を訪れたいとの意向を示されました。

Mount Hope Cemetery に墓碑を建立（写真提供：同志社同窓会）

今回の訪問を通じて、ランダル氏ご夫妻は、A・J・スタークウェザー氏が日本に遺した教育的・文化的影響の深さに強い感銘を受け、帰国後もその研究を継続する意志を示されまし

た。２０２６年に創立１５０周年を迎える本学が、同志社女子大学の創立に大きく貢献したスタークウェザー氏のご子孫と交流を持てたことはたいへん有意義なことでした。今回の訪問により、スタークウェザー家と本学の深い繋がりを再認識し、ともにその喜びを分かち合う機会となりました。



家系図（アリス・Ｊ・スタークウェザーの両親～甥孫ランダル・ファウラー氏）

同志社クローズ・アップ

生徒がありのままの表現を追求する鑑賞と表現の試み
―合同会社 amiami との企業コラボ授業―

中学校・高等学校

美術科教諭　橋本（はしもと）　侑佳（ゆか）

うまい絵とは？

大人の評価する「うまい絵」はリアルさや写実性が重視されることが多いですが、観察力や表現力が発展途上の中学生にとって美術の時間はどのように感じられるのでしょうか。また、そんな生徒とどのように授業を作るべきか、考えさせられます。

「学研教育総合研究所」の調査によると、小学生では図画工作が好きな教科3位、嫌いな教科4位、中学生では美術が好きな教科8位、嫌いな教科7位という結果が出ています。小学生から中学生へ、興味関心も広がり、各教科への意識の変化の中で、一概に図画工作・美術が生徒にとってネガティブな教科になったと捉えたくはありません。生徒を見ていると、自由に描けた幼少期と異なり、理想と現実のギャップやスキル不足が自信喪失や苦手意識につながることがあるのかも知れません。成長過程での自己意識の発達や、他者の目を気にするようになることも影響していると考えられます。1年生の美術では、多様な表現を受容・尊重し、自己表現を追求する素地を育むことが重要だと考えています。その為、美術を通じて表現の楽しさや自分らしさを見出せる授業を目指し、試行錯誤をしています。

そんな折、障がい者アートを専門に扱う合同会社 amiami（代表 キュレーター 高野さん）との出会いをきっかけに、生徒たちが「うまい絵」にとらわれず、自身の表現を探る授業を作りたいと考えました。amiami の作品は一般的な「うまい絵」とは異なるものもありますが、アーティストの想いと多様な表現が詰まっています。

1年生の2学期には、鑑賞と表現を組み合わせ、amiami とコラボレーションし、社会とつながりながら多様な価値観を尊重する学びを目指す授業を実施することになりました。

どんな絵を描くかは先生ではなく生徒が決める

授業の流れは次のように進めました。

1、amiami のアーティスト作品の鑑賞により、多様な表現に触れる
2、生徒自身がテーマを選択し、自分自身が主題を見つけて表現を行う
3、発表によって相互鑑賞を行う

活動の中で、生徒は作品や自分自身と向き合い、表現を模索し、振り返りを言語化する中で、自身の価値観の変化に気づくことができると考えます。

作品鑑賞では、amiami の扱うアート作品6作品の鑑賞を行いました。鑑賞授業で取り上げられることの多い過去の名画と評価されている作品ではなく、今この世界を生きるアーティストの作品を鑑賞することで、社会とのつながりを感じ、フラットな視点で多様な表現に触れることを追求しました。生徒は、自分なりの感じ方で気になる作品（amiami のアーティスト作品）と向き合い、自身の表現につなげます。鑑賞活動を通して、生徒は次のように言語化しています。「周りの固定概念にとらわれず描くのって素敵だなと思った。自分で描こうとしてもどうしても『ちゃんと描かないと…』という考えが頭をよぎるからそう思った。」「自分が表現したいことを思うがままに描いてると思った。」「一つ一つの作品が違っていて、クラスの人が好きな作品もバラバラで人それぞれの価値観が分かれていた。自分自身が好きなように作品を作っている感じがして個性があると考えた。」従来の「うまい」ではなく、様々な表現を受容する入り口に立ったと思います。

作品鑑賞風景

続いて、それぞれの作品に設定されたテーマをもとに、生徒は自らの主題を見出し、描く対象を決め、画材を選択して表現を模索します。試行錯誤を重ねながら、時には生徒同士でアドバイスをし合いながら進めていきます。

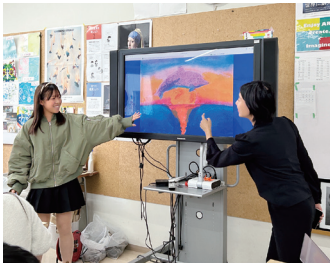
最後に、自身の表現を改めて振り返り、ひとり1分の発表を全員が行い相互鑑賞をしました。この発表は amiami の高野さんにもオンラインと実際の授業で生徒作品にコメントしていただく機会を得て、それぞれの作品が価値あるものとして扱われることで、新たな気づきや自信へとつながったように感じます。

オンラインでの発表風景

新しい考え方を知れた

「みんなのを見て、こんな考え方があるのか、（中略）発見があって、すごく見ていて楽しかった。人によって考え方、感じ方は全然ちがうし、新しい考え方を知れた。こんな言い方をしたらとても失礼かも知れないけど、最初私はCの絵（amiamiアーティスト作品のこと）を見て、ちょっと変な絵だな、と思ったけど、Mさんの絵（クラスメイトの作品）を見て、話を聞いたら、Cの絵をかいた人にどんな風にどこにこだわったのかとかがすごく知りたくなりました。」

「自分は自分の絵が嫌いで小学校ではかわいくかこうと必死だったけど、今回は固定概念にとらわれず人の目を気にせずかけて楽しかったです。」「クラス全員の作品を見てみて、みんなリアルにかいたり抽象的にかいたり色合いも形も場面も場所もそもそも描く対象もぜんぶがぜんぶそれぞれちがうけど、下手で変な作品なんて1つもなくて全ての作品がすばらしくて、絵を見るだけでその人の性格がわかると言っても良いくらいそれぞれの個性がのばされていて、この絵たちはとても大切なものなのかなと思った。絵を描いて、発表して、人の作品を見て、とても楽しかった。」生徒の振り返りには、固定概念から解放され、自由な表現への喜びや達成感が記されていました。


生徒の発表には高野さんがコメント

また、「自分の作ったものの評価基準が『どれだけ人から認めてもらえるか』だったのに対して、今回の授業で『自分が好きなものを描けたか』『絵に没頭することができたか』になった。（後略）」「今までは『どんな絵を書くか』は自分ではなく先生が決めていました。でも今回は自分で書きたい絵をえらびました。自分で想像したものを書くのはとても楽しかったです。発表をしたり聞いたりしている中で気づいたのはみんなちがう感性を持っているんだなという事です。その感性をこれからもみがいていきたいです。」「ぼくは、この活動を通して、自分にも評価される作品が作れるのかと思いました。ぼくは絵が苦手で、上手下手関係ないと分かっていても、絵を描くことには少し抵抗がありました。でも、今回の作品を高野さんが評価してくれました。それが、少し自信になりました。」生徒たちは、相互鑑賞を通して、他者の視点から自身の思考の変化に気づき、学びにつなげることができました。更に、個性が尊重されることの重要性や多様性の理解にもつながりました。

この授業を通して、学びの主体は生徒たちであること、そして、大人も「うまい絵」を求めるのではなく、彼らの豊かな創造性を大切にすることの重要性に改めて気づかされました。引き続き、この授業で育ち始めている生徒それぞれの感性を大切に今後の授業作りをしていきたいです。

同志社クローズ・アップ

生島吉造・稲子・吉秋記念 同志社香里電子図書館の開設を記念して

香里中学校・高等学校

司書教諭　柳井　孝太

リアルな図書館の限界

「電子図書館」という存在を初めて強烈に意識したのは、新型コロナウイルス感染症が蔓延した2020年のことであった。突然の臨時休校、相次ぐ学級・学年閉鎖で生徒が学校に来られなくなり、慌ただしくオンライン授業が始まった。そうした中、図書館にできたのは、お便りの発行や郵送貸出の実施など非常に限られたことでしかなかった。私立中高図書館の中には、電子図書館を活用しサービスを継続するところも多く見られた。歴然とした差を見せつけられ、悔しい思いをしたことを昨日のことのように思い出す。何より生徒に申し訳ないという気持ちでいっぱいであった。「利用者が図書館に来る」という前提に基づいた図書館運営には、大きな限界があると改めて気づかされた。

このような「リアルな図書館の限界」を感じるのは、何も非常時ばかりではない。例えば、「開館時間内に図書館に行けない。」という声が生徒から寄せられることも多い。香里中高図書館は、1限目開始の8時50分に開館し、下校時間の15分前である17時45分に閉館するというのが基本的なスケジュールである。昼休み・放課後は生徒でにぎわい、授業での利用も年々増加している。

しかし、中高生は多忙である。特に本校は部活動が盛んであり、放課後は多くの生徒が様々な部活に勤しんでいる。そのため、なかなかゆっくりと図書館を利用するタイミングがない。「もっと朝早くから、あるいは遅くまで開館してほしい。」「日曜日に学校の図書館に来たい。」そういった声を聞くことも多い。要望に応えたいのは山々であるが、現在の人員では難しいのが実情である。更に、長期療養や不登校の生徒など、学校に来られない生徒のことも考えなくてはならないだろう。

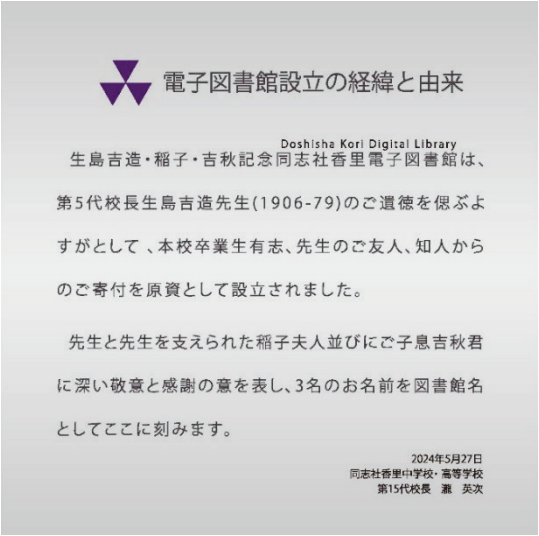
電子図書館の開設と生島吉造先生

そうした中、図書館に対して寄付をしたいというお声が寄せられた。まさに福音というべき知らせであった。当初

寄付者の方は、寄付金を紙の本の購入に充ててほしいと希望されていた。

しかし、本校図書館は有難いことに潤沢な図書購入費が確保されている。また、図書館の収容冊数も限界に近づきつつあった。そこで先に述べた事情をご説明し、寄付金を活用して電子図書館を開設することを提案させていただいたところ、ご快諾いただいたのである。

開設が決まった電子図書館であるが、この拙文のタイトルにも書いたように、「生島吉造・稲子・吉秋記念 同志社香里電子図書館」と命名された。この図書館名について、少し紹介をしたい。まず、生島吉造先生は、本校の第5代校長である。1906年5月にお生まれになり、同志社大学法学部に進学、その後アーモスト大学2年次に編入し卒業された。香里中高には1955年4月から勤務され、1968年4月から1971年3月まで校長を務められた。稲子は奥様のお名前であり、吉秋は息子さんのお名前である。寄付者の方は、お世話になった生島吉造先生とそのご家族のお名前を記念に残したいと願われていた。そこで、電子図書館の名前に生島先生の名前を冠することとなったのである。



電子図書館を記念して、図書館入口に設置されたプレート

第5代校長　生島吉造　先生

『香里の丘』第38号（同志社香里中・高等学校PTA、1971年3月15日）p.4より引用

紙と電子の両輪を目指して

本校では、コロナ禍を経て教育の情報化が急速に進展し、2023年度からは、全生徒がデバイスを所有する状態となっていた。既に電子図書館を導入する土壌は整っており、準備は順調に進んだ。2024年5月27日、電子図書館は無事オープンの日を迎えることができた。これにより、生徒及び教職員は時間や場所の制約を受けず、自由に本を読む環境を手にしたのである。電子書籍の数も着実に増加し、2024年11月24日現在では、1224冊の本が読める状態となっている。また電子書籍には、電子ならではの様々な機能が備えられている。例えば、文字の拡大・音声読み上げ・背景と文字の色の反転などが挙げられる。電子書籍によって、バリアフリーな読書環境が実現されたのである。

肝心の生徒の利用状況はというと、まだまだこれからといった状態である。図書館によく顔を出す生徒からは、「紙の本の方が好き。」という声を聞くことも多い。そして、従来図書館に来ていない層には、まだ電子図書館の存在が浸透していないように感じられる。

今後は、授業等との連携を積極的に行いながら、生徒への周知を図っていきたいと考えている。2024年度は、北海道に修学旅行に行く中学2年生に対して、北海道関連の電子書籍を用意した。北海道に密着した小規模出版社の本を簡単かつ迅速に用意できたのは、電子図書館だからこそ為せる業であった。

「紙」と「電子」は優劣を比較され、相反するものとして扱われることも多い。だが、それは誤りである。両輪としてハイブリッドに運用してこそ、相乗効果を生み出すことができるのである。左記のQRコードから、香里中高の電子図書館にアクセスすることができる。今後の進化にご注目いただければ幸いである。

生島吉造・稲子・吉秋記念 同志社香里電子図書館
https://web.d-library.jp/kori/g0101/top/

同志社クローズ・アップ

ワンダーフォーゲルクラブとともに歩む

女子中学校・高等学校

元社会科教諭・クラブ顧問　藤田（ふじた）　一登（かずと）

ワンダーフォーゲルクラブって何？

我がクラブの夏合宿の計画書や、登山大会の計画書には、何十年来、ワンダーフォーゲルの目的というページがあります。Wandervogelとは、20世紀初めに学生であったカール・フィッシャーなどが始めた青年による野外活動です。日本でも、この影響を受け、大学や高校に主に登山を行うワンダーフォーゲル部が設立され、今に至るまで、その名が受けつがれています。ワンダーフォーゲルとは、ドイツ語で「渡り鳥」という意味で、この名のとおり、我がクラブでも、自由に自然の中に身を置き、自然に親しみつつ、身体を鍛え、忍耐力を養い、正しい判断力、適切な策を生み出せる力をつけ、綿密な計画と実行力を身につけ、団体行動を実践し、そのもとで健全なリクリエーションを遂行するということを、クラブの目的として計画書に記しています。ちなみに、計画書にはあわせて、次の聖句も記入されています。「愛は忍耐強い。愛は自慢せず、高ぶらない。」

自然の中で学ぶ

私が顧問になったのは、２００５年の事で、以前の顧問であった森一郎先生が当時、校長になられ、顧問を退かざるを得なくなった際に、希望を出し、顧問にさせていただきました。ありがたいことに退職に至るまで、ずっとこのクラブの顧問を担当させていただき、生徒とともに関西一円を中心として、多くの山に登りました。年に一度は、白馬岳、甲斐駒ヶ岳・仙丈ケ岳、立山、白山などテント泊の合宿も行ってきました。

そのことは、私にとっては、幸せな教員人生でした。体育会系のクラブ顧問は、基本は生徒の活動を見守ることが多いと思います。しかし、私がこのクラブの顧問として魅

力に感じていたのは、生徒と共に同じ活動を教員もさせてもらえるということでした。山登り体験を生徒と共に共有していくことで、私にとっても多くの学びの日々でした。とりわけ、本校は中高を通して学ぶ生徒が多く、中学生から高校生に至るまで、6年間、山登りを続ける生徒もおり、初めは弱かった生徒も、どんどん山を歩けるようになって、その成長にいつも驚かされていました。高校生は、時には、高校の登山競技に出場し、京都府代表として、インターハイに出場させていただくこともありました。やはり中学校から続けている強みがあったと思います。このような多くの経験から、顧問も生徒とともに多くの気づきがありました。

山で試験?

京都は、北山を山域として学生時代から登山活動してきた今西錦司先生や梅棹忠夫先生などの大学者を輩出してきた府です。登山のクラブがある学校は、比較的珍しいということですが、府立の学校や同志社中学校にも同志社高校にもいくつかの山登りのクラブがあります。京都府高体連登山専門部の専門委員をさせていただいてきた私は、総体予選や秋の高等学校登山大会、近畿大会の運営にも少し関わらせていただきました。

本校も常にではありませんが、高校生は登山大会に出場してきました。このような大会でどのような競技が行われるかを多くの人はご存じないと思います。山に入る前にまず計画書を作成します。この計画書について審査があります。日程はもちろん、山域の概念図、高低図、装備分担、食料計画、救急、荒天対策など、入念に山の準備をこの段階で行います。また、現地で山を踏破すること。ただし、4人1チームでパーティーを組み、協力して山を歩きます。早いことが必ずしも良いわけではありませんが、体力は山の安全に欠かすことができないものです。途中、読図審査があります。置いてあるフラッグの位置を地図に書き込みます。山行を終え

ワンダーフォーゲル　全国大会出場の記録	
1957年（昭32）	奈良県 大台ケ原
1959年（昭34）	愛媛県 石鎚山
1983年（昭58）	岐阜県 槍ヶ岳・双六山
1992年（平4）	宮崎県 大崩山・傾山
1993年（平5）	栃木県 白根山・男体山
1995年（平7）	島根県 大山
2000年（平13）	岐阜県 槍ヶ岳・双六山
2002年（平14）	茨城県 男体山・三鈷室山
2013年（平25）	大分県 大船山・久住山・中岳
2014年（平26）	神奈川県 金時山・三国山・神山
2016年（平28）	岡山県 蒜山・毛無山
2017年（平29）	山形県 蔵王山・月山

ると、記録帳の提出があります。様々な記載は、もし遭難したときの安全にもつながります。さらに、装備審査もあります。必要な装備がザックからすぐに取り出せるかを見ます。幕営審査は、10分以内に、テントの適切な設営が行えるかを見ます。そして、炊事審査では、何を作るかだけではなく、衛生面にも配慮が必要です。テント場では、マナーも審査されます。山では、騒いでいて、もし誰かが眠れないというようなことになると、次の日の遭難にもつながります。そして、さらに、生徒は、知識（地形、動植物、救急法、登山技術、山域の地理歴史など）、および天気図作成のテストが待っています。山で試験があるのです。こんなクラブはなかなか他ではないですね。つまり、体育会系と文化系の要素を合わせ持ったクラブであるところに、このクラブの面白さがあるのです。

登山では、いつも晴れというわけにはいきません。時には、風雨の厳しい中での山行もありますし、途中でひき返したり、事前に登らない選択をすることもあります。また、登ったら、下山して無事に家に帰るまでが登山です。山に行くまでの準備、帰ってからの片付けもあります。まさに、人生そのものです。要するに、このクラブは生きていく力、生活力を磨くクラブです。競い合うことが目的ではなく、安全に山を歩く力を身につけることが目的ですが、それは同時に、人生を生きていく力も学べるということでしょう。

絶滅危惧種？

テント泊の大会出場や合宿では、女子であっても重い荷物を背負って移動します。何日もお風呂に入れないこともあります。山では、すれ違うと挨拶をする文化がありますが、生徒は、ご高齢の登山者の方々から、絶滅危惧種を見るような、あるいはかわいい孫を見るような感覚で、「えらいわねえ、頑張ってね」とお声をかけていただきます。生徒たちも、しんどさを感じつつも、自然の中に身を置き、美しい自然にふれ、何か喜びを感じてくれているのだと思います。そのような場に身を置いている生徒は、もうそれだけでリスペクトでした。ぜひ、卒業して年齢を重ねても、また、山に身を置いてほしいと思っています。そして、その時は、若い登山者たちにぜひお声をかけてほしいと思っています。

同志社クローズ・アップ

個性を伸ばし興味を追求できる一貫教育
～きらり輝く生徒へのインタビュー～

国際中学校・高等学校

教頭　二股（ふたまた）　一郎（いちろう）

はじめに

同志社国際中学校・高等学校では、生徒一人ひとりの個性を伸ばし、興味を追求できる中高大の一貫教育に取り組んでいます。英語を中心とした語学教育はもちろん、例えば高等学校では心理学や哲学、地球環境学など高度な選択科目を豊富に用意し、生徒自らの学びの意欲にしっかりと応えています。

今回は、そんな個性が輝く生徒の中から、ものづくりの世界に魅せられ、独学で火星探査機や支援ロボットの試作開発に取り組んでいる上田理仁さん（中学2年生（取材当時））を紹介します。

上田さんへのインタビュー

―プログラミングに興味を持ったきっかけは何ですか？

小さい頃から、ブロックのおもちゃを組み立てたり、自分で簡単なプログラムを作ってモーターを回したり、一人でいろんなものを作るのが好きだったんです。同志社国際学院初等部の5年生のとき、高度なプログラミング技術を使ったロボット展示会を見に行く機会があったのですが、ロボットがルービックキューブの面をカメラで画像認識しながら最短手数で色を揃えるのを見て、こんなことができるのか！自分ももっと高度なプログラミングを学んでみたいと興味が大きく広がっていきました。

―いろんなことに関心を広げて、ものづくりの好奇心を育んできたのですね。火星探査機の模擬開発に取り組んだ経緯を教えてください。

NASAが行っているアルテミス計画をニュースで知ったのがきっかけでそのスケールの大きさに衝撃を受けました。自分がものづくりをするのなら、まだ人が降り立った

ことがない惑星をターゲットにしたいと思い、第二の月と言われる火星が身近な存在で面白いんじゃないかと考えたんです。早速、ホームセンターで材料や工具を買ってきて、オリジナルの火星探査機の試作にチャレンジしました。

―試作で工夫したこと、苦労したことなどはありますか？

探査機がカメラで周囲の状況を認識しながら目的地まで走行し、ロボットアームでサンプルを採取できるように、独学で学んだ最新のプログラミングを使ってオリジナルコードを作成しました。火星では普通の自動車のような4輪構造では前に進めないので、6輪（前2輪、後4輪）にして地面とのグリップ力を高めたり、モーターのトルク量やサスペンションの硬さを調整して車体が傾かないように工夫したり…、火星の低い重力や凸凹した地形の中でどのように安定して走行できるのか、自分の部屋に本などいろんな障害物を設置し、何度も昇り降りさせて検証しました。

―ハード作りもソフト作りも独学で習得したのですね。実際に火星探査機を作ってみて何か感じたこと、印象に残っていることはありますか？

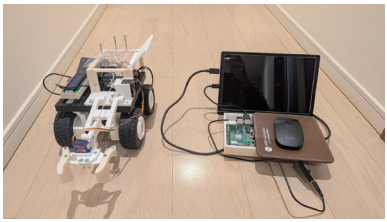
自分が作ったロボットをもっと発展させたいと考え、DIAの青田先生に頼んでJAXA（宇宙航空研究開発機構）に連絡してもらったところ、実際にロケットの設計・開発に携わっている技術者とオンラインでディスカッションすることができました。試作機の改善点・改良点について貴重なフィードバックをもらったほか、「失敗を恐れるな！」と背中を押してもらい、将来、宇宙開発の最先端の現場で働きたいという夢がますます膨らんでいきました。

また、同志社国際中学校に入学してから、「同志社ローム記念館プロジェクト」の一つで、小型人工衛星を開発して打ち上げを目指す取組にオブザーバーとして参加したり、生命医科学部で月面探査ロボットの研究開発をされている渡辺公貴教授の指導を受ける機会をもらったり、火星探査機の試作・開発にチャレンジしたことで普段では経験できないような世界に飛び込むことができました。

―現在、興味を持って取り組んでいることは何ですか？

中学2年生のとき、足を痛めて歩くのに苦労したことがあったのですが、自分の代わりに弟や妹を迎えに行ったり、

洗濯物を取り込んでくれるようなツールがあればいいなと思ったんです。これまで培った技術や知識を活かして、もっと身近で社会に役立つような支援ロボットの開発を目指したいと考えています。現在試作中のモデルは、ロボットに搭載したカメラの映像をモニターで確認しながら、ユーザー自身がマウスを使ってリモコン操作で動かすタイプで、ペットボトルやミカンなど軽いものならロボットアームで持ち運ぶことが可能です。将来的には、AIやXRなど最新の技術を組み合わせることで、ロボットがいろんな場所に自律的に移動し、様々な事情で外出が難しい人たちのアバターとして社会にバーチャル参加できるようになればいいなと思っています。

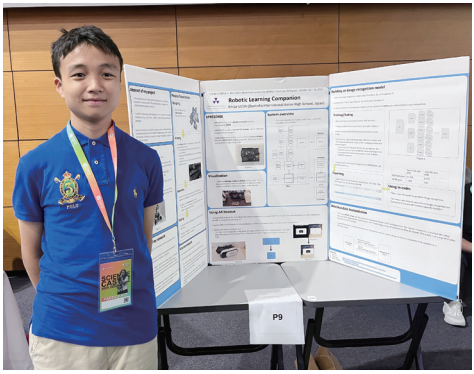


—同志社国際中学校で学んで良かったと思う点を教えてください。

中学2年生の秋、中高生が集まって自分たちの研究を発表し議論し合う「サイエンスキャッスル」というアジアの学会に参加したのですが、ポスターセッションの方法など、事前に教頭の二股先生やいろんな先生からレクチャーしてもらい、自信を持って発表に臨むことができました。生徒一人ひとりのやりたいことを全力で後押ししてくれるのが同志社国際中学校の良いところだと思います。大学との距離感が近く、3Dプリンターなどの設備を使わせてもらったり、ロボット開発に取り組む研究者のアドバイスを受けたり、ものづくりをするには恵まれた環境ですね。

—最後に、これからの抱負を聞かせてください。

ロボット工学だけでなく、人工知能など最先端の分野を学んで、自分の技術力をもっと高めたいと思っています。世の中にはいろんな課題がたくさん埋もれているので、今取り組んでいる支援ロボットのように、多くの人を幸せにするようなものづくりを続けていければいいなと思います。



responsibility for the choices that the United States of America made or those of Japan. His main reason for speaking about his grandfather's experience is to make sure that no human being ever again suffers such a fate as the people in Hiroshima and Nagasaki,

The second person I met was a guest speaker at DIA named Ms. Kosuzu Harada. She is the granddaughter of Mr. Tsutomu Yamaguchi who fell victim to the atomic bomb in Hiroshima AND the one that wreaked havoc on Nagasaki. She has taken on the responsibility of sharing the story of her late grandfather as a *Hibakusha*. The number of living victims who are able to share their stories is dwindling year by year as age takes its toll on those whose futures were reshaped by the choices made in that summer some 80 years ago.

What shocked me the most was to find out that a relationship, even a friendship between these two grandchildren could even be possible. I met each of them separately and found it amazing that even though they were on opposite sides of the horrific occurrence dealt to Hiroshima and Nagasaki that they shared a common goal: to work for peace and make sure that no one ever had to become the victim of atomic weapons and deal with the lingering effects they cause.

They have dedicated their time and energy to becoming peacemakers, just like God hopes for all of us as we learn from the bible in Matthew chapter 5, verse 9 which tells us, "Happy are those who work for peace; God will call them his children!"

What we can learn from these two wonderful people and their friendship is the power of forgiveness, hope and peace for the future!

同志社クローズ・アップ

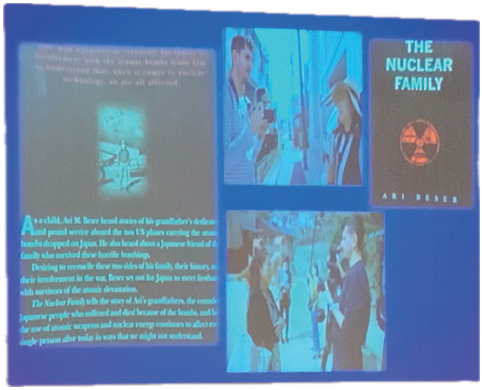
An Unlikely Friendship

Doshisha International Academy Elementary School, Director of Academic Affairs

国際学院　学務幹事　Scott Hemphill（スコット ヘンプヒル）

As teachers, we teach children to forgive others when they do horrible things to them and that they should always give them another chance. We learn from the bible as it tells us in Luke chapter 6, verse 31, to “Do for others just what you want them to do for you.” This lesson is important for young children as they explore their personalities and learn to become members of a group in preparation for developing into responsible decision-making members of society. For adults, this lesson of forgiving is not always an easy one and many find it is often quite challenging. Forgetting about these bad experiences from the past can be even more difficult.

I had the great privilege of meeting two amazing people this year. First, I met a young American man named Mr. Ari Beser. He is the grandson of Lieutenant Jacob Beser from whom he heard numerous tales of what took place during World War II. Lt. Beser was in the air force and on BOTH the plane that dropped the first atomic bomb on Hiroshima AND also the plane carrying the atomic bomb that devastated Nagasaki in August of 1945. In the beginning, I found it strange that he only talked about the facts of what happened and not the



同志社クローズ・アップ

収穫感謝を通じて
―同志社小学校の取り組み―

小学校

教頭　田中（たなか）　雅裕（まさひろ）

かきやりんご、さつまいも、じゃがいも、玉ねぎ、お米など、色鮮やかな秋の味覚を、心を込めてささげる子どもたち。今年も、全校生で収穫感謝礼拝をもつことができました。その表情は、分かち合う喜びに溢れているようでした。

１６２０年、イングランドからメイフラワー号に乗ってアメリカに渡った人々（ピルグリム・ファーマーズ）が、ネイティブアメリカンの人々に作物の作り方を学び、共に収穫を祝ったことが収穫感謝の始まりです。その地、ニューイングランドは、校祖新島襄が「自由」と「良心」を学んだ同志社の原点ともいえる場所で、同志社とのつながりを感じずにはいられません。

たくさんの命とその命に携わっておられる方々への感謝、またその恵みをみんなで分け合うことができることへの感謝。さまざまなことに「感謝」することのできる子どもたちであってほしいと願っています。

収穫感謝礼拝で児童、保護者にお持ちいただきましたたくさんのささげ物は、滋賀県の障がい者支援施設「止揚学園」にお届けしています。分かち合う仲間と顔の見える交流をと、今年度

は、7年ぶりに止揚学園を訪問し、8名の5・6年生が交流しました。

穏やかな秋空のもと、学園のまわりを手つないだり車いすを押したりして散歩していると、道端に咲いている花の名前を教えてくださいました。地域の方もやさしく声をかけてくださいます。館内の色とりどりの手描きの絵、心のこもった手作りの昼食、そして、ともに歌った讃美歌や聴かせていただいた歌声は温かく私たちを包み込むようでした。同志社出身である園長の福井生さんからは、止揚学園で生活する「仲間」の姿を通して、みんなが笑顔に、幸せになる社会を築いていくことの大切さを、学園の歩みとともにお話しいただきました。

交流に参加した8名の児童は、収穫感謝礼拝に向けて、朝の礼拝や全校集会で、この時の出会いや経験を全校生に伝えました。ただ、ささげものをささげ届けるのではなく、思いを交わす、「分かち合う」ことの本当の意味を、たくさんの出会いを通して感じた一日となりました。

同志社クローズ・アップ

クリスマス礼拝・祝会

幼稚園

元教諭　竹中（たけなか）　琴恵（ことえ）

幼稚園でも、十二月にはクリスマス礼拝と祝会を行います。今年度は久々に幼稚園のリチャーズホールで、十二月十一日（水）～十三日（金）の三日間に分けて行いました。年長組によるページェントの中で年中組が聖歌隊として歌い、祝会では年少組の歌と楽器演奏ののち、全学年で歌を歌ってお祝いしました。年少組にとっては初めてのクリスマス礼拝であり、絵本や紙芝居を見たり、アドベントでクランツにろうそくを灯していったりする中で、少しずつ「イエス様のお誕生日」ということを実感していきました。そして、年長組・年中組の練習を見聞きする中で、幼稚園のみんなでクリスマスをお祝いするということに期待をもち、楽しみに当日を迎えました。いつものホールとは違い厳粛な雰囲気の中で緊張しながらも、年少組として礼拝や祝会に参加しお祝いすることに喜びを覚えたことと思います。

年中組は昨年の経験がありながらも、聖歌隊として沢山の讃美歌を歌って劇に参加するという大きな役目を担わなければなりません。讃美歌のなかには普段聞きなじみのない言葉があり、初めは歌の意味が分からず歌うことに苦労していましたが、年長組の練習に参加し劇を見るうちに徐々に話の内容が理解でき、歌に気持ちがこもるようになりました。各々好きな歌を歌う時にはつい力が入り大声になりすぎることもありましたが、劇の場面に合わせて子どもなりに歌い方を変えて、時には勇ましく、時には優しく歌う姿には昨年からの成長が感じられました。

そして、年長組にとっては入園以来待ちに待ったページェントの舞台です。自分の役が決まると張り切って言葉を覚え、早く劇をしたいと期待に溢れた様子でしたが、いざ取り組み始めると言葉だけでなく、自分の役の歌を歌ったり、場面に合わせて動いたり、大人の合図無しで自分たちだけで劇を進めていく難しさを感じていました。不安な表

情を浮かべ恐る恐る行っていた子どもたちですが、年中組の歌と合わせながらの練習を重ねるうち劇の流れや全体像を掴んでいきました。また、年中児に劇を見てもらう中で緊張感をもって臨むようになり、次第に主体的に動いて自信をもって劇を進めていくことが出来るようになりました。本番が近づき衣装を身につけるとさらに意欲が高まり、年中組と合同で練習をしていく中で一体感をもちながら劇に集中していきました。

クリスマス礼拝・祝会当日は、たくさんのお客さんを前に見てもらうことが嬉しく、子どもたちは笑顔を見せながらも堂々と頑張っていました。最後の祝会では全学年での「メリークリスマス」の呼びかけにお客さんからも答えてもらい、喜びいっぱいで終えることが出来ました。

当日に精いっぱい力を出し切ったことはもちろん、それまでの日々で、友だちと共に同じ目標に向かって取り組みやりきった経験は、これからの園生活や就学後の生活における主体性や協同性の基礎となったことと思います。

年少組　鈴の合奏

年中組　聖歌隊

年長組　ページェント

特別寄稿

同志社創立150周年記念事業
新島襄のラットランド・アピール150周年記念ツアー

大学キリスト教文化センター准教授　森田　喜基

今、私の手元に故北垣宗治先生が書かれた記事「ラットランドの式典」『同志社時報』№96（1976年9月30日発行）がある。北垣先生はその冒頭こう記しておられる。

「新島襄の生涯にはいくつかの劇的な出来事があった。国禁を犯して函館を脱出したこと（1864年）がその一つであるし、有名な『自責の杖』の事件（1880年）もそれに数えなくてはなるまい。前者は鎖国中の日本の精神的奴隷状態からの脱出であったし、後者は新島襄の教育愛を示す意味で、それぞれきわめて象徴的な事件であったといえる。しかし、これらにまさるとも劣らないほど重要な劇的事件は、1874年10月9日に、十年近くの留学を終えて、祖国日本への帰還を目前にひかえていた新島が、ヴァーモント州ラットランドで開かれたアメリカン・ボード第65回年次大会に出席し、告別の演説に代えて、日本にキリスト教の学校設立の必要を熱烈に訴え、その場で約五千ドルの約束を得たという出来事である。同志社の誕生がここに具体的に約束されたといえるからである。」

今から150年前の「ラットランド・アピール」を記念して、今から50年前の100周年記念に同志社の代表団がグレイス教会（現在の正式名称は Grace Congregational Church, United Church of Christ であるのでアメリカ合同教会グレイス会衆派教会が正しい日本語訳となるが、便宜上、以下グレイス教会と記す）を訪ねた報告記事である。それから50年後の2024年10月10日(木)～15日(火)「新島襄のラットランド・アピール150周年記念ツアー」が開催された。これは学校法人同志社創立150周年記念事業の一環として企画されたものである。

北垣先生の記事にもあるように、新島は宣教師として帰国する直前、その大会において多くの人々を前に、日本にキリスト教主義学校（牧師養成校）を設立するという志を熱く語り、多額の寄付の約束を得た、それが同志社設立の礎となったのであった。そのことを記念した礼拝を、50年

の時を経て、再びグレイス教会と同志社が共同して献げることがこのツアーの目的であった。同志社からは八田英二総長・理事長、小原克博大学長はじめ、教職員、卒業生など合わせて27名が参加した。

一行はまず一日目午前中、ボストンにて新島の「アメリカの父母」であるハーディー夫妻ゆかりのオールド・サウス教会や、アメリカ最古の都市公園であるボストン・コモンのすぐそばに位置する会衆派図書館を巡った。会衆派図書館では、アメリカン・ボード第65回年次大会の出席者名簿、議事録を確認した。これは別稿としてまとめることにする。

午後はオプショナルツアーが企画され、その参加者はハーバード大学やボストン美術館を巡った。

二日目は新島の最初に学んだ教育機関であるフィリップス・アカデミー、その敷地内にある旧アンドーヴァー神学校校舎などを訪れた。

150年前に新島がアピールをしたグレイス教会における記念礼拝は、10月13日（日）に開催された。同志社小学校3年生の山本光さん他による英語「同志社大学設立の旨意（抜粋）」の朗読、八田英二総長・理事長、小原克博大学長、そしてグレイス教会のテリー・ヘンリー牧師によるメッセージによって、出席者は新島の志と神への信仰に触れる機会を得た。ヘンリー牧師はヨハネの福音書14章14節で「私の名によって私に何かを願うならば私がかなえてあげよう」というイエス・キリストの言葉から、新島が利己的な思いではなく、日本のためにキリスト教の福音が必要であるという、まさに「主の名に相応しい」願い・祈りをもってラットランド・アピールをしたことを熱く語られた。礼拝の中ではグレイス教会聖歌隊の歌声、パイプオルガン、ハンドベル、バグ・パイプ、そして現地ボストンからツアーに同行したバークリー音楽大学生の山根基嗣さん（同志社国際学院初等部、国際中学校・高等学校卒）によるバイオリンと、多様な楽器・息吹による素晴らしい賛美がなされた。

尚、礼拝の中で小原克博大学長から「グレイス教会での演説想像図」の陶板の贈呈がなされた。100周年の際には同志社側から「ラットランド・アピール」を説明したタブレット（石板）が送られたが、今回は「ラットランド・アピール」と言えば思い浮かぶ、伊谷賢蔵による「想像図」を、大塚美術館も手掛けた大塚オーミ陶業に依頼し、制作したものを贈呈した。

礼拝後にはグレイス教会の方々が盛大なレセプションを催してくださった。記念礼拝及びレセプションにはアメリカン・ボード、アンドーヴァー神学校の、それぞれの後継

団体であるアメリカ合同教会海外宣教局、イェール大学アンドーヴァー・ニュートン神学校からの代表者、また同志社英学校設立時に新島と共に最初の教師となったデービス宣教師のひ孫エレノア・ラニーさんが来賓として出席された。記念礼拝、そしてグレイス教会や来賓の方々との交流は、参加者一人ひとりの心に今も残っている。

レセプション後、バスに揺られること約2時間半、一行はアーモスト大学に到着、新島襄の肖像画が飾られているジョンソン・チャペルを訪ね、その後アーモスト大学関係者との夕食会が催された。

このツアーの参加者からは「この素晴らしい経験を、自分の言葉で語り続け、分かち合いたい。ブドウの枝のように多くの人々に共有したい」、「同志社創立100周年にも同志社から代表団がグレイス教会を訪れたが、次は創立200年に向けて、このことを同志社として記憶してほしい」とのコメント等が寄せられている。新島の「軌跡」を辿り、この節目に同志社設立の原点である出来事を記念し、改めて創立者がどのような志、信仰を持って同志社設立を目指したのかに思いを馳せ、そこから現在を振り返り、また未来的意味について深く考えさせられる時であった。

尚、記念礼拝の様子は、同志社創立150周年記念HPから動画視聴が可能となっている。ぜひご覧いただきたい。

フィリップス・アカデミーの良心碑

旧ハーディー邸会衆派図書館

グレイス教会

旧アンドーヴァー神学校
（現在はフィリップス・アカデミーの教室）

八田総長・理事長のメッセージ

グレイス教会記念礼拝

ジョンソン・チャペルの新島肖像画

小原同志社大学長（記念品の授与）

アーモスト大学による歓迎レセプション

同志社の一貫教育

hitohito-Li

同志社一貫教育探求センター
所長　大久保（おおくぼ）雅史（まさし）

同志社ゴルフアカデミー

同志社一貫教育探求センターが取り組む、中学生・高校生の課外活動（クラブ活動）

同志社一貫教育探求センター（以下「センター」と省略）では、2023年度より「中学校・高等学校の課外活動（クラブ活動）における教員の負担軽減」の検討を行っています。しかし、教員の負担軽減を推進するためには様々な課題があることがわかり、すべての課題を解決したうえで新たな制度を設けるには、時間的余裕がないことがわかりました。一方、できる部分から始めることにより制度設計に向けての課題の更なる洗い出しや、児童・生徒の意見の聴取などを行うことも重要であると考えてきました。

そこで、センターでは、有識者の意見を参考に、法人内中学生・高校生が一同に会する課外活動の場を設け、そこで得られる知見を足掛かりに新たな課外活動の制度設計を検討していくことにしました。今回、課外活動の例として「ゴルフ」を対象に、ケーススタディとしてスモールスタートし、全体的な制度設計に向けた第一歩にしたいと考え、2024年度に「同志社ゴルフアカデミー」（以下「アカデミー」と省略）を実施いたしました。

2024年7月上旬、法人内各学校の一学期終了のタイミングを見据えて、募集案内を各学校へ配信しました。その結果、募集定員数20名を大幅に超える約60名の生徒からの応募がありました。センターとしては、初めての試みであり、より多くの生徒、保護者からの意見を集めたいとの考えから、20名1クラスでの開催予定を、急遽3クラスに増設し、すべての応募者を受け入れて開催することといたしました。アカデミーは9月8日、10月6日、同27日、11月10日の計4回、各クラス90分間で実施されました。また、各日2名のコーチにレッスンを担当していただき、1名は経験者の生徒、もう1名は未経験者の生徒と分担してレッスンを行っていただきました。

初日の9月8日はまだまだ暑さの残る中、スナッグゴルフ（テニスボールより一回り小さく柔らかいボールをプラスチック製クラブで打つスポーツ・https://snaggolf.jp/）というゴルフの入門スポーツやスティックの先に新体操のリボンのような帯がついているクラブ、上下に立てると音の鳴るステッククラブなどを利用して参加者の遊び心をくすぐりながら、レッスンが進められました。後半は参加者を経験者と未経験者に分け、経験者はゴルフクラブを用いて練習を行い、未経験者は引き続き、スナッグゴルフで練習を行いました。的入れや、飛距離を競ったりするエンタテインメント性も組み入れて練習は行われ、最後の15分間は未経験者もゴルフクラブでゴルフボールを打っていました。初めてのゴルフクラブでの練習でしたが空振りする生徒も少ないだけでなく、前にしっかりとゴルフボールが飛ぶ生徒も多く、保護者もコーチも驚いていました。

第二回目以降、ゴルフ未経験者に対しては、徐々にゴルフクラブでゴルフボールを打つ練習時間が長くとられ、最終回ではドライバー（シャフトが一番長く、一番飛距離が出るクラブ）を手に本番さながらのショットをする生徒もいました。

一方、経験者を担当いただいたコーチはレッスン終了時間ぎりぎりまで熱心に生徒を指導していただき、生徒たちも自分の困っているところや、改善点を質問していました。どの生徒たちも毎回時間いっぱいまで練習に打ち込んでいました。

4回という少ないレッスンでしたが、未経験者の生徒たちも「ゴルフ」というスポーツに親しんで身近に感じてくれたと思います。また、経験のある生徒たちもコーチに指導を受け、ステップアップしてくれたと感じています。

4回のレッスンを終えたあとに実施したアンケートの結果、参加生徒の受講動機は、「ご家族に勧められた」という回答が多くみられました。しかし、レ

ッスンの満足度が高く、ほとんどの生徒が「満足」・「やや満足」と回答していました。また9割を超える生徒が「今後もゴルフを続けたい」「同様の機会があれば参加したい」と回答していました。また、保護者の回答からもアカデミーに対して好意的な回答や意見が多く寄せられました。さらに、親子の会話に関する質問に対して、生徒の約7割、保護者の9割以上が増えたと回答していました。

コーチからは、「生涯スポーツとも言われ、老若男女問わず、自分の技量でプレーできる競技「ゴルフ」は、健康のため、またコミュニケーションの手段としても活用されており、このアカデミーをきっかけに今後も続けてくれることを願っている。」との挨拶がありました。

今後もこのプログラムを継続し、法人内各学校の児童・生徒がゴルフを始めるきっかけとなり、また、学校の垣根を超えた繋がりが生まれることを望んでおります。

センターでは、法人内各学校での課外活動に対して、ゴルフに限らず様々なスポーツ競技や文化的経験をこのようなプロジェクトで実施し、法人内の児童・生徒に様々な経験をしてもらい、視野を広げてもらうきっかけとすることの可能性を示せたと感じています。また、経験のある児童・生徒にもその道の専門家を招聘することで更なる技術向上ができる機会になることもあらためて認識しました。

今後、今回の取り組みで得られた知見や参加者のアンケート結果などを新たな課外活動の制度設計に生かしていく予定です。

新作能　庭上梅（ていしょおのんめ）
ー未来へ繋ぐ新島襄の志ー

同志社の150周年にあたる2025年は、同志社大学能楽部創部100周年でもあります。これを記念して、新作能「庭上梅」を同志社創立150周年記念事業の一環として同志社栄光館において上演することになりました。

「庭上梅」は創立者新島襄の建学の精神と、同志社精神の永遠の伝承、発展に向け決意しあう学生の雄志を能楽によって賛歌するものです。初演は2005年11月26日、同志社創立130周年、能楽部創部80周年を記念して寒梅館ハーディーホールで行われ、それ以降、同志社の記念事業のたびに上演されてきました。

今回は2016年1月の同志社創立140周年記念事業以来となりますが、能制作者「同志社紫謡会」及び演能者の「ぜひ礼拝堂で行いたい」との思いから「栄光館」にての上演となります。

梅の花をこよなく愛した新島は、「庭上の一寒梅　笑って風雪を侵して開く　争わず又力めず　自ら占む百花の魁（さきがけ）」の詩を残しています。厳しい環境の中で困難や試練に耐えて、謙虚でありながら信念を貫く新島先生の体験から出た詩であり、生き方を表しています。

「庭上梅」は、新島襄が大磯で最後の初春を迎えた病床で、漢詩「庭上の寒梅」に託して自らの志を語る場面を中心として、老農夫のニドル、自責の杖、五平さん、同志社大学設立の旨意、遺言、書簡の一言葉などのエピソードや言葉により構成されています。

今回の上演は新島精神を受け継ぎ新たな未来を構築していくための道標となり、また「伝統芸能を未来へつなぐ」ことへの指標ともなることを願っています。

また、上演の前には同志社大学能楽部金剛会に所属されておられた作家の澤田瞳子氏に、能の歴史や同志社との関係について講演をいただきます。

（概要）
日時：2025年4月19日（土）13時30分～16時
場所：栄光館
　　（同志社女子大学／同志社女子中学校・高等学校）
プログラム：13時30分～　講演「庭上梅」をめぐって
　　作家：澤田瞳子氏
　　15時～　新作能「庭上梅」上演
　　出演　観世流シテ方　井上裕久氏他
主催：学校法人同志社／同志社紫謡会

入場無料・事前申込制
申込締切：2025年4月11日(金)
お申込み：右の二次元バーコードからお申込みください

お問い合せ先：学校法人同志社　創立150周年記念事業事務室
TEL：075-251-2710　E-mail：ji-150th@mail.doshisha.ac.jp

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

　ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、永らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【企画展】
第34回企画展　同志社創立150周年記念特別企画展
今、新島旧邸

期　　間：2025年4月15日(火)～6月15日（日）
場　　所：2階 企画展示室
主　　催：同志社大学同志社社史資料センター

当センターによる特別企画展の第1弾となる展示です。現在に至るまで旧邸で保存されてきた資料を実際に見て、創立150周年を迎える「今、新島旧邸」を体感してください。

新島旧邸2階の襖絵

【常設展】
同志社創立150周年記念特別常設展
新島襄　召命と志

期　　間：第1部　志
2025年4月1日(火)～6月1日(日)、10月7日(火)～11月30日(日)
第2部　キリスト教
6月3日(火)～8月3日(日)、12月2日(火)～2026年1月31日(土)
第3部　起業
8月5日(火)～10月5日(日)、2026年2月3日(火)～3月28日(土)
場　　所：1階 常設展示室
「同志社のあゆみ」「新島襄の人と思想」
主　　催：同志社大学同志社社史資料センター

新島襄が同志社を結社し、英学校を開校してから150年。節目を迎える今こそ、新島が何を志して、キリスト教の重要性を如何に考え、教育事業に邁進したのかを資料で振り返ります。

アンドーヴァー神学校時代の新島襄　1872年

【入 場 料】無料
【開館時間】10：00～17：00（最終入館 16：30まで）
【閉 館 日】日曜日（企画展開催中を除く）・月曜日・祝日・4月30日～5月2日・夏期休暇中の一定期間・年末年始
【場　　所】同志社大学 今出川キャンパス
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。

お問合せ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室
HP：https://harris.doshisha.ac.jp/
E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治8）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒8名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開しています。

【公開期間】4～7月、9～11月、3月

①通常公開　毎週火・木曜日（祝日は閉館）

②特別公開　毎週土曜日

春の特別公開（2025年4月1日～5日）

第34回企画展開催期間（4月15日～6月15日）の火・木・土曜日（4月29日、5月1日・3日・6日は閉館）

オープンキャンパス（8月2・3日〔仮〕）

秋の特別公開　10月1～5日

ホームカミングデー　11月9日

創立記念日　11月29日

大学卒業式　2026年3月20～22日

※公開日の詳細はHPをご覧ください。

https://archives.doshisha.ac.jp/archives/old_mansion/old_mansion.html

【公開時間】10：00～16：00（入館受付は15：30まで）

【見学対象】①通常公開

旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）。

②特別公開

旧邸周囲および建物内部（母屋1階と付属屋）に入場できます。

※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。

【入 場 料】無料

【場　　所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町

※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。

【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の1週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10：00～16：30）。※日・月・祝日は閉室

お問合せ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室
HP：https://harris.doshisha.ac.jp/
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736

同志社女子大学史料センター 第 28 回企画展
同志社女子大学の新たな挑戦：２１世紀の広報戦略

同志社女子大学は、2000年以降4学部6学科（英語英文学科と日本語日本文学科は学芸学部から表象文化学部に移設）を新設しました。そうした学部学科の新設に際して、本学は様々な広報活動を展開してきました。さらには、我が国において長い歴史を有する女子教育機関としての伝統を踏まえつつも、新たな時代の社会変化に対応する戦略を試行錯誤してきました。今回の企画展では、本学が21世紀における女子教育のあり方を、どのように志向し社会に発信してきたか、2000年以降の広報活動関連の資料を基に振り返る機会にしたいと考えています。

期　間：2024年11月22日(金)～2025年7月31日(木)
時　間：10：00～16：00
閉室日：土・日・祝日および5月1日～2日
　　（ただし、2025年4月29日、7月21日は開室しております。）
場　所：同志社女子大学史料センター
　　（今出川キャンパス
　　ジェームズ館1階展示室）
主　催：同志社女子大学

お問い合わせ：同志社女子大学史料センター
〒602-0893　京都市上京区今出川通寺町西入
TEL：075-251-4200　FAX：075-251-4201
E-mail：shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

同志社校友会からのお知らせ

同志社設立10年後の1885年に「アルムニ会」として発足したのが、同志社校友会の始まりです。活動の主な目的は、卒業生の親睦と大学との連携を通じた学生の支援です。現在、約37万人の会員となり、国内はもとより、各国に支部があります。

2020年春からコロナ禍となったことを受けて、経済的に困窮している学生支援のため、2020年5月から6月にかけて外出が困難となる中で、近隣の商店街やスーパーで利用できる食生活支援クーポンを配付し、一人暮らしの食生活サポートを行う事ができました。

その後、2020年秋には、大学内の食堂において、コロナ禍の学生への経済的な負担を軽減するための支援を行い、2022年12月には累積で約33万人の利用がありました。

2023年度になり大学の授業がコロナ前の状態に戻ったことを受けて、経済支援から栄養バランスのとれた食育への支援に切り替え、大学内の食堂で捕食として小鉢の提供をしました。2024年度は、秋学期から朝食支援を通じて、規則正しく充実した学生生活を送ってもらえるよう対応しています。

今後も学生に寄り添った支援を実施していく予定です。

活動の概要

①卒業生と繋がる同志社校友会

2024年12月現在、国内に48の支部、海外に36の支部が存在しています。現地の校友会ネットワークが卒業生に対してサポートを行っています。

連絡先は、ＱＲコードまたは、同志社校友会 で検索してください。

②大学と繋がる同志社校友会

同志社大学が掲げるリーダー育成、グローバル化への支援、「同志社大学2025 ALL DOSHISHA募金」の推進など大学と連携した活動を行っています。

③学生を支える同志社校友会

「同志社校友会奨学金」、「同志社スポーツ奨学金」、海外留学生支援として「グローバル人材育成奨学金」など各種給付型の奨学金制度を通じて学生生活が充実するようにサポートを行っています。

同志社校友会本部事務局
TEL　075-251-4393
E-mail info00@doshisha-alumni.org

同志社同窓会の歩みと年間行事・事業

＜同志社同窓会とは＞

同志社同窓会は1893年に同志社女学校の同窓会として設立されました。それは1876年の女学校創立より17年後のことで、96名の母校愛あふれる卒業生と有志らによるものでした。制定された規約の第1条には「会員たるものは相互の交誼を密にし且同志社女学校の益を図るを目的とする」とあります。

創設132年となる同志社同窓会は、女子大学、大学院、女子高校および中学、旧制女専、高女の卒業生・修了生によって構成されており、62支部（国内59支部、海外3支部）に95,000名を超える会員を有しています。同志社女子大学《Vineの会》と同志社女子中高同窓会「同志社ゆかり会」もふくめ、同志社女子部全体の同窓会です。

＜同志社同窓会の歩み＞

母校で「地の塩・世の光」（マタイ5：13）となるようにと教えられ育まれた卒業生たちは卒業後も良き姉妹として年に1度「母校に帰る日」を決めて集まり、礼拝をもって総会を持ち、年会（大同窓会）を開いたとの記録が残っています。それは今も引き継がれています。また、現在の「同志社同窓会報」の前身である「同志社女学校期報」が同窓会の創設事業として発行されました。そして同志社を愛し、女学校と生徒・卒業生らを愛し、同志社栄光館を建てるためにも尽力されたM.F.デントン先生から多大な感化を受け、その教えを守って様々な活動を続けています。母校への寄付金を集めるためにと教えてくださったバザーは同志社同窓会の大切な行事の一つになっています。

年間活動と行事・事業

春（5月）と秋（9月）の幹事会

7月　同志社同窓会総会
　　3年に1度は総会の前日に支部長会開催

10月 バザー開催

11月 全同志社リユニオン（法人同志社、同志社大学、校友会と共催）
　　同窓会ルームで催物

12月 ミス・デントン永眠記念墓前礼拝（相国寺 長得院の墓前での礼拝）

2月　新島襄生誕記念会（学校法人同志社、同志社校友会と共催）

3月　女子高、女子大学卒業生対象入会式

その他、奨学金贈呈や会報の発行、同窓会館の運営（紫苑会講習としてヨーガ、華道、茶道、料理教室を開講）、貸室、女子中高購買・食堂の運営

＊ホームページhttps://www.dojo-doso.org

＊E-Maildojodoso@juno.ocn.ne.jp

編集後記

本号では「同志社の環境教育を考える」と題した特集座談会の記事を掲載しています。その狙いは、わたくしたちが「環境」をもっと身近に感じ「環境」を自分のこととして認識するところにあります。

「環境」という概念は、きわめて包括的であり、わたくしたちの周りにある事物とかそこで起きているできごととかを包み込んでいます。しかも、そうしたものごとは、わたしたちの近くにあったり、わたしたちから遠く離れていたりします。とはいえ、わたくしたちは、「環境」から離脱しては生きられません。わたくしたちは、有機体として、「環境」との相互的作用の中でみずからの生命を維持し生活を整え人生を歩んでいます。このような「環境」を大きく「自然的環境」と「社会的環境」に分けられるでしょう。

「自然的環境」の破壊に対する取り組みが地球的規模で喫緊の課題となっている現代では、子どもたちが周囲の「自然的環境」に触れることは、なおさら重要になってきています。座談会の記事が紹介しているように、子どもたちが学校内にある「自然的環境」にじかに触れて学びを体験的に広げ深めていくための活動は、子どもたちが「自然的環境」を巡る問題を自分のこととして考えるときの大切なきっかけとなっています。言うまでもなく、学校内に留まらずに学校の外に出て実際の「自然的環境」をしっかりと観察するのも子どもたちの成長には欠かせません。

確かに、「環境」を「自然的環境」と「社会的環境」に区分できはします。とはいえ、それらは、互いに結びつき合い連動し合っています。座談会の記事が指摘しているように、わたくしたちは、「社会的環境」の歪みが「自然的環境」を悪化させているという現実にも直面しています。あるいは、「社会的環境」のいびつなあり方は、「自然的環境」について、膠着した見方をわたしたちに与え、わたくしたちの思考を停止させてもいます。その結果、わたくしたちは、「自然的環境」の示す力強さを実感できないようになっています。だから、こう言ってもよいでしょう。「社会的環境」の充実が「自然的環境」を豊かにし、「自然的環境」の維持が「社会的環境」を支えている、と。それゆえ、わたくしたちにとって、「社会的環境」を欠いた「自然的環境」は、けっして存在せず、「自然的環境」を無視した「社会的環境」は、まったく存続せず、「環境」は、わたくしたちの「文化」を意味しているのです。

ご多用の中、本号にご寄稿いただいた諸氏には、この場を借りまして篤くお礼を申し上げます。煩瑣な編集の作業にご尽力いただいた広報課の末廣明日香氏にも深甚の感謝を申し述べたいと存じます。

（新）

●同志社広報委員会小委員会委員

○印委員長

○大学文学部教授　新　茂之
大学神学部教授　三宅威仁
大学社会学部教授　梶谷真也
大学法学部教授　望月詩史
大学経済学部准教授　原田禎夫
大学商学部教授　髙橋広行
大学政策学部教授　多田　実
大学文化情報学部准教授　星　英仁
大学理工学部教授　近藤弘一
大学生命医科学部准教授　髙柳真司
大学スポーツ健康科学部教授　石井好二郎
大学心理学部教授　神山貴弥
大学グローバル・コミュニケーション学部教授　内田尚孝
大学グローバル地域文化学部助教　宮嵜克裕
女子大学学芸学部教授　牛渡克之
女子大学現代社会学部教授　竹井　史
女子大学薬学部教授　根木　滋
女子大学看護学部教授　三橋美和
女子大学表象文化学部准教授　宮腰直人
女子大学生活科学部准教授　米田祐子
中学校・高等学校事務長　鎌田伸一
香里中学校・高等学校事務長　池上　作
女子中学校・高等学校事務長　磯田信行
国際中学校・高等学校事務長　貴志浩行
小学校事務長　川嶋久佳
国際学院事務長　堀岡英利
幼稚園教諭　竹中琴恵
法人事務部長　柳井　望
大学広報部長　木下裕之
法人事務部校友同窓課長　田中裕一
大学広報部広報課長　中原伸夫
女子大学広報部広報室広報課長　前野　健

※職名は同志社広報委員会小委員会発足時のものです。

●編集協力　アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：1冊249円）のみのご負担でご講読いただけます。
・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
・宛先　〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学広報課

同志社時報　第159号
編集人　新　茂之
発行人　八田英二
発行　学校法人同志社
同志社大学広報課
電話（075）251－3120
印刷所　株式会社あおぞら印刷
２０２５年４月１日発行